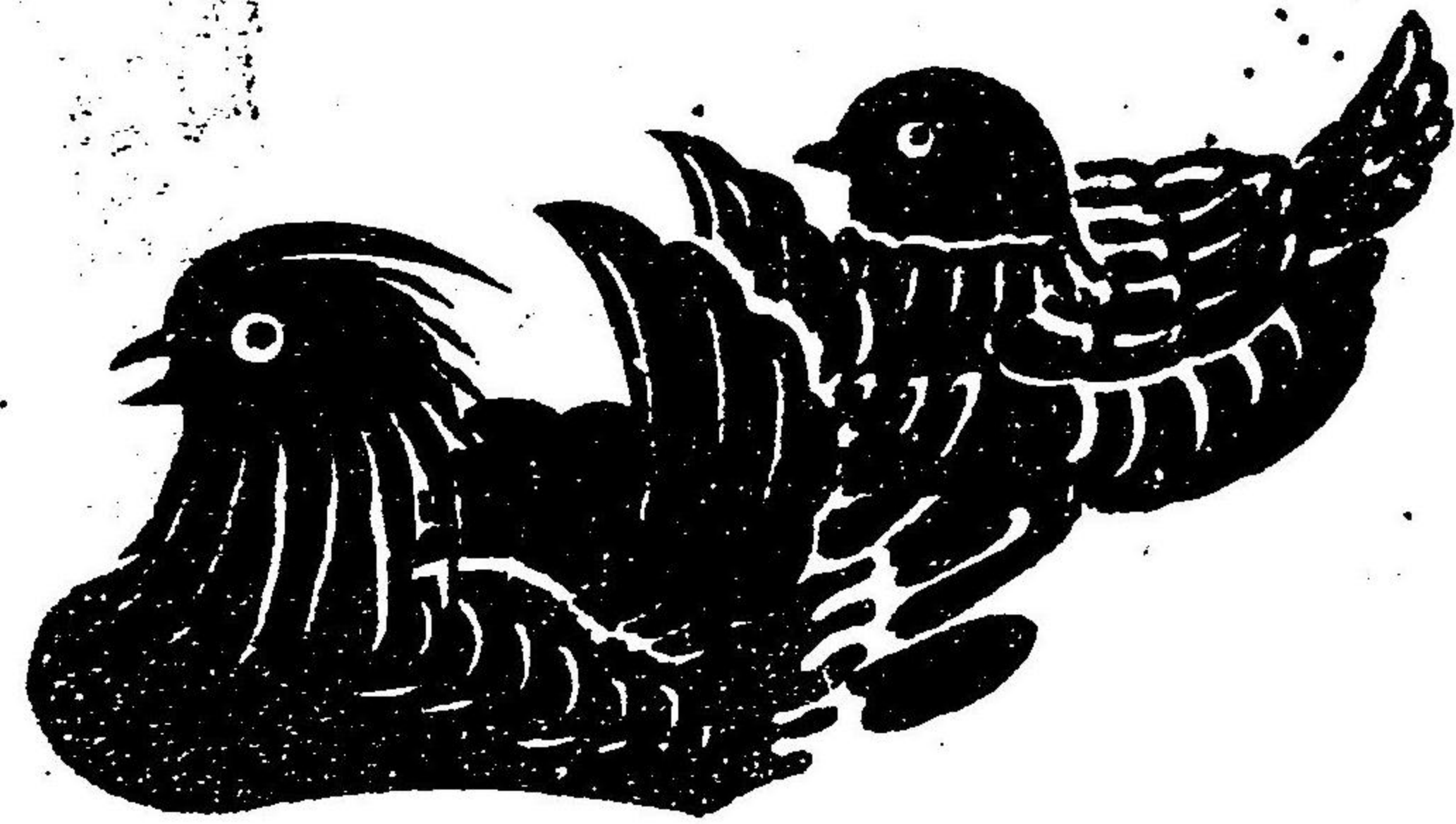


7 21 e 33

七  
鏡

DH468  
689



DH 468

689

題氷面鏡辭

柳櫻の春の錦。月と梅との染模様。霞の衣。今  
やたゞむこ。天地も有情の粧を作し。萬物陽  
和の色を競はむこするに當りて。奈何を斯  
の儀有り禮有るの人間。獨り舊態の垢を蒙  
りて。彼の花木の麗しき。或は野山の新なる

に羞づべけむや。而も衣は身の章なり。之を取  
るに必ず擇ばずはあるべからず。若し擇  
びて宜からば。水聲山色門を出づれば。春時  
に風有りては。翠の絲にほしいまゝなる紅  
も打匂ふらむを。則ち謂へらく。善く此の册  
子を用る者は。應に鶯花世界に入りて。道の

千草をも靡すべしと云く。

于時明治三十三年小春吉日

十千萬堂 紅葉

三井呉服店三十三号小倉店

三井呉服店

# 氷面鏡

(一名三井呉服店案内)

## 目次

### 題氷面鏡辭

### 挿繪

- 三井呉服店本店表口の圖
- 三井呉服店本店裏口の圖
- 三井呉服店本店階上階下平面圖
- 大坂三井呉服店陳列場の圖
- 綴織丸帶地 扇面ぢらし
- 裾模様 高砂
- 裾模様 春の野
- 裾模様 隅田川
- 裾模様 更紗梅
- 裾模様 霞に柳櫻

裾模様 染分竹  
綴の錦元祿模様丸帯地  
長襦袢 翁格子に花の丸  
長襦袢 磯旭  
友禪縮緬櫻模様の夢想羽織  
夢想羽織大津繪ありび  
大幅緋緞子綴帳狩野探幽齋筆金銀色絲縫取鳳凰模様  
小紋の色々  
小紋の色々

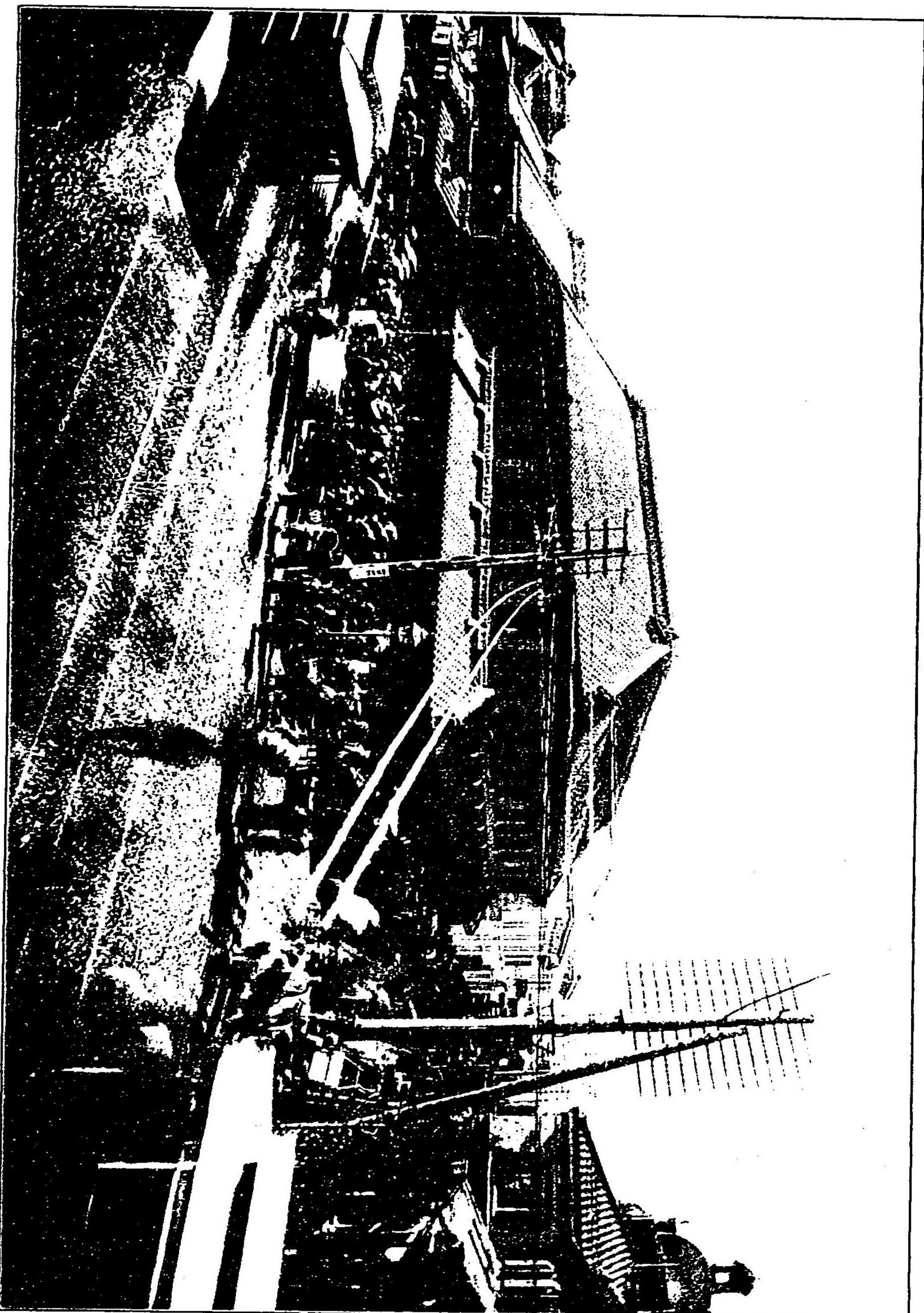
### 三井吳服店事業の説明

三井吳服店本支店出張所工業所  
吳服物販賣店  
商賣の多少を問はざる事  
現金正札附の事  
陳列場の事  
品物を持参して賣る事

地方の註文に應ずる事  
寄切室の事  
吳服物切手の事  
新案の模様縞柄の事  
誂物の事  
爲替振込所の事  
吳服物仕入店  
染物工場  
輸出織物店  
生絲製造所  
製造品の事  
製品販賣の事  
器械及製造高の事  
絹絲紡績所(新町現用の商標及目印)

地方御註文の栞  
流行衣裳

明治三十三年十月十五日三井吳服店本店總陳列場開場の第一日  
午前九時三十分店前入口雜踏の景



當日は午前六時の開場にして午前九時半に至るまで山を成して  
入場せし來客數正に八千五百場内立錫の餘地なきを以て巴むを  
得ず一時門を閉ぢ入場を謝絶するに至る間中正而入口の戸を鎖  
ぢたるは之が爲なり

御禮式用御衣裳見積表(仕立)

吳服物代價表

衣服裁方積方の事

錦上百花

植物模様

新譜

始めて蠶を養ふ記

去年の春

かゝ重簾筒

袖模様

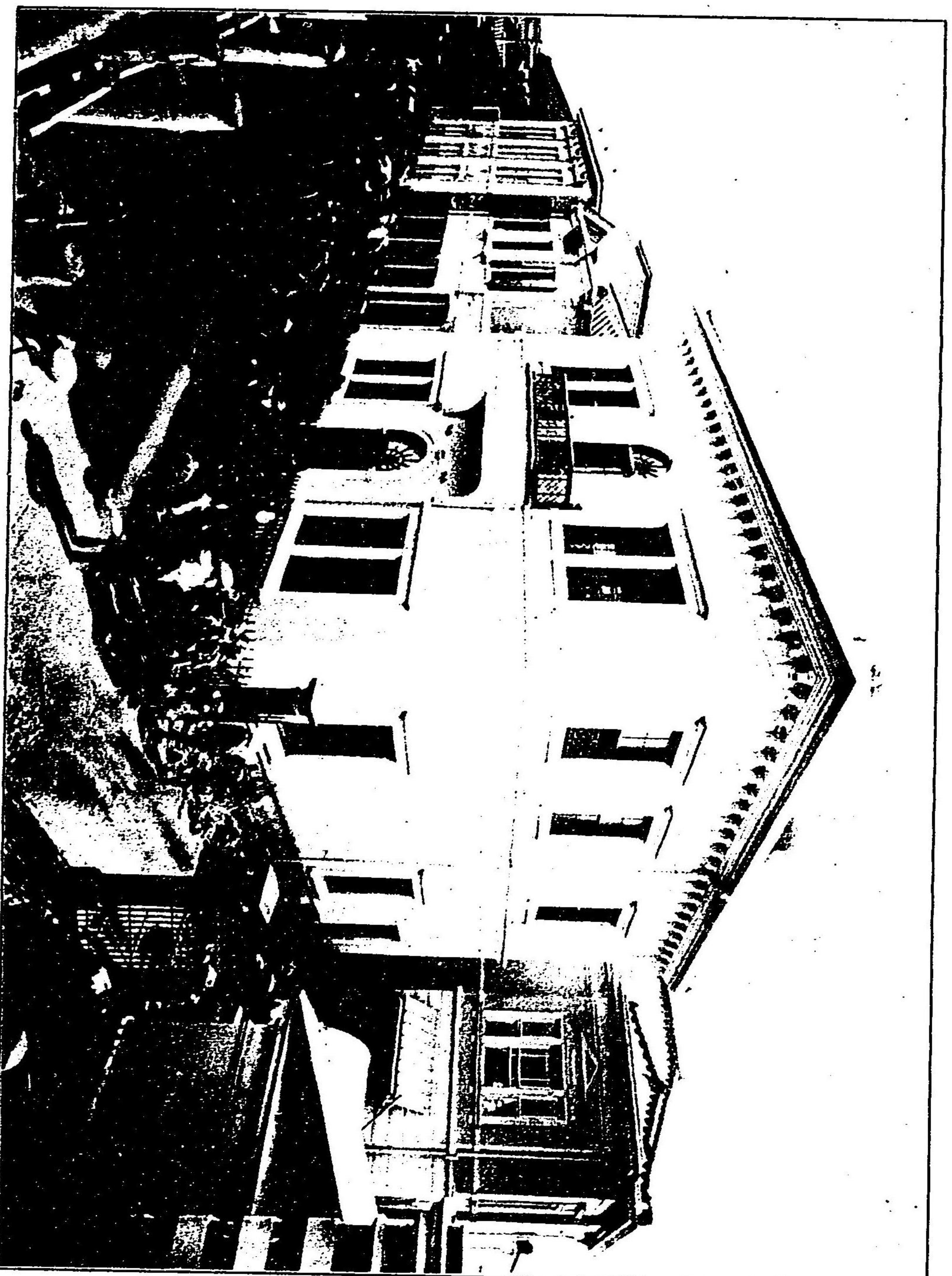
黒紬

附録

合名會社三井銀行案内

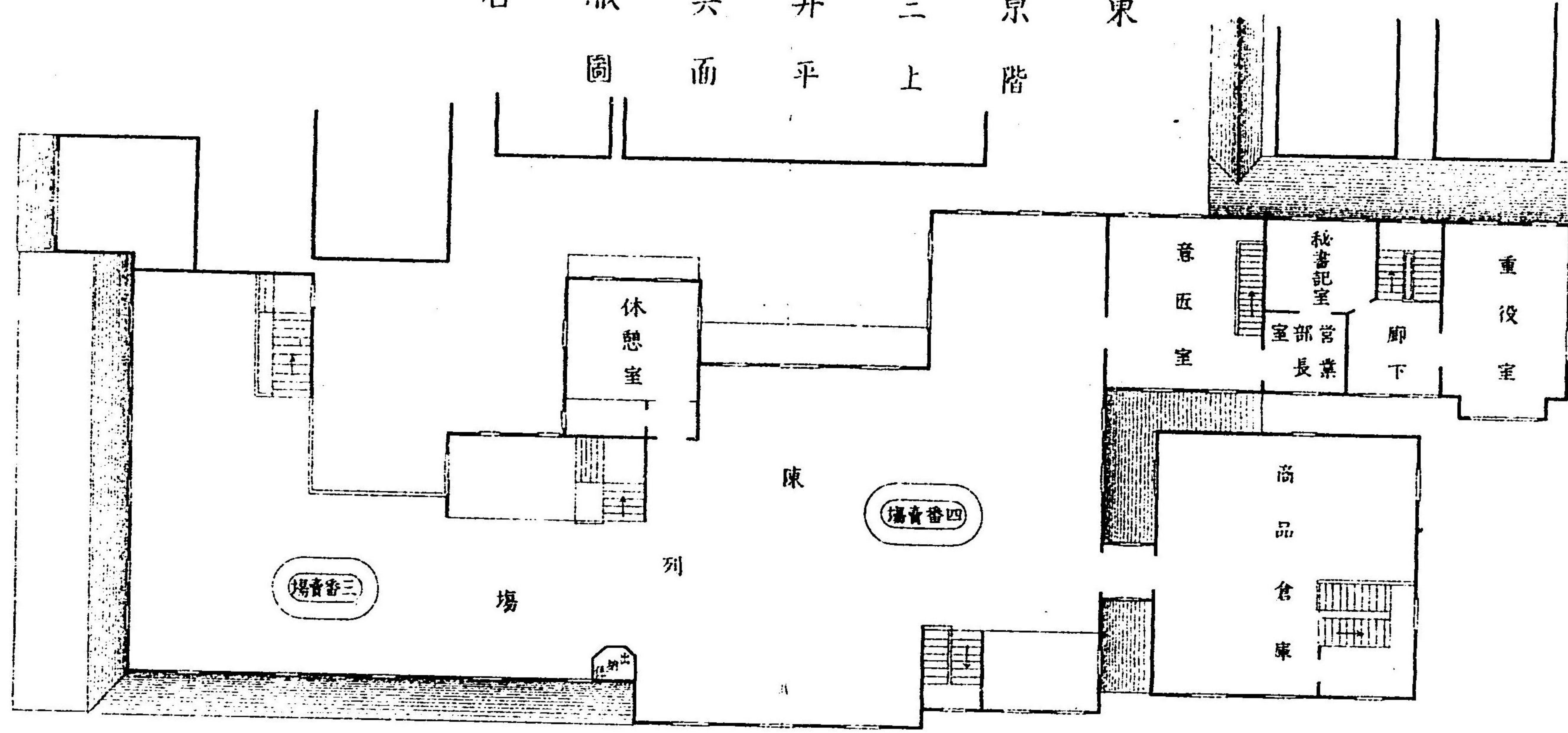
以上

明治三十三年十月十五日三井呉服店本店總陳列場開場の第一日  
午前九時三十分駿河町通來客出口の景

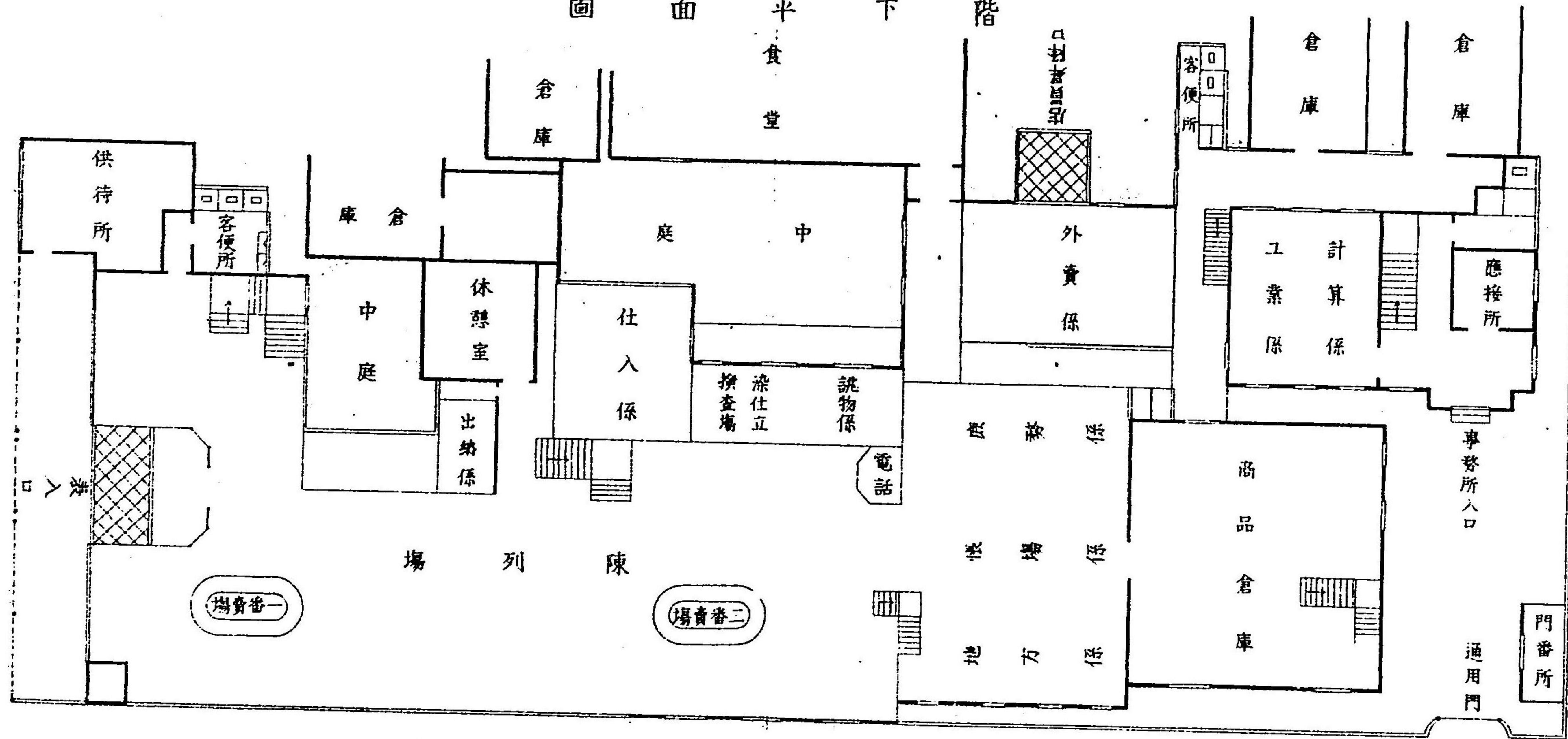


總陳列場を側面より見たる圖

東 京 三 井 吳 服 店  
階 上 平 面 圖

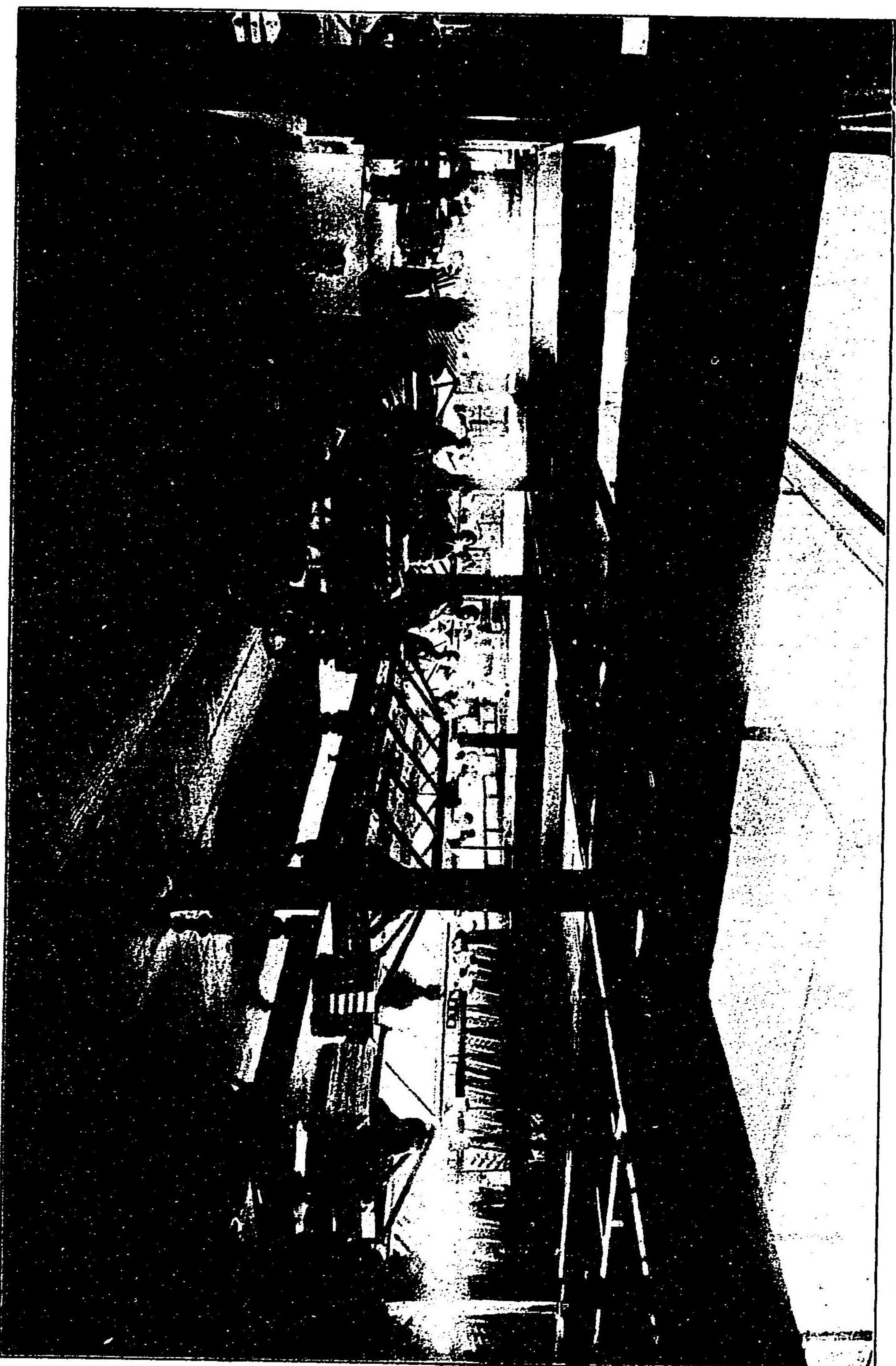


東 京 三 井 吳 服 店  
階 下 平 面 圖



日本橋通（室町三丁目）





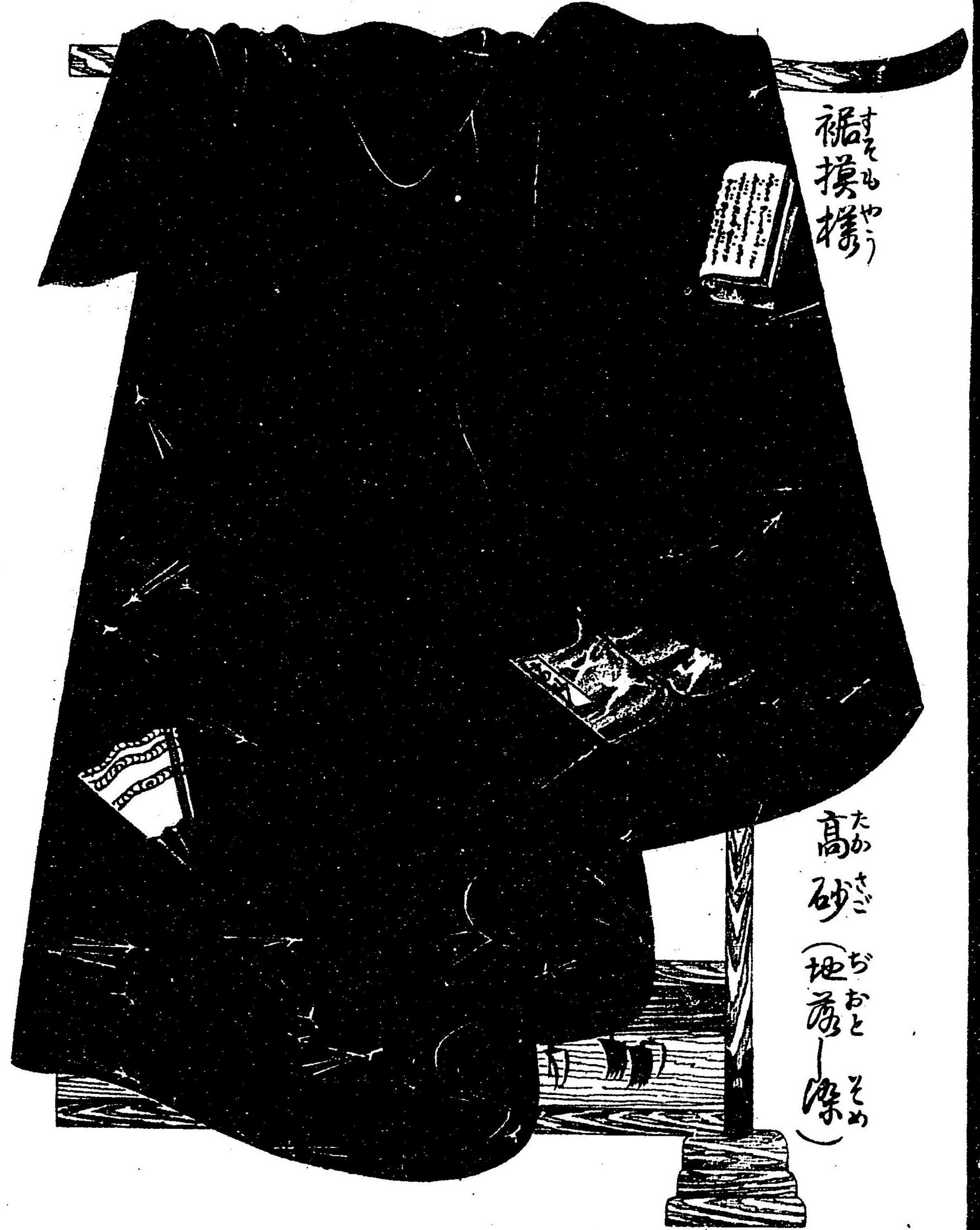
大坂高麗三井呉服店陳列の圖

ついでに  
綴織丸帯地

せんめん  
扇面ぢり

くわん  
光琳様





裾  
模  
様

高  
砂  
(地  
蔵  
一  
深)

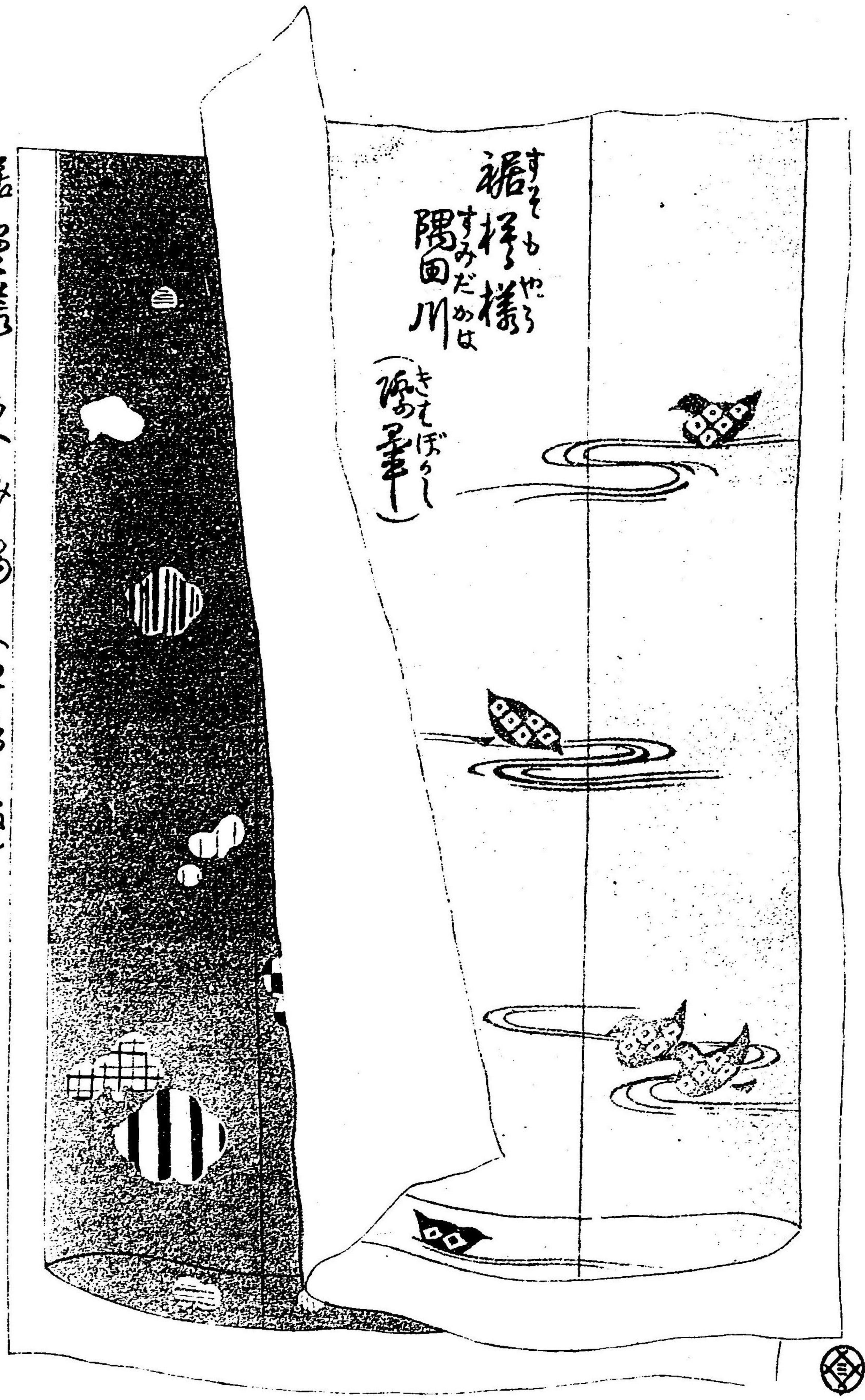
裾<sup>すそ</sup>揺<sup>ゆ</sup>り

春<sup>はる</sup>の野<sup>の</sup>

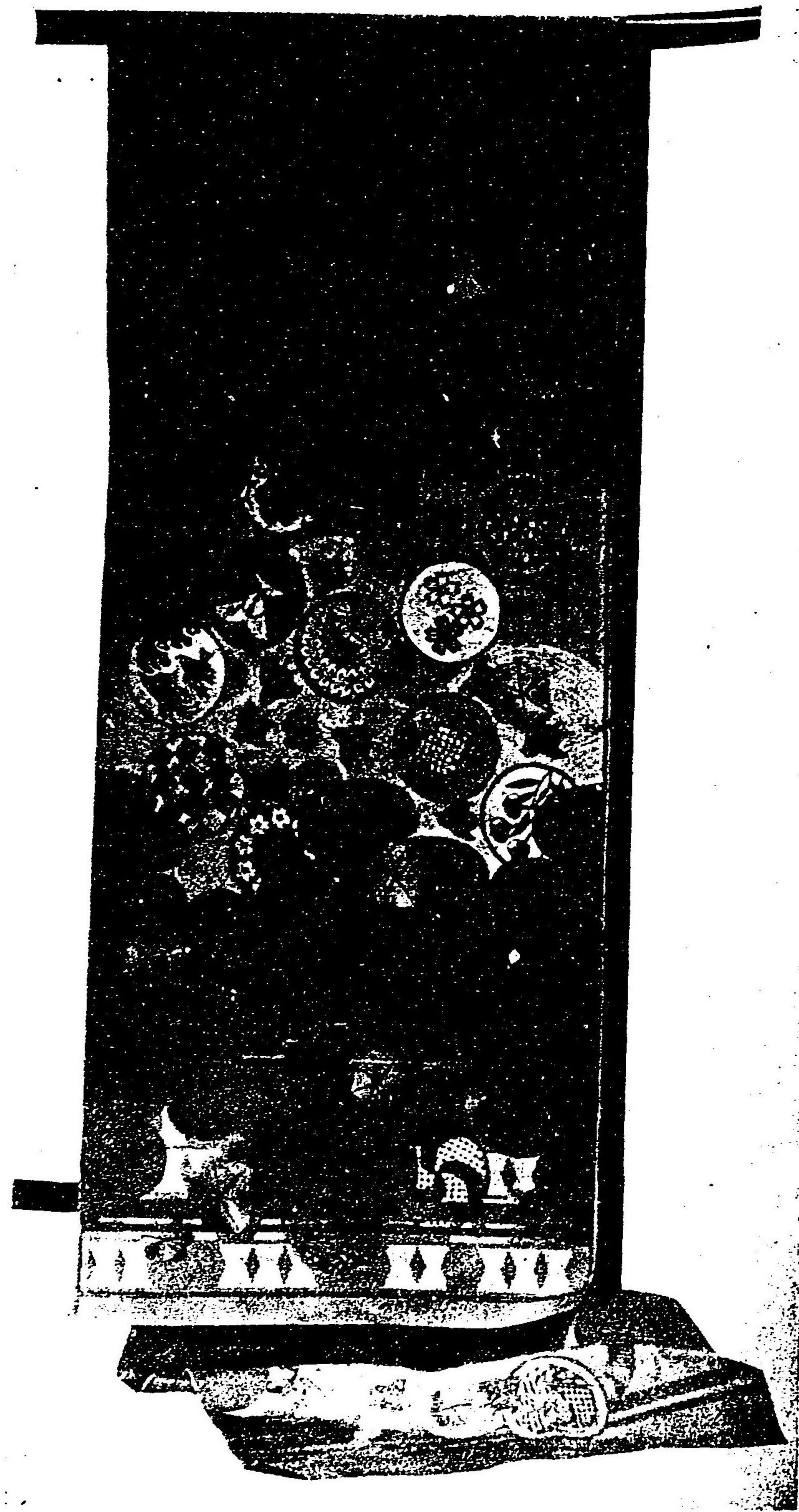
(地<sup>ち</sup>落<sup>おと</sup>し深<sup>ふか</sup>)



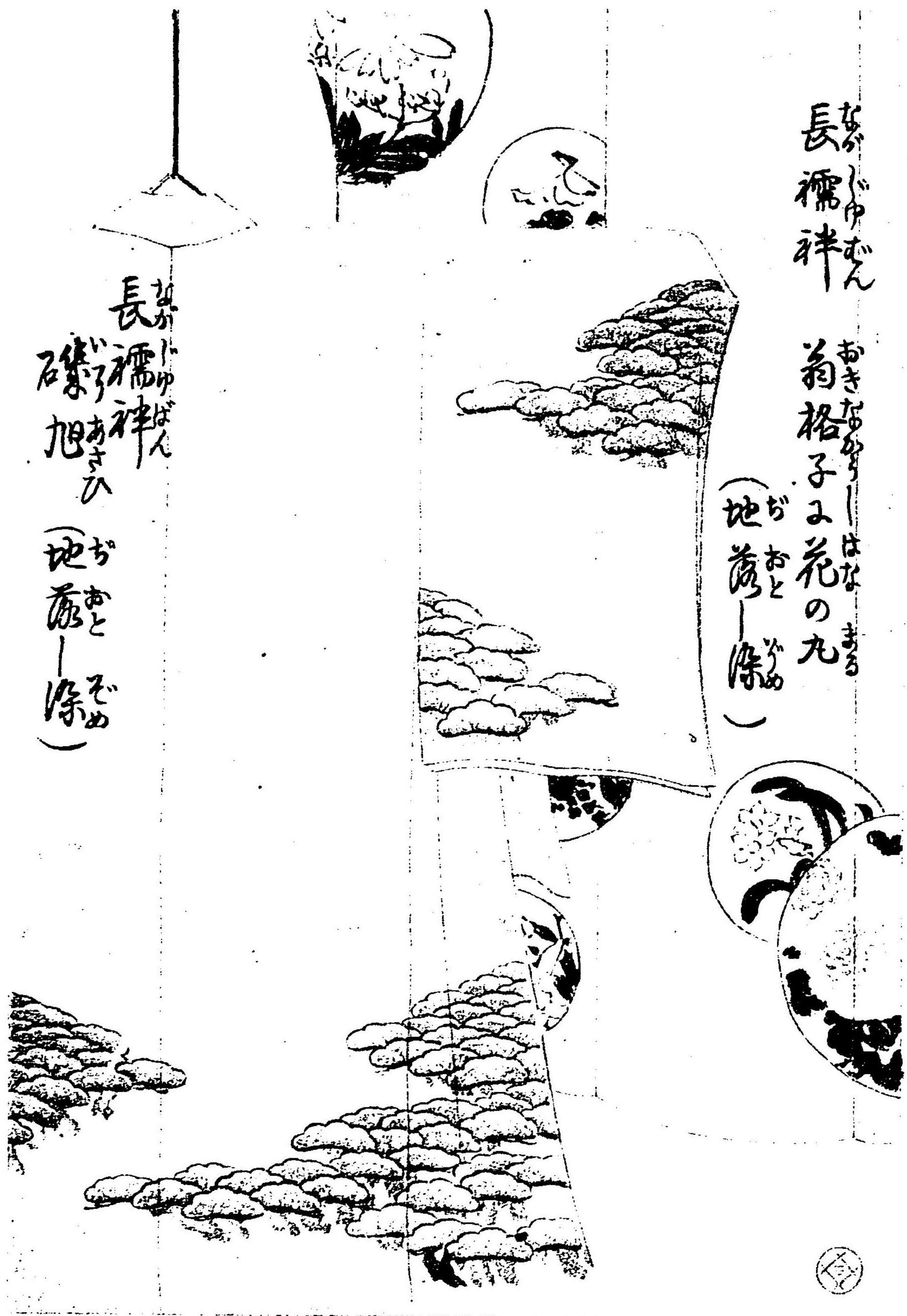
裾控様 更紗柄 (地蔵海)







地帯丸様模祿元錦の綴 ④



長なが襦じゆ袷あは はん  
石い籠ろ あき み  
旭あ か おと  
地ち おと  
落お あ  
條じょう

長なが襦じゆ袷あは はん  
菊きく あき な か り  
格かく あ は な ま る  
子こ あ は な ま る  
花はな あ は な ま る  
のの あ は な ま る  
丸まる あ は な ま る  
(地ち おと あ は な ま る 條じょう)

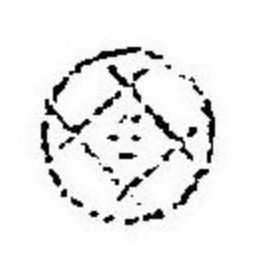






織羽想無の様模<sup>藤</sup>櫻禪友緬縮⊗  
様模の身ッ四梅竹松染禪友緬縮⊗

織り羽想夢む  
びそあ絵る津つ大津

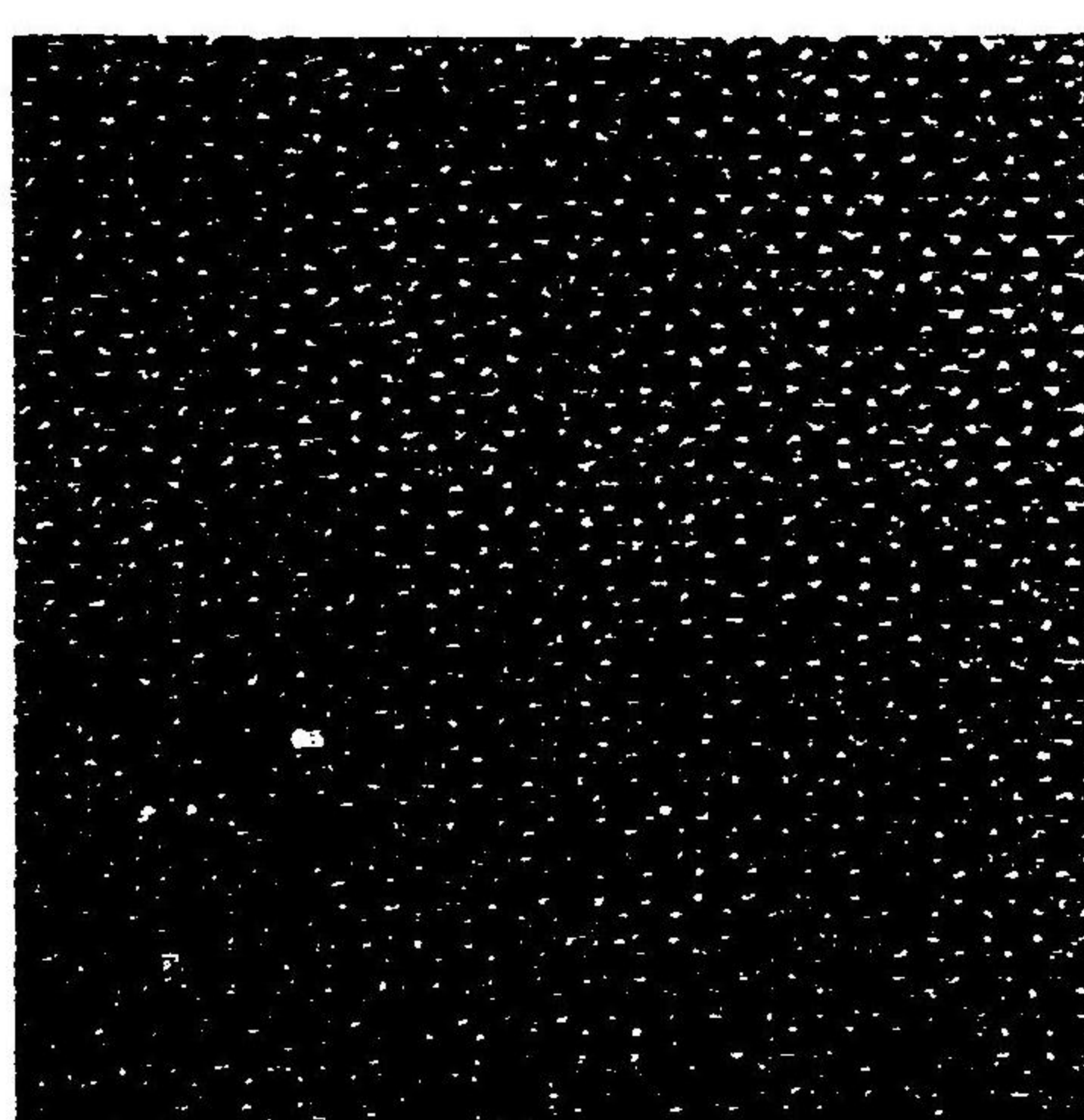
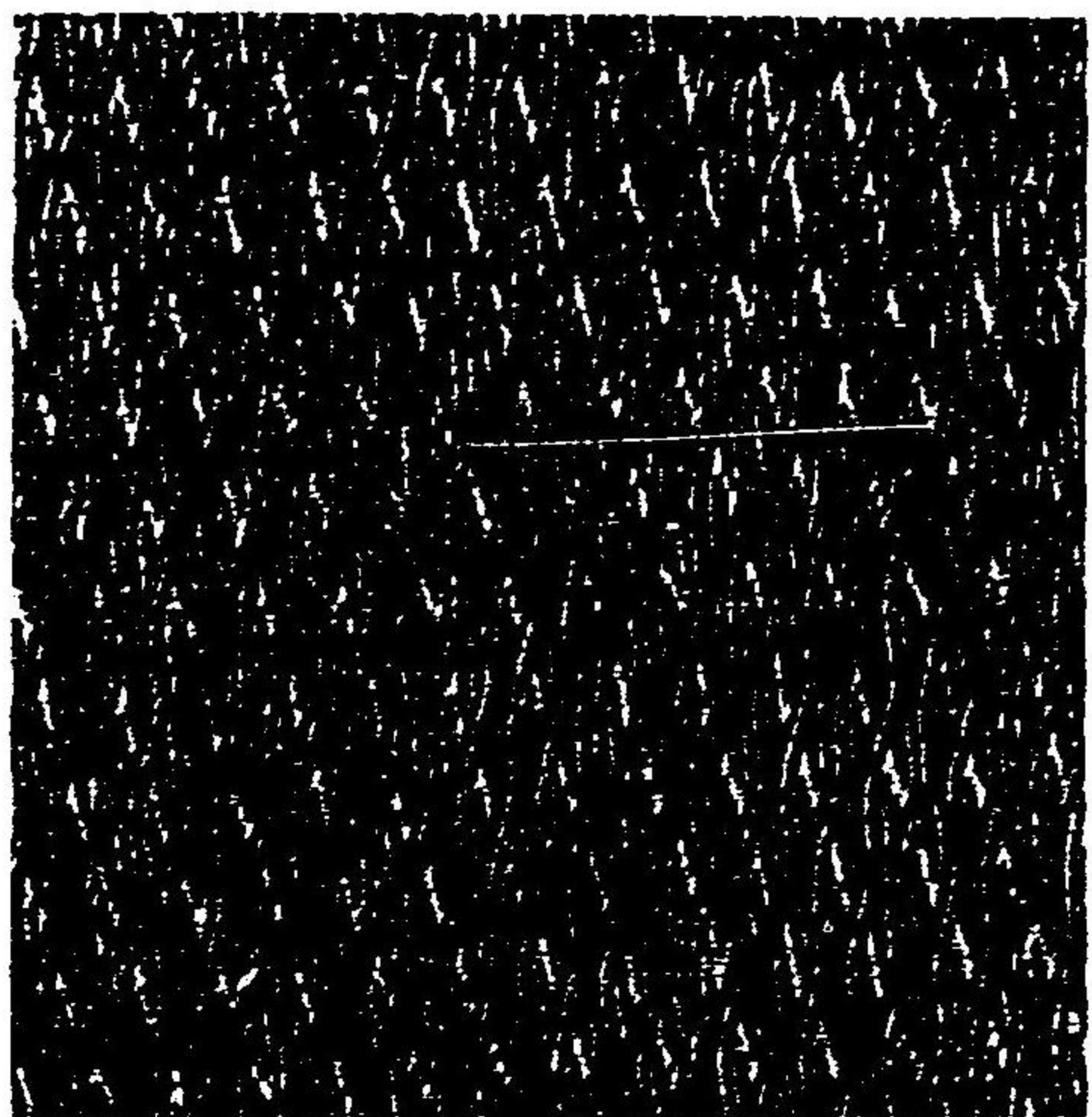
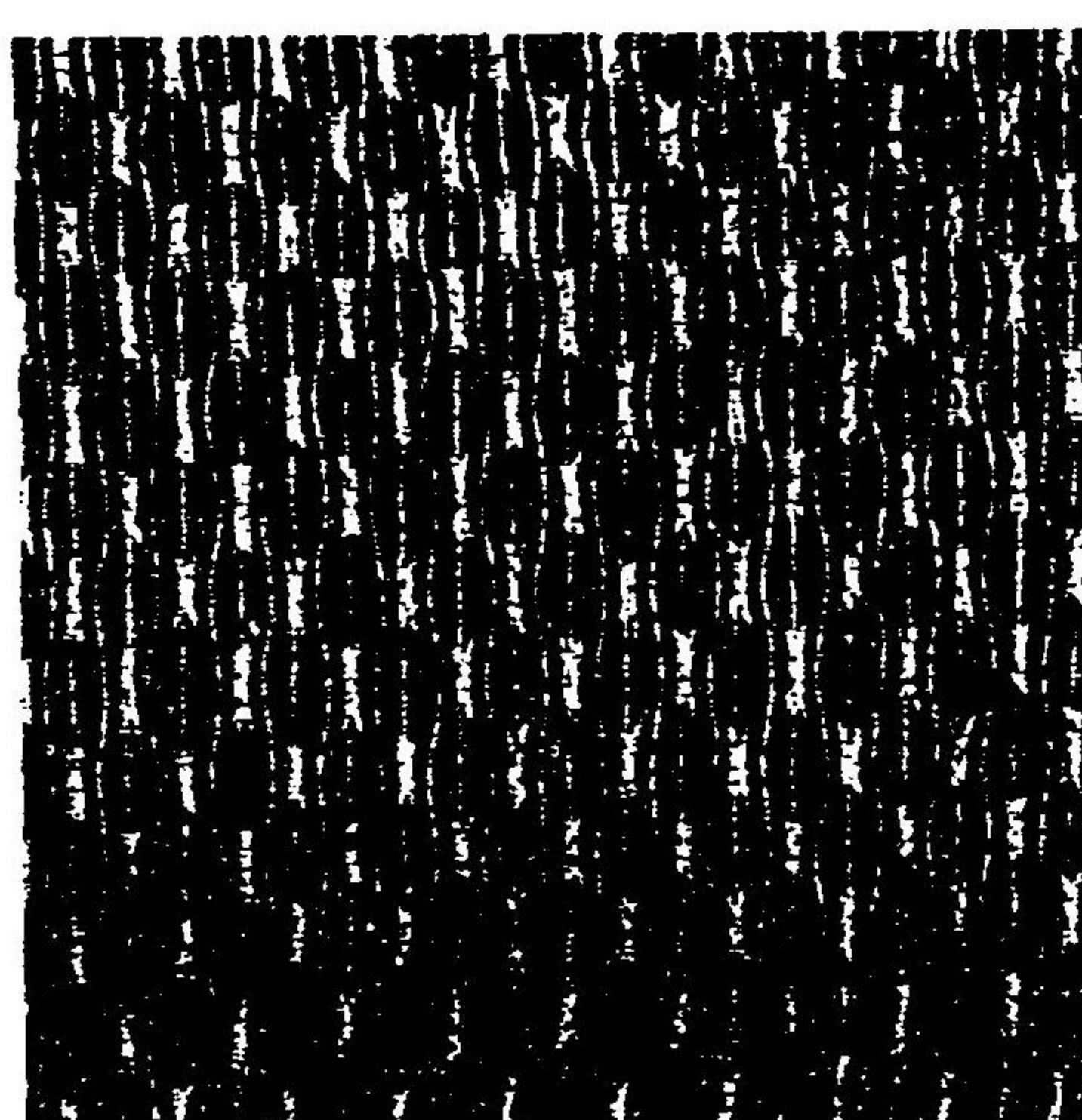
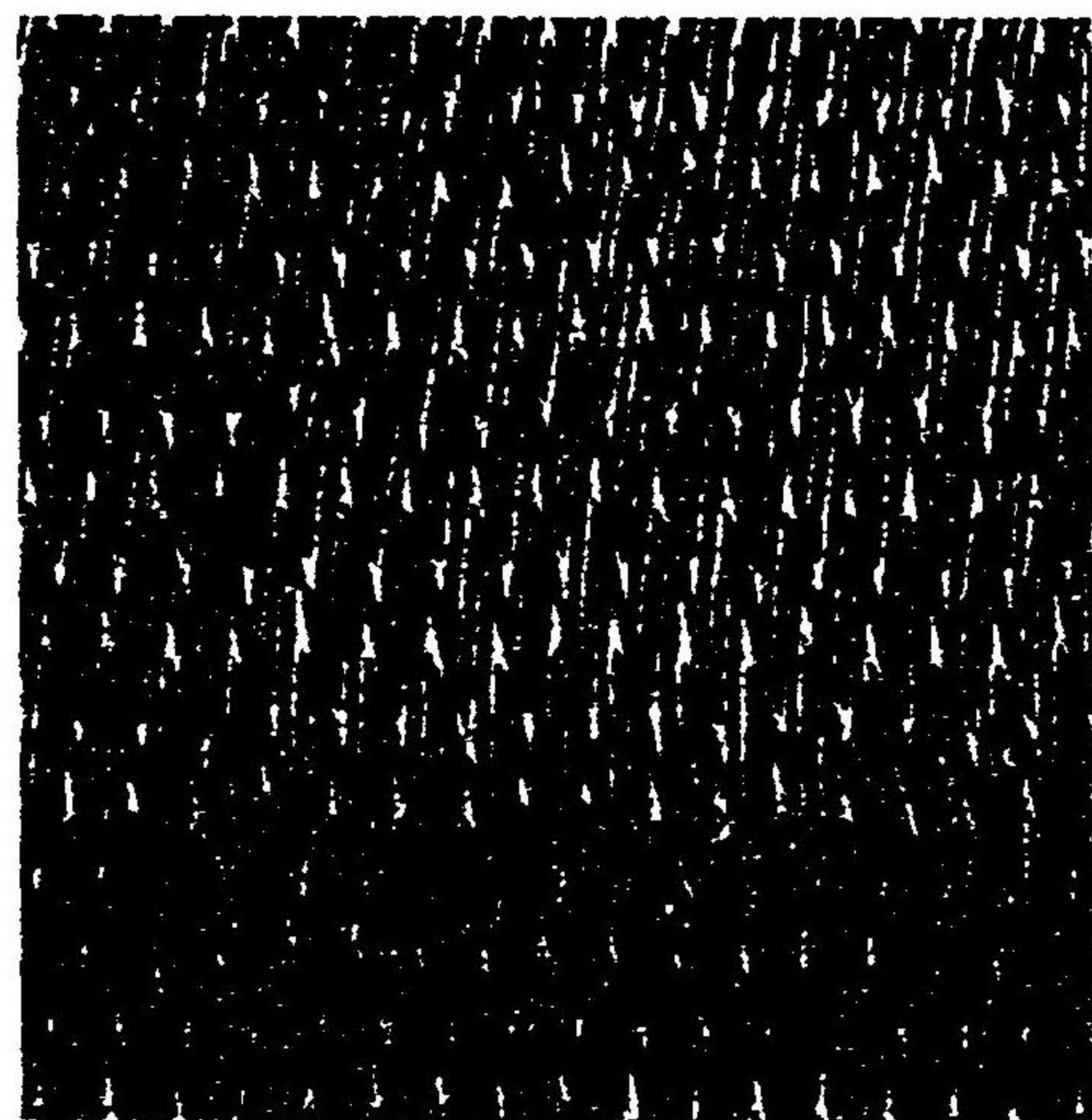
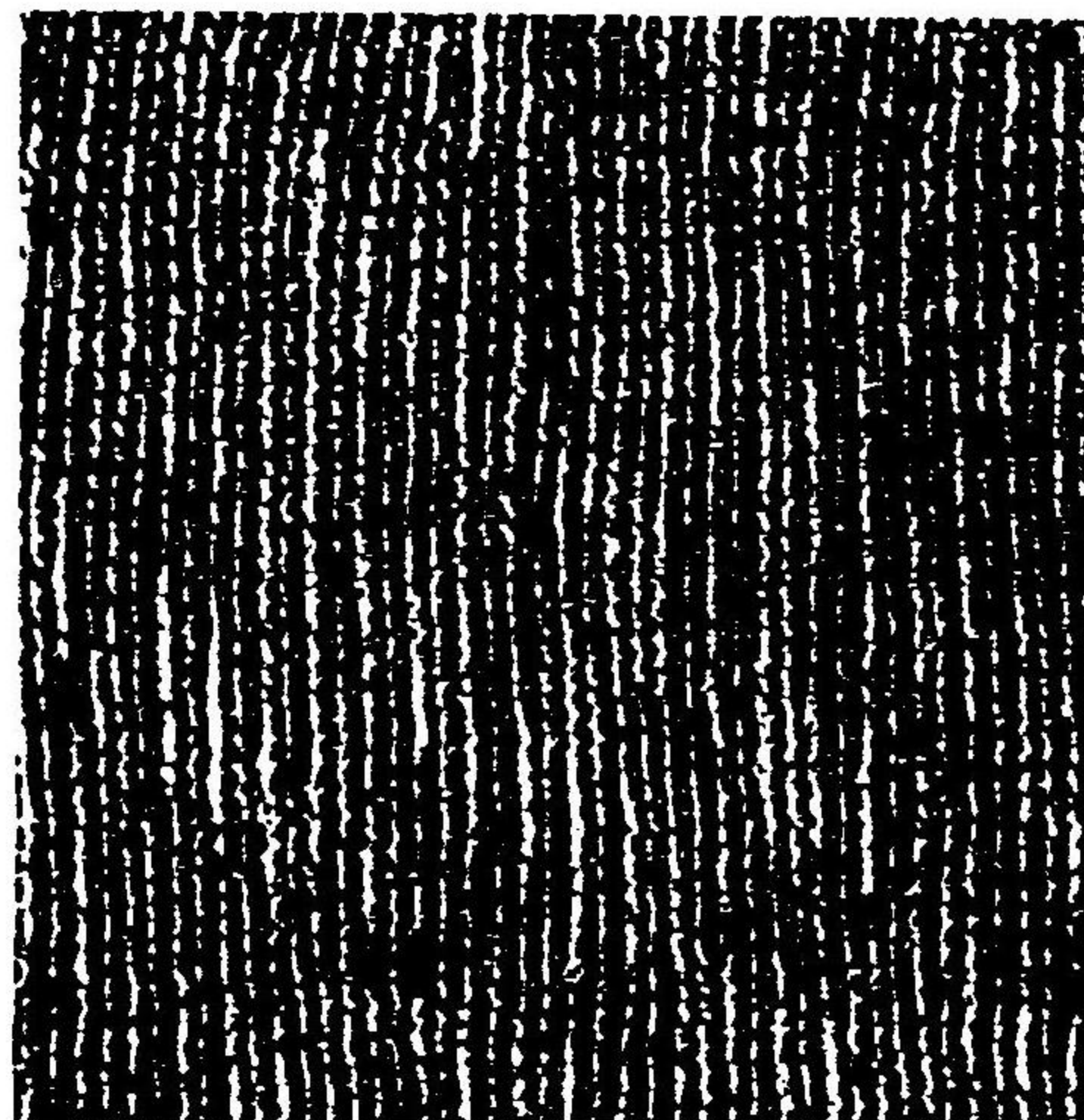
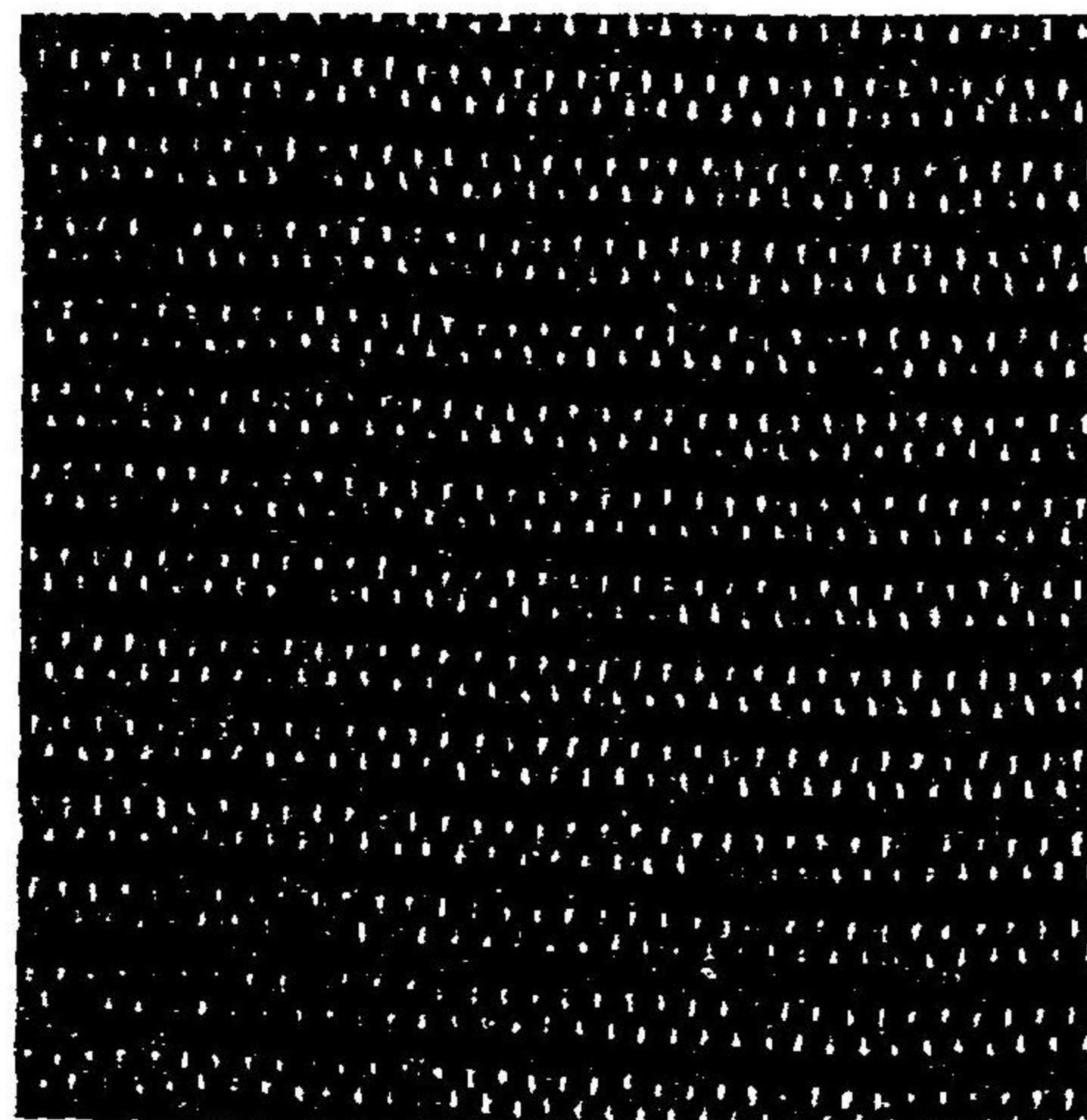


號甲品賞懸票投氣人及倆技(上以歳五卅)優俳練老國全の集募社開新日毎阪大間月隔二りよ日十月五年本

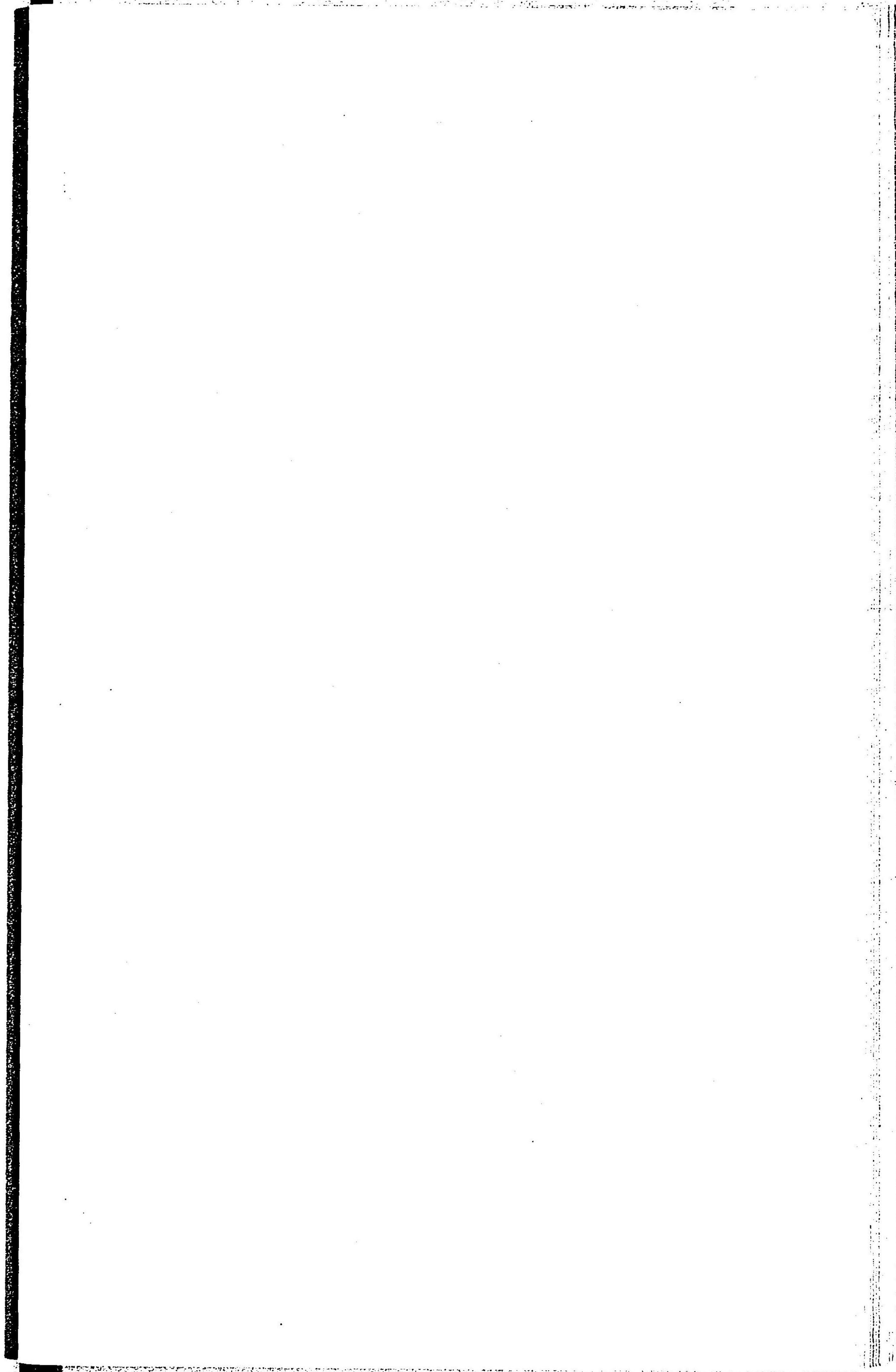
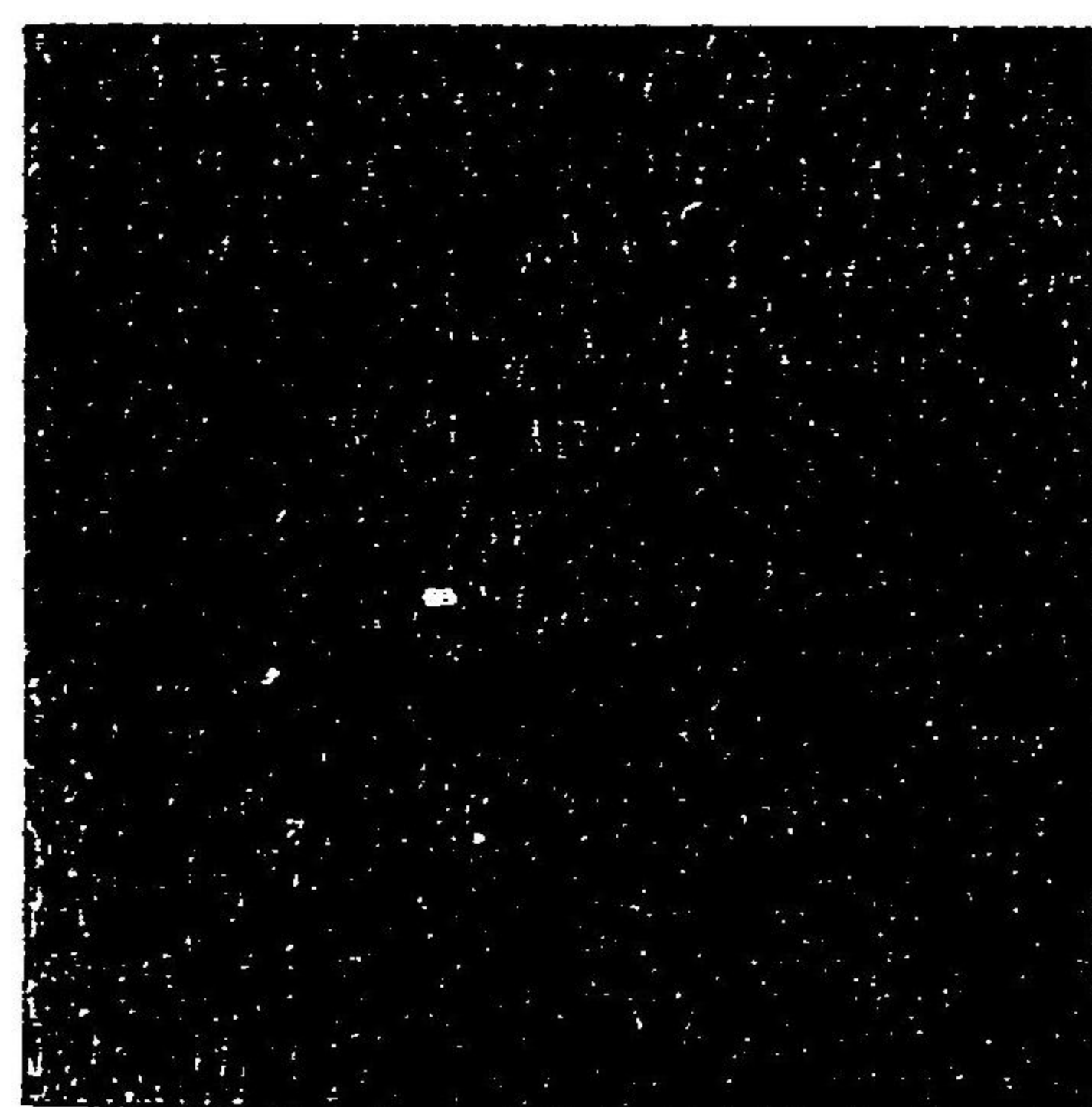
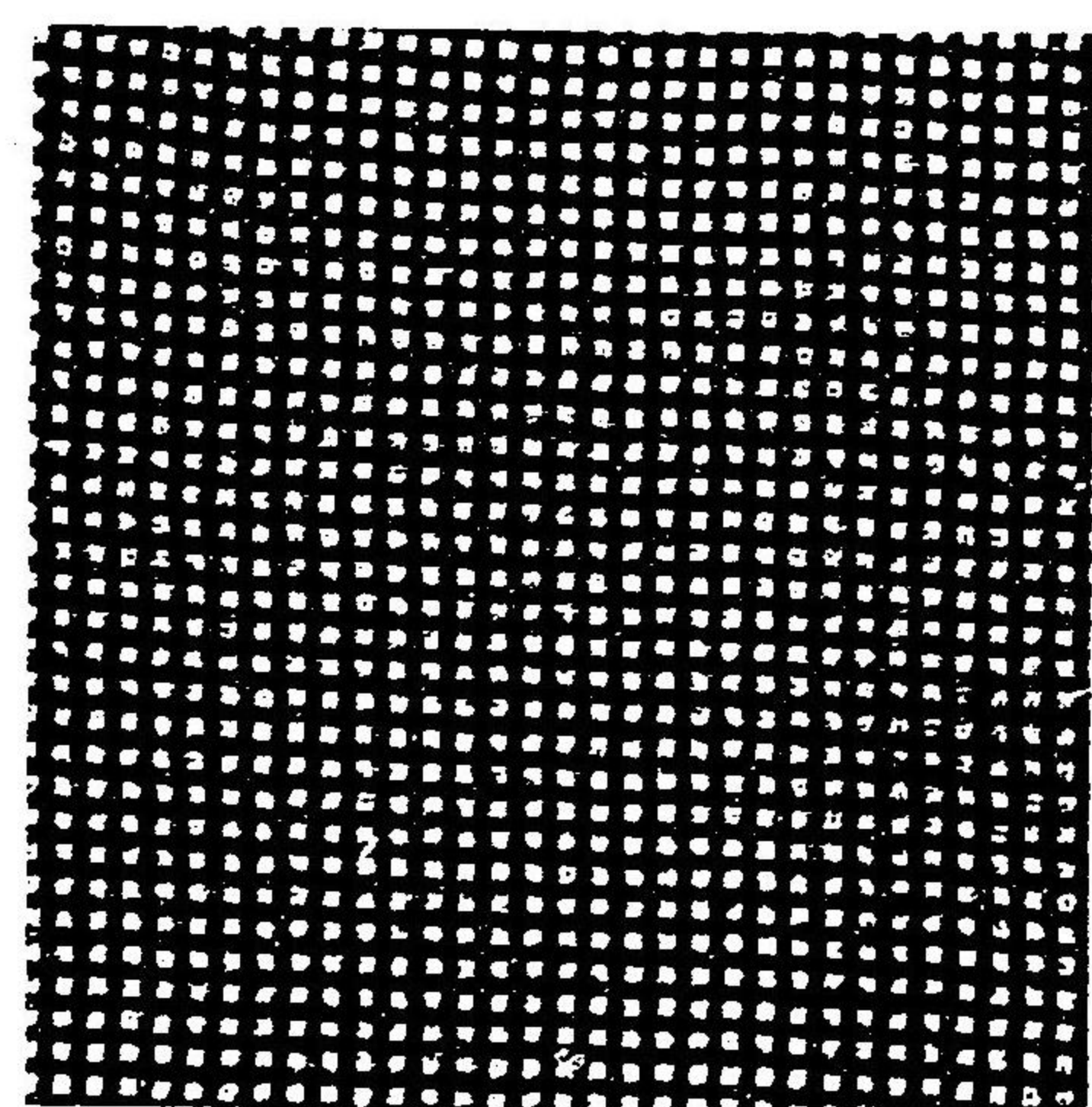
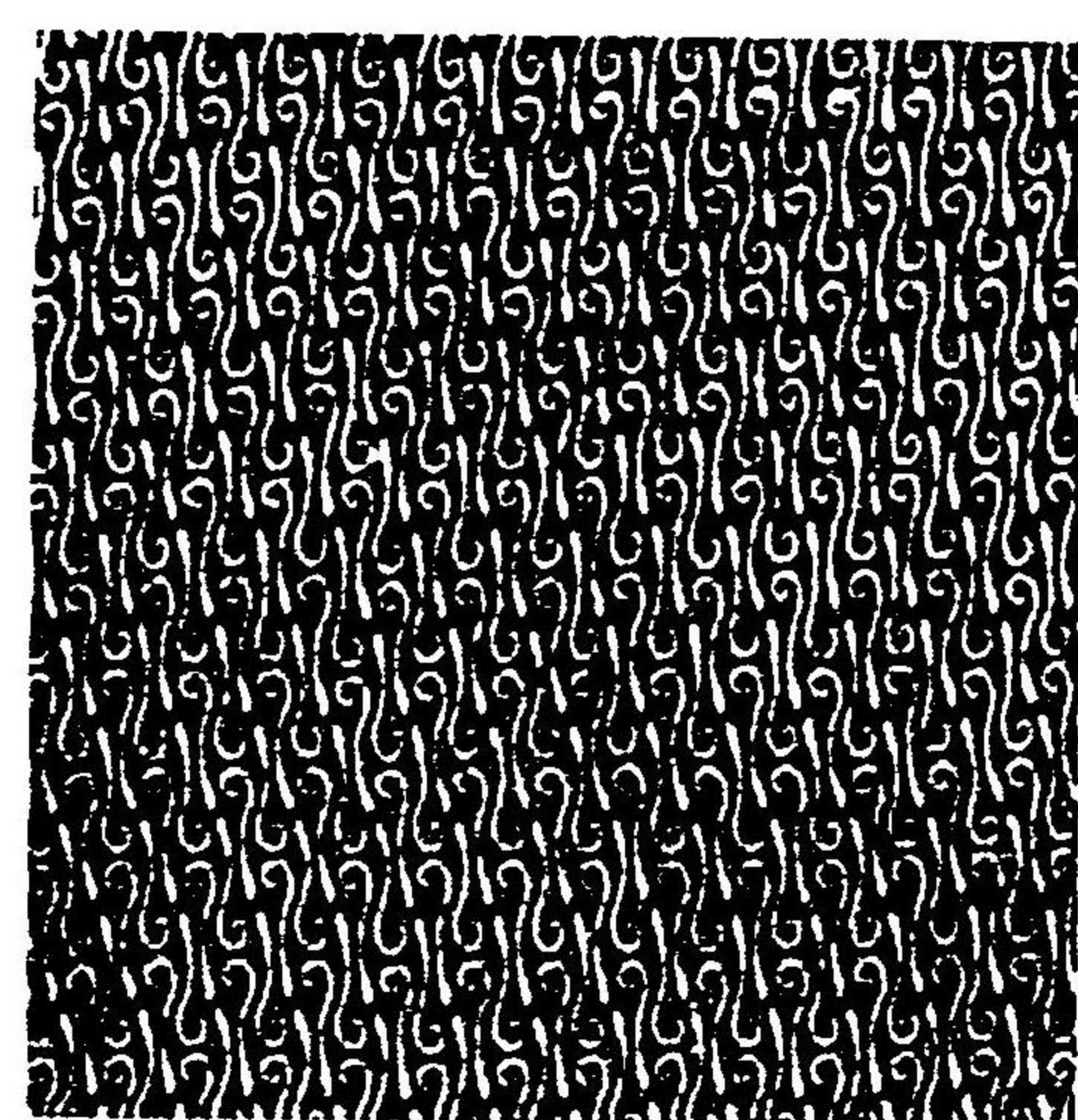
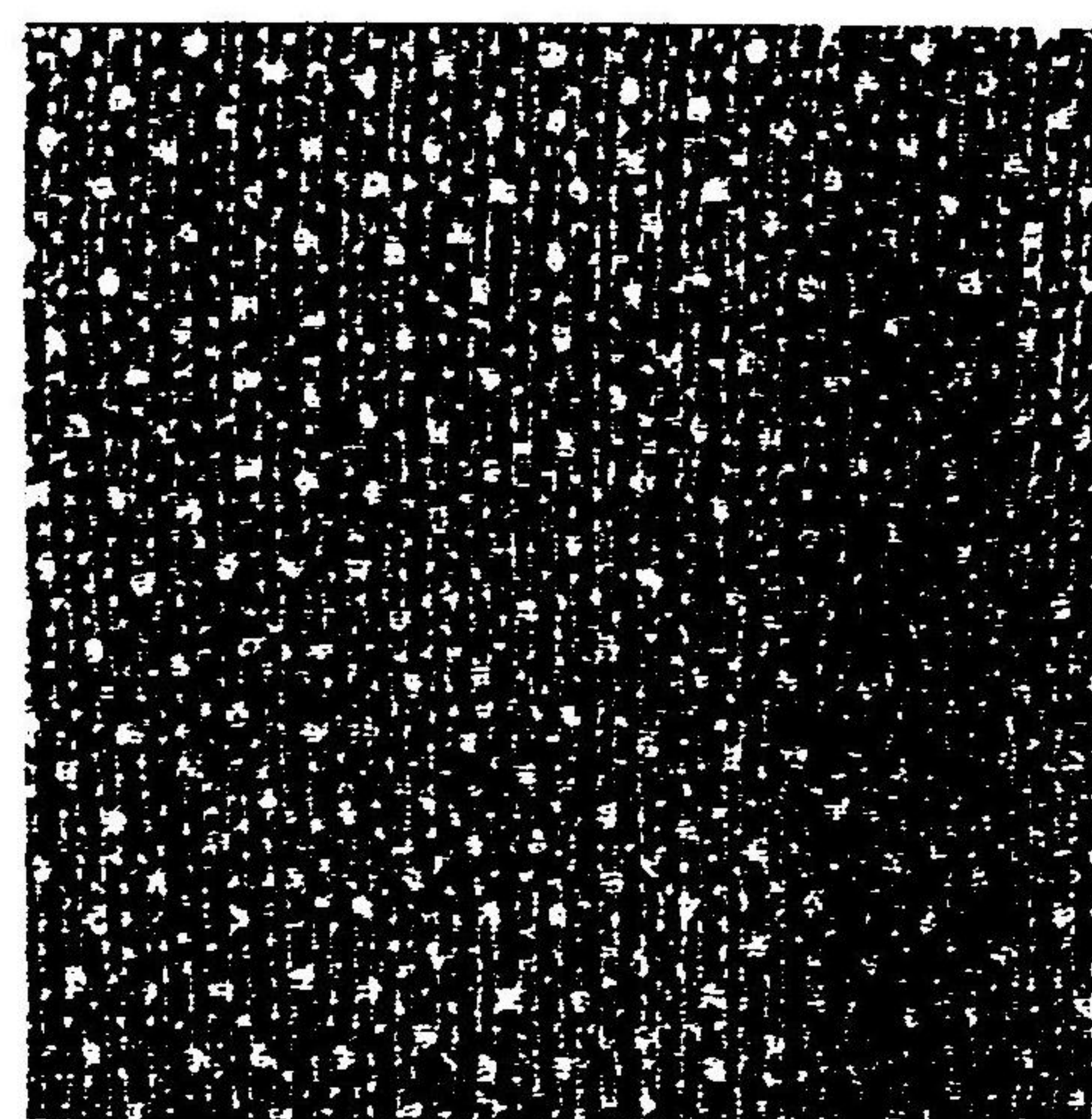
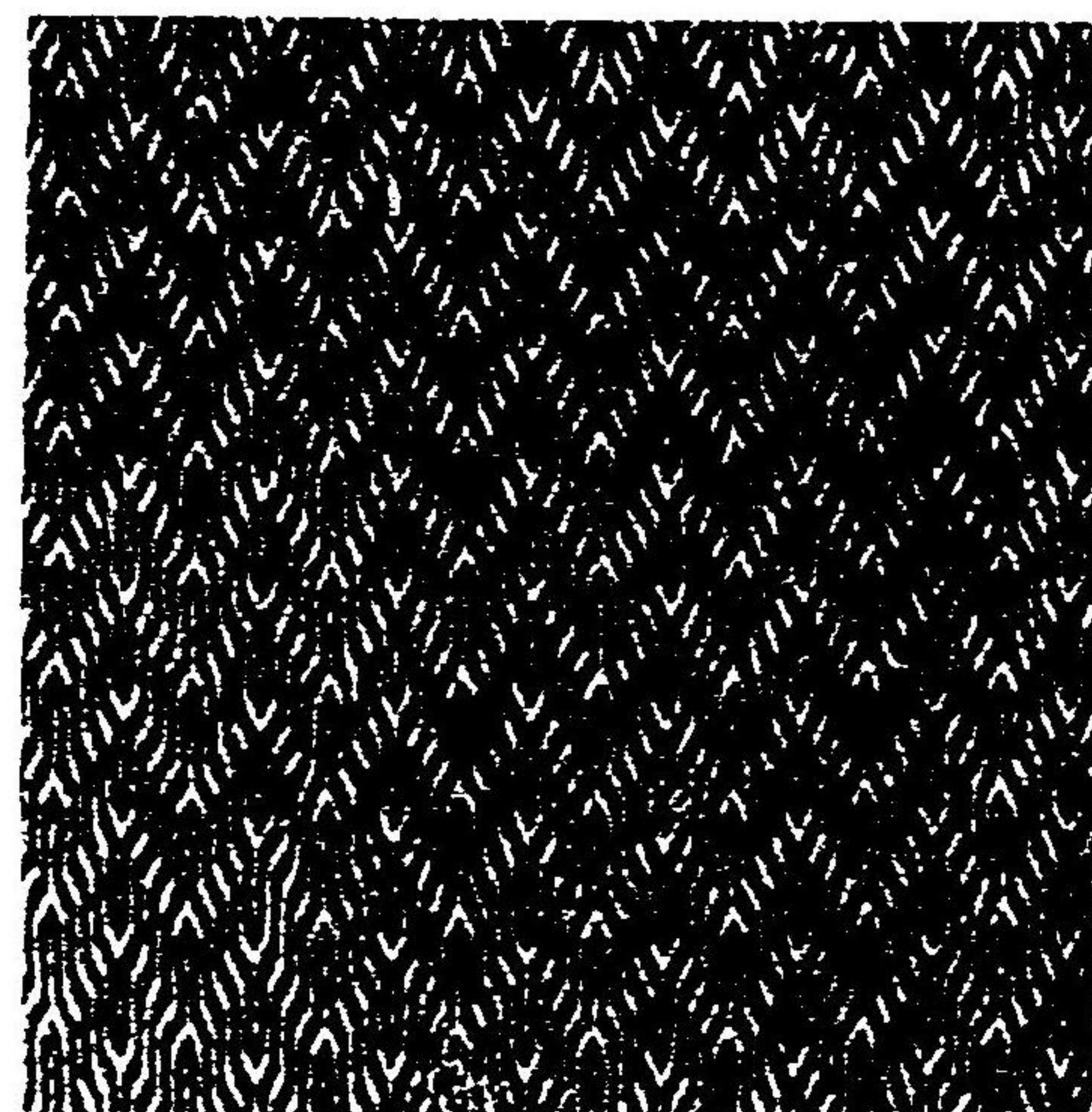
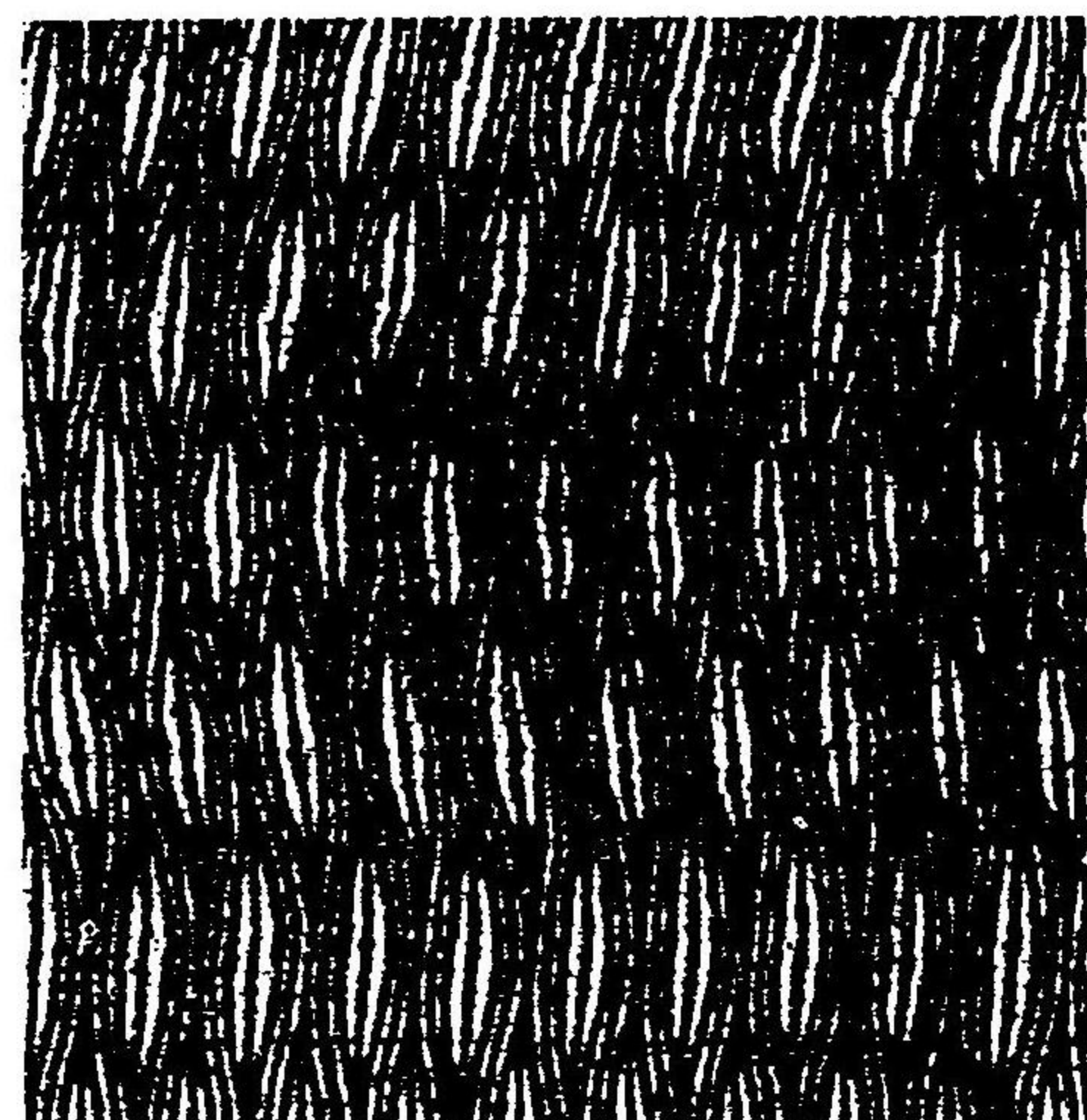


様模取織絲色銀金管齋陶探野狩間八幅尺四丈寄長帳綴子綴掛幅大

々色の紋小④



々色の紋小 ㊦



氷面鏡

DH468  
689

# 氷面鏡

(三井吳服店案内)

商標



三井吳服店の商標

三井吳服店は上に記す  
商標を用う故に何業に  
も此商標を目印とす

## 三井吳服店事業の説明

三井吳服店は元の越後屋にして二百年來打續きたる三井家祖先の業なるが其營業とする所は左の如し

- 一 吳服類販賣并に其受託販賣及び裁縫染織
- 一 製糸及び紡績



82W37849

673.7

### 三井呉服店の本支店出張所及び工業所

三井呉服店の本支店出張所及び工業所は左の如し、

#### 東京本店

東京市日本橋區駿河町七番地  
電話本局五百二十五番、本局千二百十七番

#### 大阪支店

大阪市東區高麗橋通二丁目電話東四百七十三番  
(以上二個所は呉服物販賣店なり)

#### 京都支店

京都市上京區室町通二條上ル  
電話三百〇五番

#### 桐生出張所

群馬縣上野國山田郡桐生町二丁目  
(以上二個所は呉服物仕入店なり)

#### 横濱出張所

横濱市本町二丁目二十一番地  
電話二百十三番

#### 福井出張所

福井市錦中町四十七番地  
(以上二個所は輸出物販賣取扱所なり)



衣ほすてふ  
天の香久山

#### 京都支店附屬三井染工場

京都市上京區衣櫛通二條上ル  
(友禪染其他模様染一切の工場なり)

#### 富岡製糸所

群馬縣上野國北甘楽郡富岡町大字富岡

#### 大疇製糸所

栃木縣下野國河内郡平石村大字石井

#### 名古屋製糸所

愛知縣尾張國西春日井郡金城村大字田幡

#### 三重製糸所

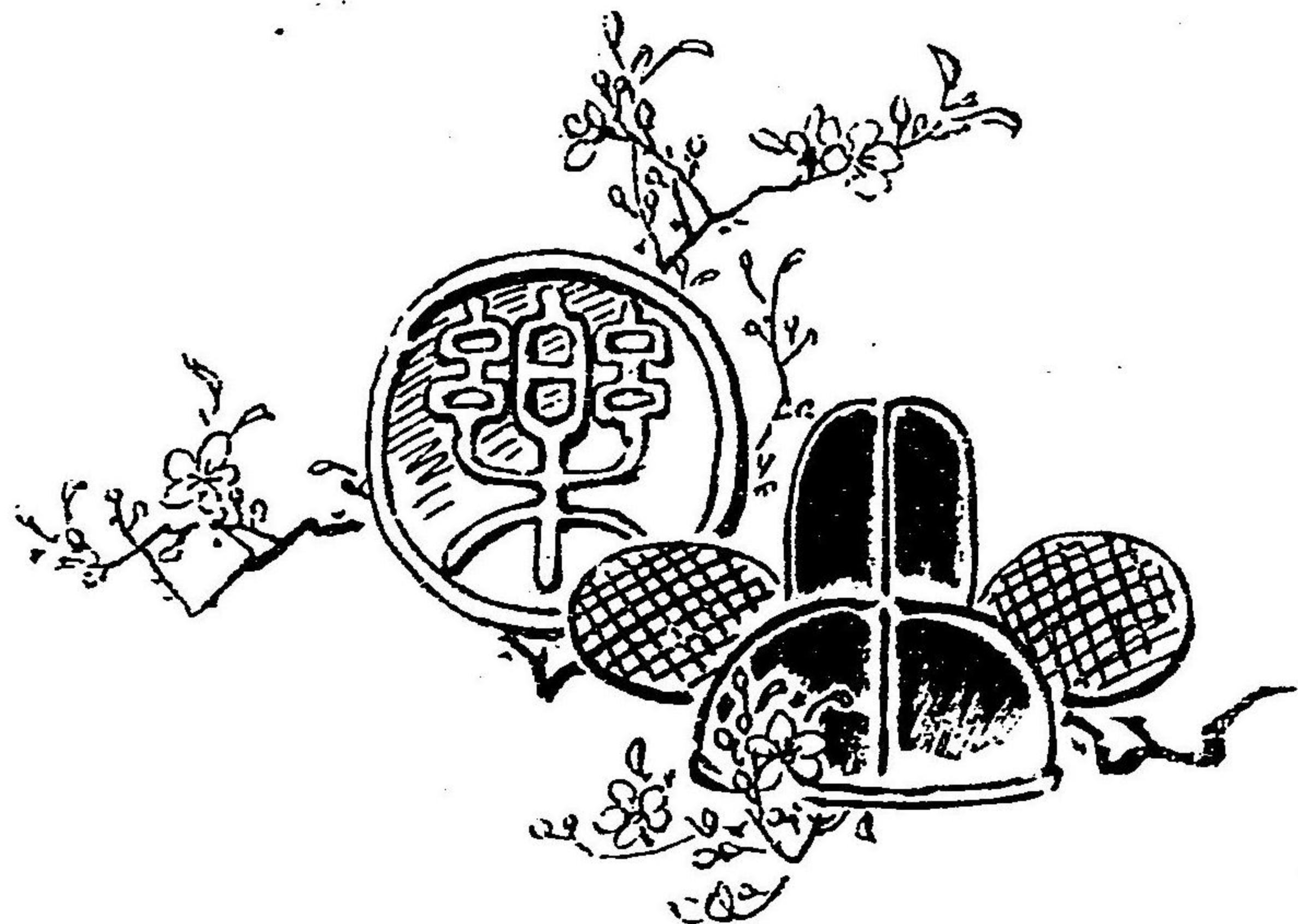
三重縣伊勢國三重郡三重村大字東坂部  
(以上四個所は生糸製造所なり)

#### 新町紡績所

群馬縣上野國多野郡新町

#### 前橋紡績所

群馬縣上野國勢多郡上川淵村大字六供村  
(以上二個所は絹糸紡績所なり)



衣食足りて禮節を知る





### 吳服物販賣店

東京本店  
大阪支店

東京市日本橋區駿河町七番地 電信略號(ミ)  
電話本局五百二十五番、本局千二百十七番  
大阪市東區高麗橋通二丁目  
電信略號(ミヲ)電話東四百七十三番

#### 商賣の多少を問はざる事

三井吳服店にては内外織物類一切を販賣し手廣く營業することなれば浴衣地裏地其他何物にても御注文に依りては數十百反を揃へて御需に應ずべく又假令一錢二錢の買物を爲らるゝ時にも之に應接して更に手數とも面倒とも思はざるのみならず手拭地下帶地の切賣などは店の繁昌冥加の爲利益をも收めずして安賣するを例とす

#### 現金正札附の事

三井吳服店は世に云ふ現金店にして直段は總べて正札附なれば買物を爲らるゝ方には最も便利なり

#### 陳列場の事

短き時間に多くの品物を見較べて買物を爲すは忙しき都會に在りて必要の事なれば東京駿河町の三井吳服店及び大阪高麗橋の三井吳服店は何れも店内の模様を更めて一切の吳服物を陳列することゝ爲し新柄の流行物は勿論交るゝ當期の品を陳列して顧客の縦覽に供すれば隨意に好の品を買求めらるゝの便利あり

#### 品物を持參して賣る事

三井吳服店は店頭に来客に品物を賣るのみならず東京の市内なれば何時にても品物を持參して販賣すべし常顧客の方は云ふまでもなく地方の人にて旅宿にあ



綺羅星の如し

る者も電話なり書状なりにて入用の品物を申越さるるときは即時に品物を取揃へて持参すべし、萬一廻りの者に不都合の廉あるか又は十分に御注文の趣意を聞取ること能はざる時などには營業部長宛にて其旨申送られなば直に相當の取計をなすべし、

### 地方の注文に應ずる事

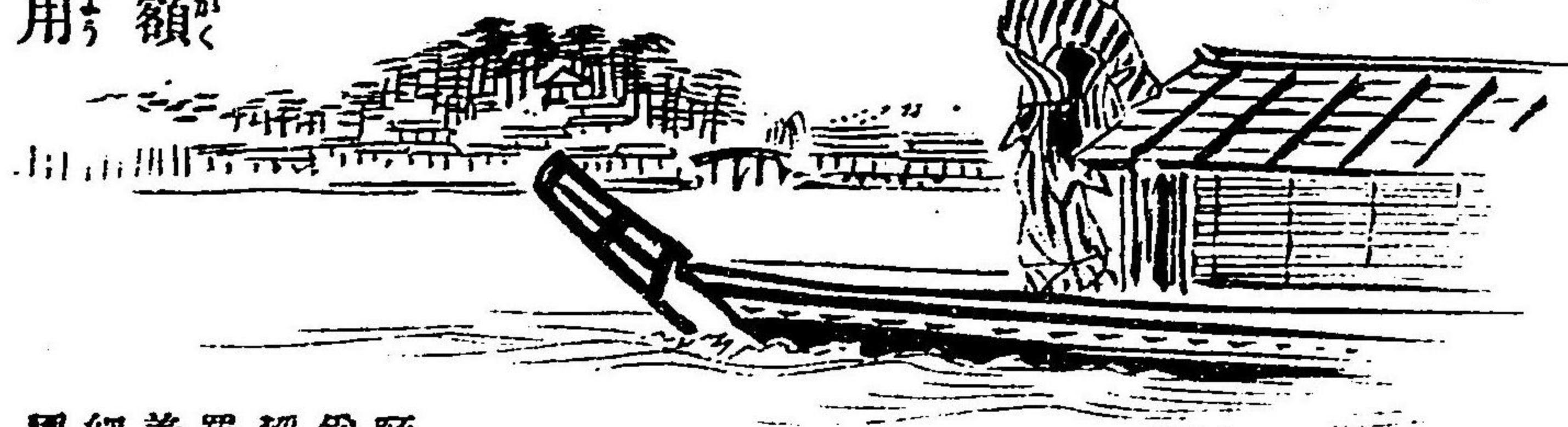
當店にては、地方よりの御注文に對し最も入念に取扱ふものに付き、地方の人にて織物又は衣類等を新調せらるゝに、當店へ來る能はざるときは、東京及び大阪の三井吳服店の中、何れにても便宜の方へ御好みの趣を詳しく書添の上郵便にて注文せらるべし

### 寄切室の事

三井吳服店にては、是まで賣出しと稱へ、東京大阪の兩店に於て、毎年五月と十一月の兩度に顧客方への御禮として、寄切見切反物を集め、特別の安値を以て賣捌き來りしが、此賣出しの日限は、一回僅かに三日間と限るを例となせしが、爲非常の混雜を極め、自然顧客方へ失禮不行届の事を生じ、折角の趣意に背くを以て、賣出しの代りとして、陳列所に寄切室の一室を設け、時々此處に見切反物寄切類を見當り次第に列べ置きて販賣する事となしたれば、顧客方は此室に入りて、格外の安直物を縦覽せらるゝの便利あり、

### 吳服物切手の事

三井吳服店は、吳服物の切手を出すべし、此切手は金五十錢以上何十圓何百圓にても、代金と引換に調製し、東京及び大阪の本支店に共通するものなれば、所持の人は、何の三井吳服店に行くも、切手面の金額に相當する品物を得べし、又例へば五十圓の切手を所持する人が、當用



願爲輕羅着細腰

の品三十圓丈を買調へ、殘額二十圓は追て買物を爲すまで預置かんと思はれれば、其裏書を求めらるべし、他日買物の時、此裏書ある切手を出せば、殘額の買物を爲し得るなり、

### 新案の模様編柄の事

三井呉服店は、畫工數多を雇入れて、内外古今の切地、及び土佐、住吉、宗達、光琳、應舉等の諸名畫、若くは浮世繪等の内より、珍奇高尚の編柄模様を寫取り、彩色を施して、數部の模様編柄集を作り置き、尙又當世の嗜好に投すべき新案物は、模様本は申すに及ばず、機屋又は染屋に命じて、特に製作せしめ、其切見本を集めて見本帖を作り置き、顧客の縦覽に供す、  
凡祝事などに、其事柄に相當する模様の衣服を着んと思はるゝ時、又は世間に有觸れざる模様編柄の衣服を得んと欲する場合には、三井呉服店に來りて、先右の模様集を鑑み、其中より、彼此と選むか、又は自分の思付を、畫工に話し聞かせられれば、畫工は註文に應じて、充分に意匠を凝し、新案を作り出すべし、

### 誂物の事

三井呉服店は、京都桐生、足利は勿論、其他の機場に於ても、有名なる織屋、染屋には、皆特約あり、總べて熱練なる職工に命じて製作せしめ、絶えず之を監督するを以て、御誂の織物、染物は、少しも註文の箇條に相違せざるのみならず、精巧無類に出來すべし、且又仕立は、三井呉服店専屬の有名なる仕立屋に命じ、十分念を入れしめ、尙ほ當店抱置きの熱練なる女子の裁縫師をして、一々丁寧綿密に検査せしめ、少しも缺點なきを認めたる上にて、其都度、別使を以て送り届くべし、

### 爲替振込み所の事

地方より註文品の代金を爲換にて拂込まるときは、東京大阪とも三井銀行の爲替にて振込まれたし、若三井銀行の爲替取引なくして郵便爲替を用ふるときは、東京は日本橋區、江戸橋郵便局、大阪は東區高麗橋郵便局へ宛て差出されたし、

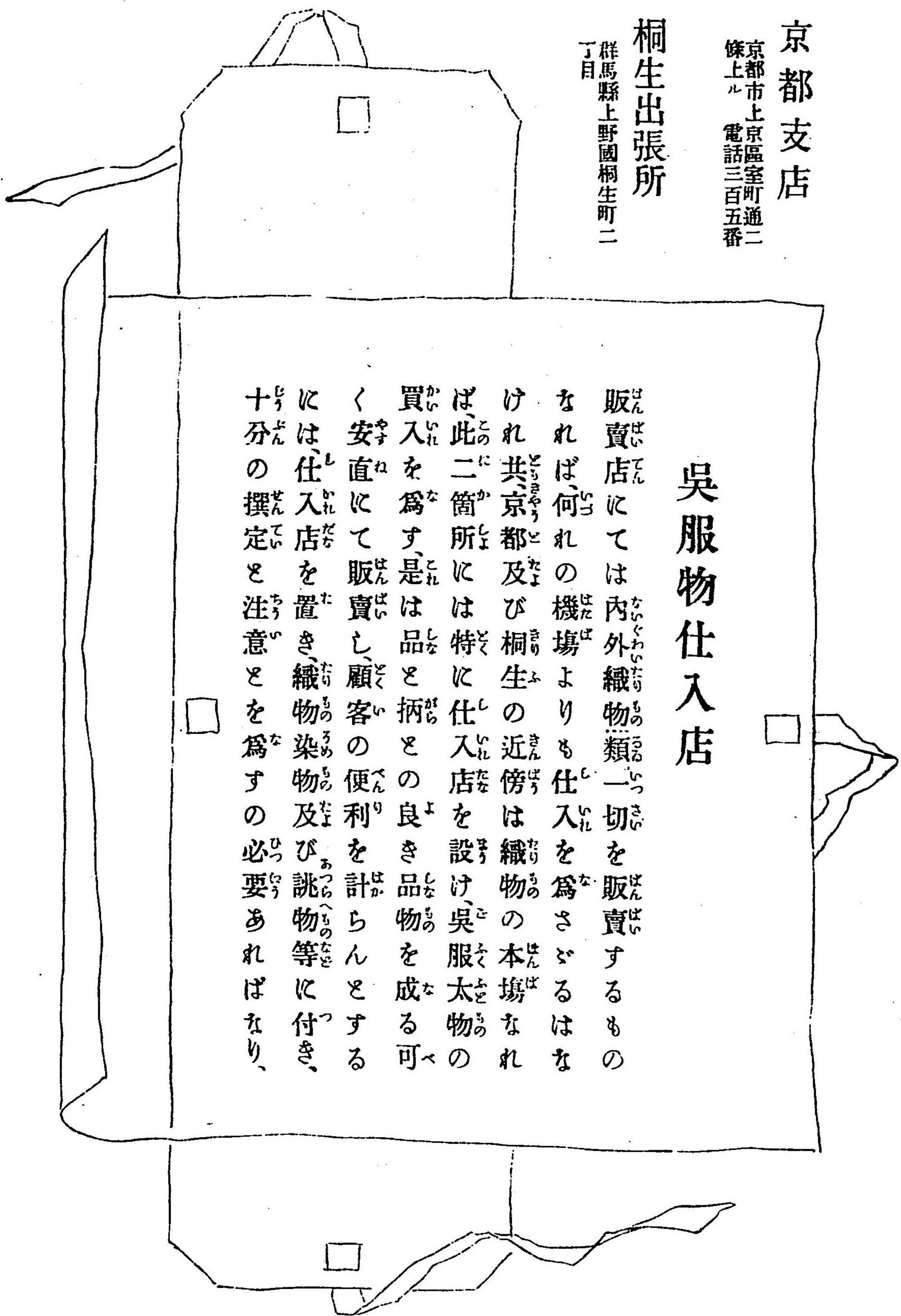
雁かねの紋に燕の袖もやう  
入替り來る年禮の客

### 京都支店

京都市上京區室町通二條上ル 電話三百五番

### 桐生出張所

群馬縣上野國桐生町二丁目

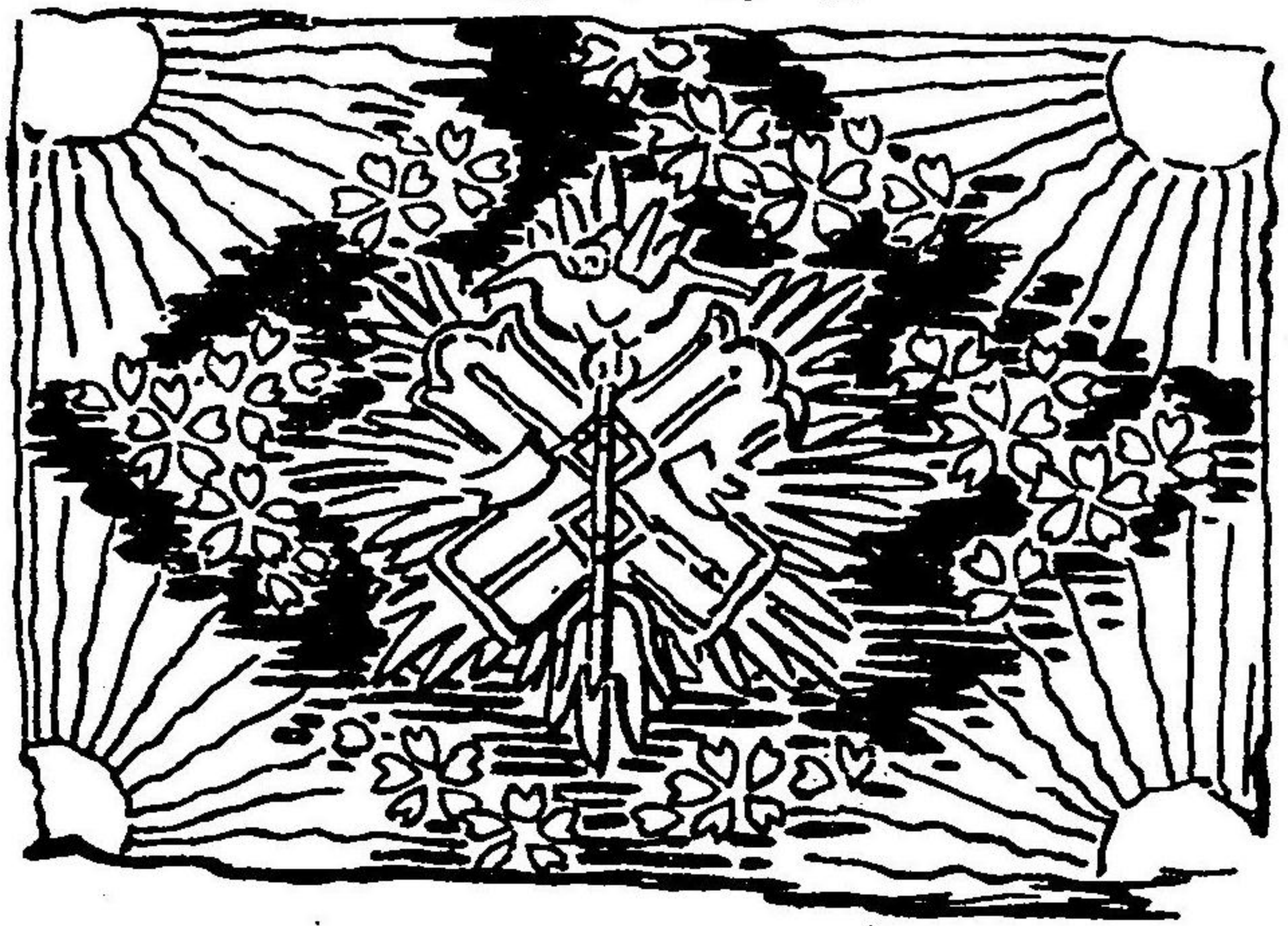


### 吳服物仕入店

販賣店にては内外織物類一切を販賣するものなれば何れの機場よりも仕入を爲さざるはなけれ共京都及び桐生の近傍は織物の本場なれば此二箇所には特に仕入店を設け、吳服太物の買入を爲す是は品と柄との良き品物を成る可く安直にて販賣し、顧客の便利を計らんとするには仕入店を置き、織物染物及び訛物等に付き、十分の撰定と注意とを爲すの必要あればなり、

仕入店が仕入を爲す方法は種々あれども精巧の織物又は註文の上等品を織出すには、織物屋に就き、伏機を爲し置くこと肝要なり、伏機とは、訛機の意味にて機屋の最も熟練なる者を選び、此者と特約をなして織らする事にて、模様、意匠を頼りに他人に漏らすことなし、三井吳服店は京都及び桐生に仕入店を有し居れば常に機場に於て此種の伏機をなし、精巧良質の品物を織出さしむ、

鉦の郷古



の便利あるべし、

一染物の顧客への奉公として、染上り原價の外は申受けず、極めて低價に染上べし

### 染物工場

#### 京都支店附屬三井染工場

京都市上京區衣櫛通二條上ル

模様類の染物は近來益々高尙に進みたるに因り、京都室町二條京都支店の裏手に、模様類の染工場を設け、屈指の職工を雇ひ置くを以て、三井吳服店に染物註文の方は左

- 一 模様圖案は顧客の好次第無料にて相認め出来上り迄嚴重に監督するを以て必ず上出来なり、
- 一 店内に紋畫師及び繡物師を抱へ置き自由に注文に應ずべし、
- 一 店内に染工場あるに依り染物は必ず迅速に出来すべし、
- 一 染賃及び染上り時日は前以て定置きて決して之に相違せざるべし、

### 輸出織物店

#### 横濱出張所

横濱市本町二丁目二十一番地  
電話二百十三番

#### 福井出張所

福井市錦中町四十七番地

三井呉服店は輸出向織物を取扱ふが爲横濱に出張所を設けたると同時に羽二重業の中心たる福井市にも出張所を設け福井に於ては羽二重其他の輸出向織物を仕入れ又は特に機屋に織立を命じ横濱に於ては之が賣捌きを司る等兩所相待て織物輸出の道に遺漏なきを勉めたり尚ほ福井出張所にては機業家の需に應じ羽二重の原料たる生糸の受託販賣をも兼業せしむ

### 生糸製造所

#### 富岡製糸所

群馬縣上野國北甘樂郡富岡町大字富岡

#### 大崎製糸所

栃木縣下野國河内郡平石村大字石井

#### 製造品の事

前記四箇所の製糸場にて製造する生糸は何れも最新の器械を以て熱練なる工女の手になるものなれば織度善く揃ひ再繰甚だ容易にして色澤佳良類節僅少強伸力亦頗る強し特に原料繭の撰擇は最も注意する所にして常に優等なる春繭のみを使用す目下製糸の品別左の如し

- 別製 飛切上 飛切 壹等 等外

#### 名古屋製糸所

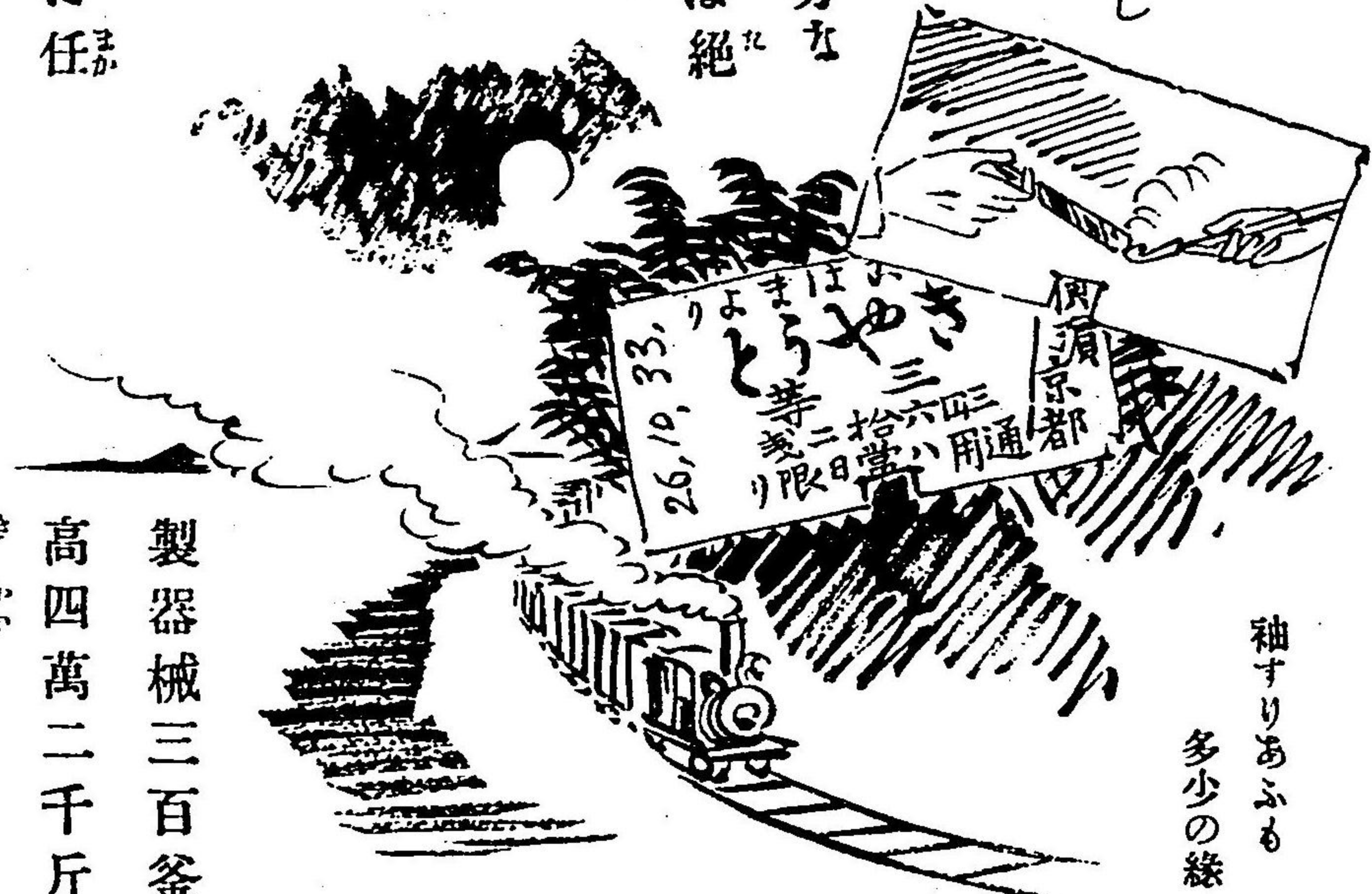
愛知縣尾張國西春日井郡金城村大字田幡

#### 三重製糸所

三重縣伊勢國三重郡三重村大字東坂部

### 製品販賣の事

製品は海外輸出を主とし  
 何れも世界生糸市場の  
 有名品にして名譽夙に  
 高く各需要地に於て十分な  
 信用を有すれども尙ほ絶  
 へず改良に注意し益好  
 評を博せんことを期す  
 内地に於ても相當の註  
 文あれば喜んで之に應  
 ずべし品位織度は上並  
 細太總て注文主の所望に任  
 す



袖すりあふも

多少の縁

### 器械及び製造高の事

富岡は二口取鐵製器械三  
 百五十釜四口取鐵製器械  
 百二十四釜を有し別に練  
 習用として二口取木製器  
 械三十八釜を備へ生糸一  
 箇年の製造高六萬斤大崎  
 は共撚器械二百釜を有し  
 生糸一箇年の製造高一萬  
 八千斤名古屋は四口取鐵  
 製器械三百釜を有し生糸一箇年の製造  
 高四萬二千斤三重は六口取佛國式鐵製  
 器械五十釜と四口取鐵製器械二百四十

八釜を有し生糸一箇年の製造高四萬二千斤總て十六萬二千斤なり

### 絹糸紡績所

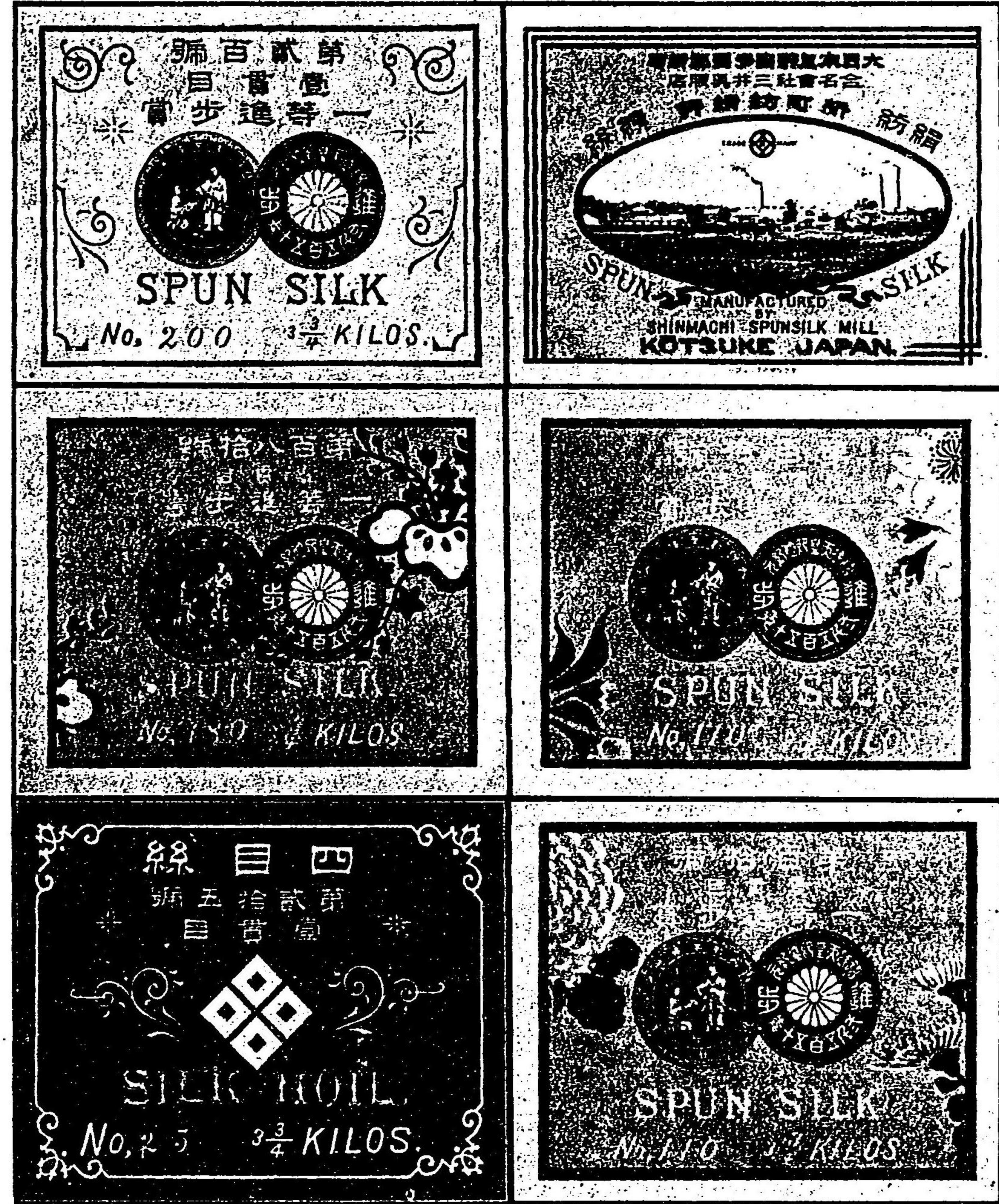
#### 新町紡績所

群馬縣上野郡新町

#### 前橋紡績所

群馬縣上野郡勢多郡上川淵村大字六供村

新町紡績所は巢殼繭鬚斗糸等を原料として絹紡績糸を製造する處にして其製糸は光澤潤良色合純白にして練減少く強力伸力染料吸収力等を有すること殊に多ければ織物として尤も適當なり現に丹後紡績細伊勢崎鉦仙の如きは盛に此紡績糸を用ゐ近來は羽二重絹緋セル細類絹綿交織物等廣く各種の織物にも用ひらるゝに至れり製糸の種類は金栗(練青栗生)の二種にして其細太は第七號より第三百號に至る迄需要者の注文通り如何様にも製造すべし  
 新町紡績所は前記金栗青栗二種の外に尙ほ小町糸四ツ目糸の二種を製す小町糸は紅白各種の縫糸にして衣服の縫糸又は縫箔糸に用ひて最も適當なる徳用品なり四ツ目糸は絹紡績の屑を以て製造したるものにして純然たる絹なれども其價の廉なるは殆んど木綿に均しく尾州野州其他に於て盛に織物に使用せらる



新町現用の商標及目印

新町紡績糸を注文せらるゝ方は直接新町紡績所又は下に記す當店本支店出張所  
又は特約販賣店へ申込まるべし

- |               |          |
|---------------|----------|
| 東京市日本橋區駿河町    | 三井吳服店    |
| 東京市淺草區黒船町十一番地 | 町田徳之助    |
| 京都市室町通り二條上ル   | 三井吳服店支店  |
| 京都市室町通り三條上ル   | 高田久七     |
| 京都市烏丸通り三條上ル   | 田中兵七     |
| 大阪市高麗橋通り二丁目   | 三井吳服店支店  |
| 大阪市高麗橋通り二丁目   | 豊田善右衛門   |
| 上野國桐生町二丁目     | 三井吳服店出張所 |
| 上野國佐波郡境町      | 永井傳松     |
| 上野國多野郡新町      | 久保兵三郎    |
| 上野國多野郡藤岡町     | 星野雄平     |

上野國前橋市堅町  
 下野國足利郡足利町二丁目  
 武藏國八王子町八日町  
 尾張國中島郡一宮町  
 美濃國岐阜市美園町二丁目  
 美濃國笠松町下本町  
 安藝國廣島市中島本町

白子屋安平  
 海老原繁之助  
 中村宗三郎  
 佐分慎一郎  
 佐久間藏也  
 田中善次郎  
 溫田吳服商店

前橋紡績糸は紬糸と稱し其原料は出殻繭鬘斗糸生皮苧毛羽等繭綿屑物の配合より成るものにして之を製するには先づ幾遍となく紡毛器械に掛け充分打解して精撰したる綿となし更に轉じて整紡器械に仕掛け極めて細き織緯となし後之を紡ぐものにして製糸の種類は黒票無票鶴印の三種あり黒票糸は玉節多くして其織物は一種の雅致あり無票と鶴印は無節にして諸般の織物に適す番手は太きもの三ストレンより細きもの二十五ストレンに至り其他細大望に應じて隨時製造すべし目下重に製造中の種類は左の如し

|      |         |         |         |         |
|------|---------|---------|---------|---------|
| 黒票   | 十ストレン糸  | 十一ストレン糸 | 十二ストレン糸 | 十三ストレン糸 |
| 無票   | 十五ストレン糸 | 廿五ストレン糸 | 七ストレン糸  | 十ストレン糸  |
| 鶴印優等 | 廿一ストレン糸 | 十三ストレン糸 | 十五ストレン糸 | 二十ストレン糸 |

前橋紬糸は元絹にして糸質柔軟強彈力を有すると共に又多量の護謨質を有するを以て之を織物と爲すには是非とも能く練上げ護謨質を去ることを忘るべからず之を練るには種々の方法あれども其内最も廉にして且仕上の美事なる方法は左の如し

| 練上法 | 糸百々に對する調合割合 |
|-----|-------------|
| 石鹼  | 練時間         |
| 黒票糸 | 一〇分         |
| 無票糸 | 二〇分         |
| 鶴印糸 | 一時間半        |

一練時間内は間断なく沸騰せしむべし  
 一石鹼はマルセイユ石鹼又は普通洗濯石鹼にて差支なし  
 一練上げたる後猶ほ一時間程湯煮して晒上ぐれば申分なき純白となるなり

前橋紬糸の番手によりて適當なるべき織物の重なるものを擧ぐれば三ストレン



より十ストレンまでの太ものは薬囊絨、段通座布團、洋服地に十二ストレンより十五ストレンまでは各種の織物、就中大島秩父等、細綿に二十ストレン以上の細物は玉糸、鬘斗糸の代用として最も適當にして價格至て低廉なり

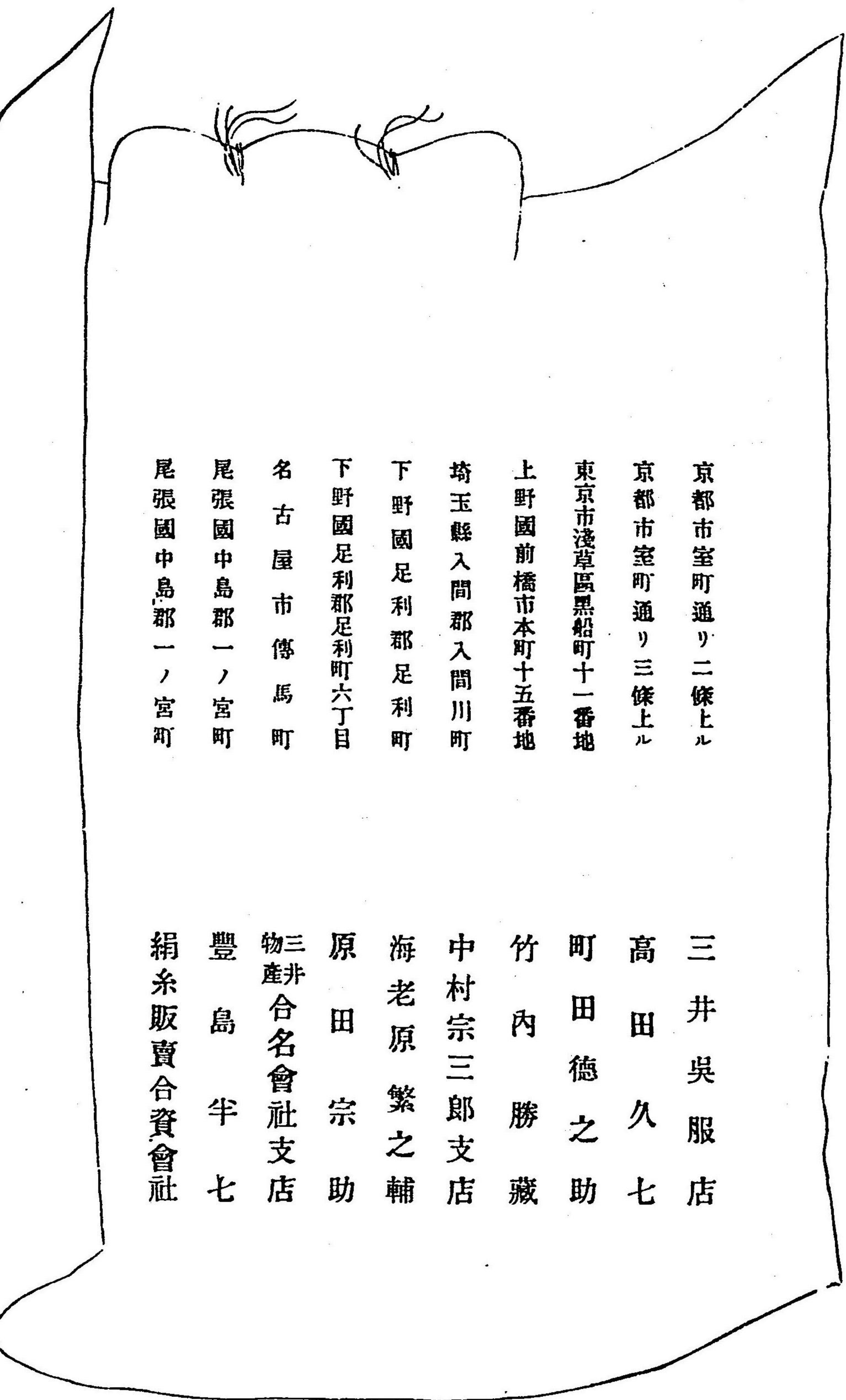
前橋細糸は各種とも皆一管の長五百メートル即ち日本吳服尺千三百二十尺にして今假りに黒票十ストレン糸を以て一反を織り上ぐるものとすれば左の糸量及び手間賃にて充分なり

黒票十ストレン糸一反分の糸量及手間賃

| 管 數 | 凡の目方    | 糸 代   | 職手間仕上賃 | 仕上合計   |
|-----|---------|-------|--------|--------|
| 三十二 | 總二百二十夕強 | 一圓二十錢 | 二十二錢   | 一圓四十二錢 |

右の外染賃等を支拂ふも一反の代價一圓六十錢前後にして木綿瓦斯織物よりも安し尤も縦糸に用ふるには練り上げたる糸に薄糊を加ふることを忘るべからず

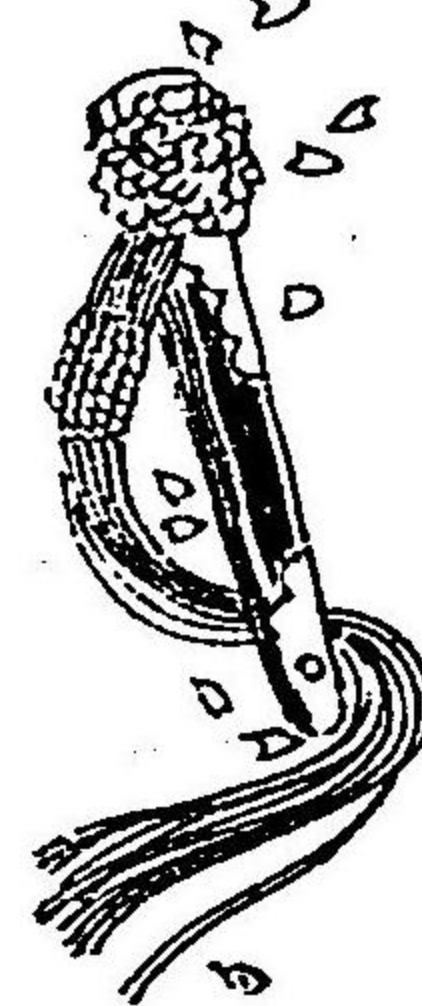
前橋細糸は重なる機業地には左記の如く販賣店あれども尙當所に直接取引を開きたき方は如何なる少分量にても需に應ずべし



|               |            |
|---------------|------------|
| 京都市室町通り二條上ル   | 三井吳服店      |
| 京都市室町通り三條上ル   | 高田久七       |
| 東京市淺草區黒船町十一番地 | 町田徳之助      |
| 上野國前橋市本町十五番地  | 竹内勝藏       |
| 埼玉縣入間郡入間川町    | 中村宗三郎支店    |
| 下野國足利郡足利町     | 海老原繁之輔     |
| 下野國足利郡足利町六丁目  | 原田宗助       |
| 名古屋市傳馬町       | 三井物産合名會社支店 |
| 尾張國中島郡一ノ宮町    | 豐島半七       |
| 尾張國中島郡一ノ宮町    | 絹糸販賣合資會社   |

|             |       |
|-------------|-------|
| 尾張國中島郡一ノ宮町  | 佐分慎一郎 |
| 尾張國中島郡一ノ宮町  | 豊島正七  |
| 美濃國笠松町      | 田中善次郎 |
| 遠江國濱名郡中野町   | 村越政平  |
| 筑後國久留米市苧扱川町 | 吉川泉太郎 |
| 筑後國久留米市苧扱川町 | 牛島猪兵衛 |

縫場の取れて  
八景揃ふなり



地方評註文の栞

當店は土地の遠近を問はず手広く營業いたし  
 候へば北は北海道の果より南は臺灣の隅々まで街  
 得着の數は限なく清陰を以て日増に繁昌いたし難  
 有仕合ふ奉存候然れば各様の清便利の爲には  
 十分に力を盡し工夫を凝らす中にも地方の脚  
 客様に對しては土地隔り居り小丈に一層注意  
 を加へ既に先頃より店内に地方係と申すを置  
 き老練なる番頭を始め何れも此の道に精き  
 もの數十人を選みて掛合へば一專ら市外より

の御註文のみを取扱ふことと爲し四季の更衣さて  
は宴會物詣吉禮祝儀のをりくとも郵便にて  
御註文お茶のへば此の係の者にて御好みの品又は御  
似合の流物を取扱へ直に御送り申上り仕組に  
御座り即ち御自身親しく當店へ御出向の上御買取  
め相成候と同然品物は正札附なれば直段に三様あることな  
く又荷物送しは御註文書到着の即日小包便にて差  
立ての故に用ひの時日を費さずして速に御用を辨  
ずることにお成御遠方様には上なき御便利と爲  
左に御註文の手続と當店の取扱振の大畧を申上り

間續く御用向の程奉り申上り

一 御註文の節は成るべく悉しく御申越相願ひなは  
勿論後着用なさるべき男女の御筆頭法職業等  
その他併せて御記し下度又御好めればその縞柄  
紋様等をも御記入ありたくせずれば係方一月せ  
袋首及の品物の内より可然精撰致し尚ほ上役の  
番頭三四名にて更に綿密なる調を仕り直ちに  
取揃へ侍るよりより尤も前以て代價御問合の節  
には右の通り御意を盡したる上精しき見積書  
を作りし御返事可致候

一 小包郵便の取扱多きか又は留送の必要ある場合には豫め局名指定の上海通知をとり後ハ近傍に小包郵便の取扱全くとせよか或は海註文の重量郵便規程に越ゆる時は通常運送便より出の品絹織物類の運賃は臺灣の外総て當店まで引受より其前當店への送金為替は総て三井呉服店宛と一東京本店は東京市日本橋區室町郵便取扱所へ大阪支店は大阪市東區高麗橋郵便局へ海振込み被下度候

一 當店へ海註文又は海問合の節は海宿所并に海

一 姓名等可成明瞭に海認め被下度候

一 尚漆物海註の節には前の通海年頃着丈袖丈海紋の數及び大きき等海紋本流へと小し好都合)委一く海記しお成たく又色合模様等に海好あれば併せて海記しとら度きすれば當店係の者前同新念入り撰定の上當店附属の京都染工場及び東京の漆物屋に命じて丁寧に染上げ申すべくも高海望み次第仕立上げめて海送りより付甘之旨には仕立の寸法詳し海越とら度候

一 海婚禮其他重要なる海儀式は海着用の為特表

裳類御新調の節は當店抱置の職工に申付先  
 例など取調の上適當なる模様の下着を作らせ目  
 子掛けゆて法氣に入りたる上熟練なる職方に申付  
 念入り調製す時候

一 當店內には綴織の職工繡物師紋畫師等いづれも其道  
 に鍛鍊の者を抱へてまき小付御好次第調進す仕ゆ

一 御註文品は総て小包郵便にて發送す發前以て代金  
 御送附之向へは代金引替にて御届け上べくゆ

一 漆仕立又は特別織立等の御誂物は半金以上相添へ  
 申込下度出来の上代金引替小包郵便にて發送可仕ゆ

### 流行衣裳

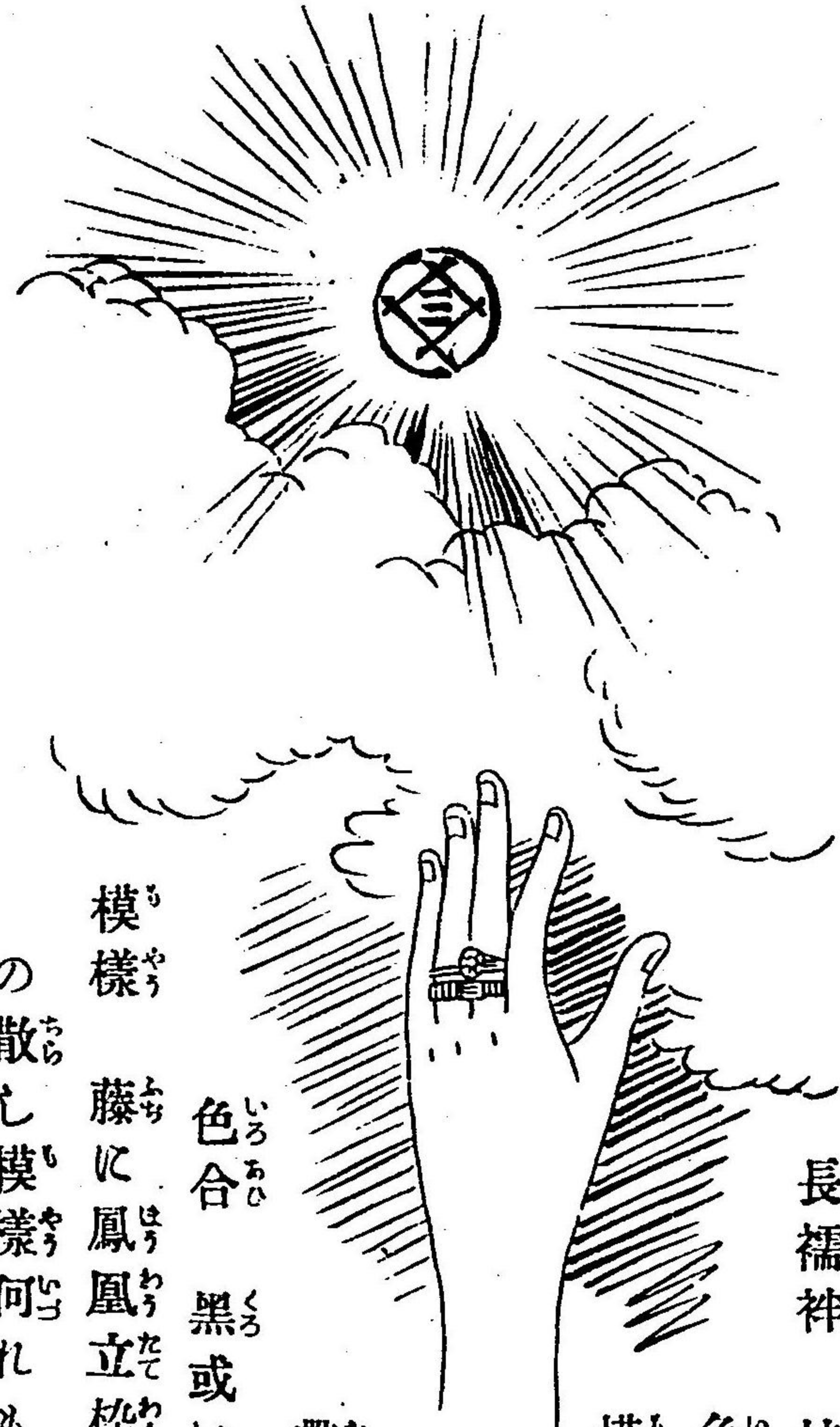
婦人向

いノ部 十七八歳御令嬢の見立

御定紋 五所三枚重  
 上着 地質 縮緬  
 色合 栗皮鼠 或は松皮鼠 或は薄牡丹色曙染 或は際暈染落し染  
 模様 雪中の竹松影の薄落し白上り引霞

下着  
 胴拔仕立地質は旭染絹模様の形は二葉あほひ或は梅散しなど  
 胴拔仕立地質色合模様上着と同じ代價九十圓前後

きもの



長襦袢

地質

紋羽二重或は紋縮緬

色合

は肉色又は紅色

模様

海邊の松菱田鹿の子

鶴模様霞に花車模様

(代價二十五圓前後)

地質 七絲織

色合 黒或は白茶

模様 藤に鳳凰立梓模様大輪牡丹に菊紅葉梅

の散し模様何れも金通し(五十圓より百圓位)

綴織の元祿模様(代價三百圓)

ろノ部

上着 地質 御召風通

色合 牡丹色薄紫根御納戸

裾廻しは縮緬の櫻鼠(代價二十六圓前後)

下着 地質 御召風通

胴抜の地質は絞り絹廻りは並に裙とも上着と同(代價三十五圓前後)

長襦袢 紅入模様の友禪縮緬(代價十六圓前後)

帯 地質 七絲織又は厚板織御納戸地或は黒地

模様 梅に檜扇模様金通し(代

價三四十圓位)

立 二十五六歳奥様見

立

いノ部

御定紋五所三枚重

上着 地質 縮緬

合色 深川鼠或は梅鼠八掛附地

落し染

模様 白上の竹に菱田入の梅散し又は白上の柳櫻



錦衣夜行

下着 地質 玉糊縮緬胴拔仕立二枚廻りは上着と同模様以上三枚代價七十五圓

前後)

長襦袢 地質 紋縮緬或は縮緬

色合 肉色又は薄櫻鼠

模様 墨繪の牡丹又は雨の櫻模様代價二十圓前後)

帶 地質 七絲織

色合 黒御納戸或は栗皮色

模様 松竹梅に有職切梅に蘭模様代價三十圓より五十圓位)

ろノ部

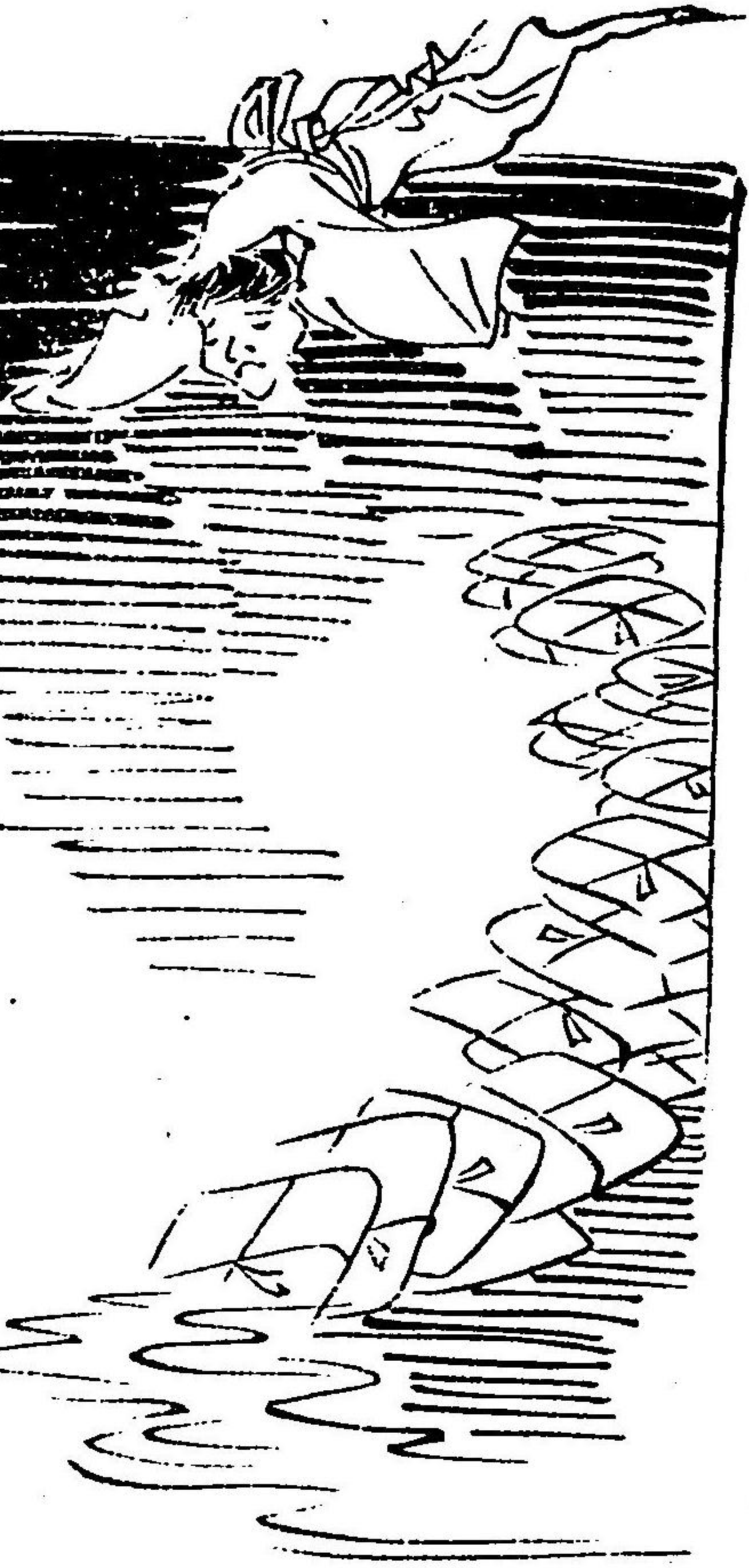
御定紋三ツ所三枚重

上着 地質 縮緬鎗梅龜甲崩蕨手

色合 藍鼠或は薄葡萄

下着 地質 御納戸又は牡丹色の絞り絹又は紋羽二重胴拔二枚廻り上着と同じ

(代價六十圓前後)



雀りきたき

長襦袢 紅なし友禪縮緬代價十五六圓

帶 模様

地質 厚板七絲

有職の鶴龜松竹梅か鼠

地の牡丹又は金霞に散

櫻模様代價二十五圓より五十圓位)

三十五六歳奥様見立

いノ部

御定紋五ツ所三枚重

上着 地質 黒縮緬

模様 江戸襦模様代價三十圓前後)

下着 地質 白紋羽二重又本紋綾子代價四十圓前後)

或は地質は紋縮緬の當世鼠模様上着と同じ胴拔仕立にて胴は金茶の絞り絹代價五十圓前後)

長襦袢 地質 白紋縮緬大紗綾形代價十五圓前後  
帶 地質 七絲織鑄茶地の名物裂盡し又は白茶地の土耳古模様代價五十圓前

上着 地質 御召縮緬  
ろノ部

色合 藍の細格子又は小辨慶代價十七圓位

下着 地質 胴拔仕立絞り絹廻りは上着と同じ代價十三圓前後

帶 地質は博多の黒焦茶一本獨拵之に唐縞子の袷紗帶代價十五圓前後

春かすみ衣の浦に引のしの

吸出す綿や沖の白波



男子向

上着 黒地御定紋五所大さ一寸一分地質は羽二重

裏地 二枚鼠羽二重代價二十五圓前後  
下着 一枚鼠羽二重通し無垢代價四十圓前後  
長胴着 同上代價十二圓前後

羽織

黒地五ツ紋古地質鹽瀬又は羽二重  
胴裏七絲古地質鹽瀬又は羽二重  
又は無想にして模様付代價三十圓前後



袴かま 帶たひ 茶ちや 或あるは 仙臺せんたい裏うらは 玉蟲たまむし色いろ或あるは 雀すずめ茶ちや (代たひ價か 仙臺せんたい廿にじゅう圓げん位ご)  
 綴ついで織お七しち絲せん (代たひ價か 七しち絲せんなれば十五じゅうご圓げん位ご)

上うへ着ぎ 地ち質しつ 平御ひらみ召めし或あるは 平御ひらみ召めしの 綾織あやむす

下した着ぎ 地ち質しつ 裏地うらぢは 熨斗のしめ目め縹色はるいろ絹ぬい

長なが胴たう着ぎ 地ち質しつ 上うへ着ぎと 同おなじ 胴たう拔ぬき仕し立たて以上いじやう三さん枚まい代たひ價か五十ごじゅう圓げん前ぜん後ご

襦じゆ袢ばん 地ち質しつ 當たう世せい鼠ねずの 無む想かう (代たひ價か 十じゅう圓げん前ぜん後ご)  
 羽は織お 地ち質しつ 鐵てつ無む地ぢの 平御ひらみ召めし裏うらは 七しち絲せんの 有いう職しやく模も樣やう (代たひ價か 二十にじゅう圓げん前ぜん後ご)  
 帶たひ 地ち質しつ 焦こ茶ちや或あるは 紺こん獻けん上じやう (代たひ價か 八はち圓げん前ぜん後ご)

丈夫ちゆうぶ貴き兼けん濟せい。豈あやう獨どく善ぜん一いつ身しん。  
 安得あんとく萬まん里り裘じゆ。蓋がい裏うら周しゅう四し垠げん。



御禮式用御衣裳見積表 (上仕立)

|   |   |                     |  |   |
|---|---|---------------------|--|---|
| 襦 <small>じゆ</small> 袢 <small>ばん</small>   | 七 <small>しち</small> 絲 <small>せん</small> 織 <small>お</small> 御 <small>ご</small> 振 <small>びん</small> 袖 <small>そで</small> 裏 <small>うら</small> 紅 <small>こう</small> 羽 <small>う</small> 二 <small>に</small> 重 <small>じゆう</small> 地 <small>ぢ</small> | 一 <small>いつ</small> | 百 <small>ひゃく</small> 五 <small>ご</small> 十 <small>じゅう</small> 圓 <small>げん</small> | 松 <small>まつ</small> の部 <small>ぶ</small> |
| 白 <small>しろ</small> 綾 <small>あや</small> 子 <small>こ</small> 振 <small>びん</small> 袖 <small>そで</small> 惣 <small>そう</small> 模 <small>も</small> 樣 <small>やう</small>                     | 全 <small>ぜん</small> 地 <small>ぢ</small> 赤 <small>せき</small>  | 一 <small>いつ</small> | 五 <small>ご</small> 十 <small>じゅう</small> 圓 <small>げん</small>                      | 竹 <small>たけ</small> の部 <small>ぶ</small> |
| 全 <small>ぜん</small> 地 <small>ぢ</small> 黒 <small>くろ</small>  | 全 <small>ぜん</small> 地 <small>ぢ</small> 赤 <small>せき</small>  | 一 <small>いつ</small> | 五 <small>ご</small> 十 <small>じゅう</small> 圓 <small>げん</small>                      | 梅 <small>うめ</small> の部 <small>ぶ</small> |
| 地 <small>ぢ</small> 白 <small>しろ</small> 綾 <small>あや</small> 子 <small>こ</small> 留 <small>りゆう</small> 袖 <small>そで</small> 惣 <small>そう</small> 模 <small>も</small> 樣 <small>やう</small> | 全 <small>ぜん</small> 地 <small>ぢ</small> 黒 <small>くろ</small>  | 一 <small>いつ</small> | 四 <small>し</small> 十 <small>じゅう</small> 五 <small>ご</small> 圓 <small>げん</small>   | 梅 <small>うめ</small> の部 <small>ぶ</small> |
| 全 <small>ぜん</small> 地 <small>ぢ</small> 赤 <small>せき</small>  | 全 <small>ぜん</small> 地 <small>ぢ</small> 黒 <small>くろ</small>  | 一 <small>いつ</small> | 五 <small>ご</small> 十 <small>じゅう</small> 圓 <small>げん</small>                      | 梅 <small>うめ</small> の部 <small>ぶ</small> |
| 色 <small>いろ</small> 縮 <small>ちぢ</small> 緬 <small>べん</small> 振 <small>びん</small> 袖 <small>そで</small> 惣 <small>そう</small> 模 <small>も</small> 樣 <small>やう</small>                    | 全 <small>ぜん</small> 留 <small>りゆう</small> 袖 <small>そで</small>  | 一 <small>いつ</small> | 六 <small>む</small> 十 <small>じゅう</small> 圓 <small>げん</small>                      | 梅 <small>うめ</small> の部 <small>ぶ</small> |
| 色 <small>いろ</small> 縮 <small>ちぢ</small> 緬 <small>べん</small> 振 <small>びん</small> 袖 <small>そで</small> 中 <small>ちゆう</small> 模 <small>も</small> 樣 <small>やう</small>                   | 全 <small>ぜん</small> 留 <small>りゆう</small> 袖 <small>そで</small>  | 一 <small>いつ</small> | 五 <small>ご</small> 十 <small>じゅう</small> 五 <small>ご</small> 圓 <small>げん</small>   | 梅 <small>うめ</small> の部 <small>ぶ</small> |
| 全 <small>ぜん</small> 留 <small>りゆう</small> 袖 <small>そで</small>  | 全 <small>ぜん</small> 留 <small>りゆう</small> 袖 <small>そで</small>  | 一 <small>いつ</small> | 五 <small>ご</small> 十 <small>じゅう</small> 五 <small>ご</small> 圓 <small>げん</small>   | 梅 <small>うめ</small> の部 <small>ぶ</small> |



|      |       |       |       |        |      |      |     |        |      |      |        |      |
|------|-------|-------|-------|--------|------|------|-----|--------|------|------|--------|------|
| はら合帯 | 博多織丸帯 | 黒縹子丸帯 | 吾妻綴丸帯 | 七絲丸帯   | 綴織丸帯 | 襦下帯  | 全糸織 | 風通織御羽織 | 小紋縮緬 | 鼠縮緬  | 黒縮緬御羽織 | 羽織   |
| 一    | 一     | 一     | 一     | 一      | 一    | 一    | 一   | 一      | 一    | 一    | 一      | 一    |
| 十八圓  | 二十五圓  | 十八圓   | 八十五圓  | 百五十圓以上 | 百八十圓 | 七十圓  | 二十圓 | 二十二圓   | 二十三圓 | 二十八圓 | 三十圓    | 三十一圓 |
| 十五圓  | 十八圓   | 十三圓   | 六十圓   | 五十五圓以上 | 百二十圓 | 三十五圓 | 三十圓 | 二十圓    | 十八圓  | 二十圓  | 二十三圓   | 二十三圓 |
| 七圓   | 十六圓   | 七圓    | 十五圓   | 十圓     | 二十五圓 | 二十五圓 | 十一圓 | 十六圓    | 十五圓  | 十五圓  | 十七圓    | 十七圓  |
| 七圓   | 十六圓   | 七圓    | 十五圓   | 十圓     | 二十五圓 | 二十五圓 | 十一圓 | 十六圓    | 十五圓  | 十五圓  | 十七圓    | 十七圓  |

|      |      |        |          |                 |            |          |             |            |         |     |            |      |
|------|------|--------|----------|-----------------|------------|----------|-------------|------------|---------|-----|------------|------|
| 八丈小袖 | 糸織小袖 | 御召縮緬小袖 | 風通御召綿入小袖 | 板の絹胴拔更紗縮緬廻り無垢下着 | 小紋縮緬引返付三枚重 | 全板の絹胴拔下着 | 色縮緬留袖引返付裾模様 | 中形絹半縹袴袖縮緬付 | 友禪縮緬長縹袴 | 全留袖 | 白紋羽二重振袖長縹袴 | 全留袖  |
| 一    | 一    | 一      | 一        | 二               | 一          | 二        | 二           | 一          | 一       | 一   | 一          | 一    |
| 十六圓  | 二十圓  | 二十五圓   | 二十五圓     | 六十五圓            | 八十五圓       | 八十五圓     | 七十五圓        | 十三圓        | 十六圓     | 十八圓 | 二十一圓       | 二十一圓 |
| 十二圓半 | 十三圓  | 十八圓    | 二十三圓     | 三十三圓            | 五十五圓       | 七十五圓     | 五十五圓        | 八圓         | 十一圓半    | 十三圓 | 十七圓半       | 十七圓半 |
| 九圓半  | 十二圓  | 十六圓    | 二十圓      | 二十七圓            | 五十八圓       | 五十八圓     | 五圓半         | 五圓半        | 十圓半     | 十二圓 | 十一圓半       | 十一圓半 |

|      |    |     |     |     |          |          |      |    |       |    |     |     |
|------|----|-----|-----|-----|----------|----------|------|----|-------|----|-----|-----|
| 木綿類全 | 銘撰 | 郡内全 | 八丈全 | 縮緬全 | 緞子<br>蒲團 | 夜具<br>搔卷 | 夜具蒲團 | 帛紗 | つぐれ帛紗 | 帶揚 | しごき | こし帯 |
| 一組   | 一組 | 一組  | 一組  | 一組  | 一組       | 一組       | 一組   | 一組 | 一組    | 一組 | 一組  | 一組  |
| 九    | 七  | 十   | 百   | 百   | 百        | 百        | 二    | 二  | 三     | 六  | 四   | 四   |
| 十    | 十  |     |     | 五十  | 五十       |          | 十    | 十五 |       |    |     |     |
| 圓    | 圓  | 圓   | 圓   | 圓   | 圓        |          | 圓    | 圓  | 圓     | 圓  | 圓   | 圓   |
| 六十八  | 五  | 五   | 八   | 八   |          |          | 十    | 十  | 二     | 四  | 二   | 二   |
| 圓    | 圓  | 圓   | 圓   | 圓   |          |          | 圓    | 圓  | 圓     | 圓  | 圓   | 圓   |
|      |    |     |     |     |          |          | 二    | 五  |       | 圓  | 半   | 半   |
|      |    |     |     |     |          |          | 圓    | 圓  | 圓     | 半  | 半   | 半   |
|      |    |     |     |     |          |          | 五    |    | 一     | 三  | 一   | 一   |
|      |    |     |     |     |          |          | 圓    |    | 圓     | 圓  | 圓   | 圓   |
|      |    |     |     |     |          |          | 半    |    | 三十    | 八十 | 五十  | 錢   |
|      |    |     |     |     |          |          |      |    | 錢     | 錢  | 錢   | 錢   |

|    |     |    |    |                              |     |      |     |              |          |          |    |             |           |
|----|-----|----|----|------------------------------|-----|------|-----|--------------|----------|----------|----|-------------|-----------|
| 飾枕 | 座蒲團 | 裾除 | 頭巾 | 練帽子 <small>(俗ツノカクシ名)</small> | 綿帽子 | 挾箱油單 | 油單  | 萌黃地惣唐草木綿御定紋付 | 萌黃木綿御定紋付 | 萌黃唐草木綿無紋 | 男物 | 黒羽二重御紋附男物小袖 | 白羽二重御下着無垢 |
| 一組 | 一組  | 一組 | 一組 | 一組                           | 一組  | 一組   | 一組  | 一組           | 一組       | 一組       | 一組 | 一組          | 一組        |
| 十  | 五   | 五  | 五  |                              |     | 十    | 長持用 | 三圓三十錢        | 二圓八十錢    | 一圓六十錢    |    |             |           |
| 八  |     |    |    |                              |     | 三    | 箆筥用 | 二圓六十錢        | 二圓十五錢    | 一圓卅五錢    |    |             |           |
| 圓  | 圓   | 圓  | 圓  |                              |     | 七    | 圓   | 錢            | 錢        | 錢        |    |             |           |
| 十  | 二   | 四  | 四  |                              |     |      |     | 二圓六十錢        | 二圓十五錢    | 一圓卅五錢    |    |             |           |
| 圓  | 圓   | 圓  | 圓  |                              |     |      |     | 錢            | 錢        | 錢        |    |             |           |
|    |     |    |    |                              |     |      |     | 二圓三十錢        | 一圓九十錢    | 一圓十五錢    |    |             |           |
|    |     |    |    |                              |     |      |     | 錢            | 錢        | 錢        |    |             |           |
|    |     |    |    |                              |     |      |     | 圓            | 錢        | 錢        |    |             |           |
|    |     |    |    |                              |     |      |     | 圓            | 錢        | 錢        |    |             |           |
|    |     |    |    |                              |     |      |     | 圓            | 錢        | 錢        |    |             |           |



# 吳服物代價表

## 白地類

|        |         |       |         |
|--------|---------|-------|---------|
| 白鹽瀬羽二重 | 二十五圓まで  | 白信州魚子 | 十八圓まで   |
| 白羽二重   | 十七圓まで   | 白市樂織  | 十一圓まで   |
| 白魚子羽二重 | 十五圓まで   | 白米澤糸織 | 十九圓まで   |
| 白紋羽二重  | 十三圓まで   | 白秋田畝織 | 十八圓まで   |
| 白八橋織   | 六圓五十錢より | 白浮織   | 七圓五十錢より |
| 白壁羽二重  | 十二圓まで   | 白綾子   | 十八圓まで   |
| 白紋壁羽二重 | 十二圓まで   | 白本紋綾子 | 十三圓まで   |
| 白絹     | 三圓まで    | 白奉書紬  | 四圓五十錢まで |
| 白本魚子   | 十五圓まで   | 白大幡縮緬 | 七圓五十錢まで |
| 白川越魚子  | 十五圓まで   |       | 三十圓まで   |

|              |   |      |      |     |
|--------------|---|------|------|-----|
| 色絹振袖模様練重付    | 一 | 二十八圓 | 二十四圓 | 二十圓 |
| 全留袖          | 一 | 二十六圓 | 二十二圓 | 十八圓 |
| 鼠絹紋付白絹重付     | 一 | 三十圓  | 二十二圓 | 十八圓 |
| 鼠明石御紋付白練白麻重付 | 一 | 十八圓  | 十六圓  | 十七圓 |
| 夏男物          |   |      |      |     |
| 黒絹御紋付御羽織     | 一 | 十七圓  | 十二圓  | 八圓  |
| 水淺黄越後帷子      | 一 | 十四圓  | 十一圓  | 八圓  |
| 鼠麻御紋付帷子      | 一 | 十四圓  | 十一圓  | 八圓  |

In Paris one can do better without a bed than without an evening-dress.





友禪中幅縮緬  
 友禪小幅縮緬  
 更紗縮緬  
 小紋縮緬  
 玉糊縮緬  
 板縮緬  
 絞縮緬  
 色鹿子絞  
 友禪紋縮緬  
 玉糊紋縮緬  
 友禪紋羽二重  
 色絞紋羽二重

二十三圓より  
 十八圓より  
 九圓五十錢より  
 九圓五十錢より  
 十四圓より  
 九圓より  
 十一圓より  
 十二圓より  
 十三圓より  
 十七圓より  
 十四圓より  
 十三圓より  
 十五圓より  
 十四圓より

中形絹  
 中形太織  
 中形絹  
 更紗太織  
 更紗絹  
 更紗魚子  
 更紗奉書紬  
 更紗羽二重  
 小紋斜子  
 小紋羽二重

六圓五十錢より  
 四圓五十錢より  
 四圓五十錢より  
 四圓五十錢より  
 四圓五十錢より  
 五圓五十錢より  
 四圓五十錢より  
 四圓二十錢より  
 五圓より  
 八圓より  
 六圓より  
 八圓より  
 九圓より  
 九圓より  
 十二圓より

友禪類

本八丈  
 秋田八丈  
 黄八丈  
 とび八丈  
 新御召  
 瓦斯風通御召  
 米澤琉球紬  
 本琉球紬  
 大島紬  
 節上田紬  
 結城紬  
 柳川紬

六圓五十錢より  
 九圓より  
 七圓より  
 四圓五十錢より  
 四圓五十錢より  
 二圓五十錢より  
 三圓五十錢より  
 五圓より  
 七圓より  
 六圓より  
 八圓五十錢より  
 四圓五十錢より  
 七圓五十錢より  
 六圓より  
 二十五圓より  
 十八圓より  
 九圓より  
 十二圓より  
 三圓五十錢より

本場結城  
 綿結城  
 愛知綿  
 綿銘撰  
 新絹  
 紡績織  
 琉球木綿  
 雙子  
 瓦斯雙子  
 松阪綿  
 瓦斯風通  
 綿大島

一圓八十錢より  
 二圓五十錢より  
 七十五錢より  
 一圓より  
 二圓三十錢より  
 一圓三十錢より  
 二圓五十錢より  
 三圓より  
 一圓三十錢より  
 一圓五十錢より  
 七十五錢より  
 九十錢より  
 八十錢より  
 一圓五十錢より  
 二圓二十錢より  
 一圓七十錢より  
 二圓二十錢より  
 三圓より





御婦人帶地類

|         |         |        |         |         |         |        |         |         |        |         |
|---------|---------|--------|---------|---------|---------|--------|---------|---------|--------|---------|
| 綴錦丸帶    | 綴錦片側    | 七絲丸帶   | 七絲中帶    | 七絲片側    | まがひ七絲片側 | 厚板丸帶   | 明珍丸帶    | 博多丸帶    | 博多中帶   | 博多片側    |
| 二百五十圓より | 四十五圓より  | 百五十圓より | 八十圓より   | 六十圓より   | 二圓五十錢より | 十八圓より  | 四十圓より   | 二十五圓より  | 十八圓より  | 七圓五十錢より |
| 色縹子丸帶   | 色縹子片側   | 色紋縹子丸帶 | 色紋縹子片側  | 黒本唐縹子丸帶 | 黒本唐縹子片側 | 支那縹子丸帶 | 支那縹子片側  | 風通片側    | 黒縹縹子片側 | 色縹縹子片側  |
| 十六圓より   | 五圓五十錢より | 十三圓より  | 七圓五十錢より | 十二圓より   | 六圓五十錢より | 十圓前後   | 四圓五十錢より | 二圓五十錢より | 三圓より   | 一圓四十錢より |

夜具地類

|         |         |         |         |         |         |         |       |        |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|-------|--------|
| 御納戸大形縮緬 | 御納戸大形絹  | 御納戸大形紬  | 御納戸大形太織 | 縹八丈     | 節糸織     | 本八丈     | 銘撰    | 太織     |
| 十九圓より   | 三圓八十錢より | 四圓五十錢より | 三圓五十錢より | 七圓五十錢より | 四圓五十錢より | 八圓五十錢より | 五圓より  | 三圓より   |
| 秩父縹     | 郡内甲斐縹   | 巽斗系縹    | 瓦斯系縹    | 綾木綿     | 松阪縹     | 紡績織     | 更紗真岡  | 大形真岡   |
| 四圓五十錢より | 八圓より    | 一圓三十錢より | 九圓五十錢より | 一圓三十錢より | 九十五錢より  | 一圓二十錢より | 七十錢より | 八十五錢より |

座蒲團地類

|                    |                    |                    |                |                    |                 |
|--------------------|--------------------|--------------------|----------------|--------------------|-----------------|
| 緞子                 | 縮緬形付               | 更紗絹緞               | 大形紬            | 吉野織                | 銘撰              |
| 三圓五十錢より<br>七圓五十錢まで | 三圓五十錢より<br>四圓まで    | 一圓より<br>九圓まで       | 一圓より<br>一圓十錢まで | 二圓五十錢より<br>三圓五十錢まで | 一圓より<br>一圓二十錢まで |
| 緞八丈                | 本八丈                | 甲斐絹                | 瓦斯斜子織          | 熨斗糸織               |                 |
| 二圓五十錢より<br>二圓五十錢まで | 一圓八十錢より<br>二圓五十錢まで | 一圓二十錢より<br>一圓五十錢まで | 一圓五十錢          | 三十五錢より<br>五十五錢まで   |                 |

吾妻コオト地類

|                |                |                  |
|----------------|----------------|------------------|
| 色紋羽二重          | 色紋御召           | 色紋綾絨             |
| 十八圓より<br>十八圓まで | 十六圓より<br>十八圓まで | 二十五圓より<br>二十二圓まで |
| 色紋カシミヤ絨        |                |                  |
| 十五圓より<br>十五圓まで |                |                  |

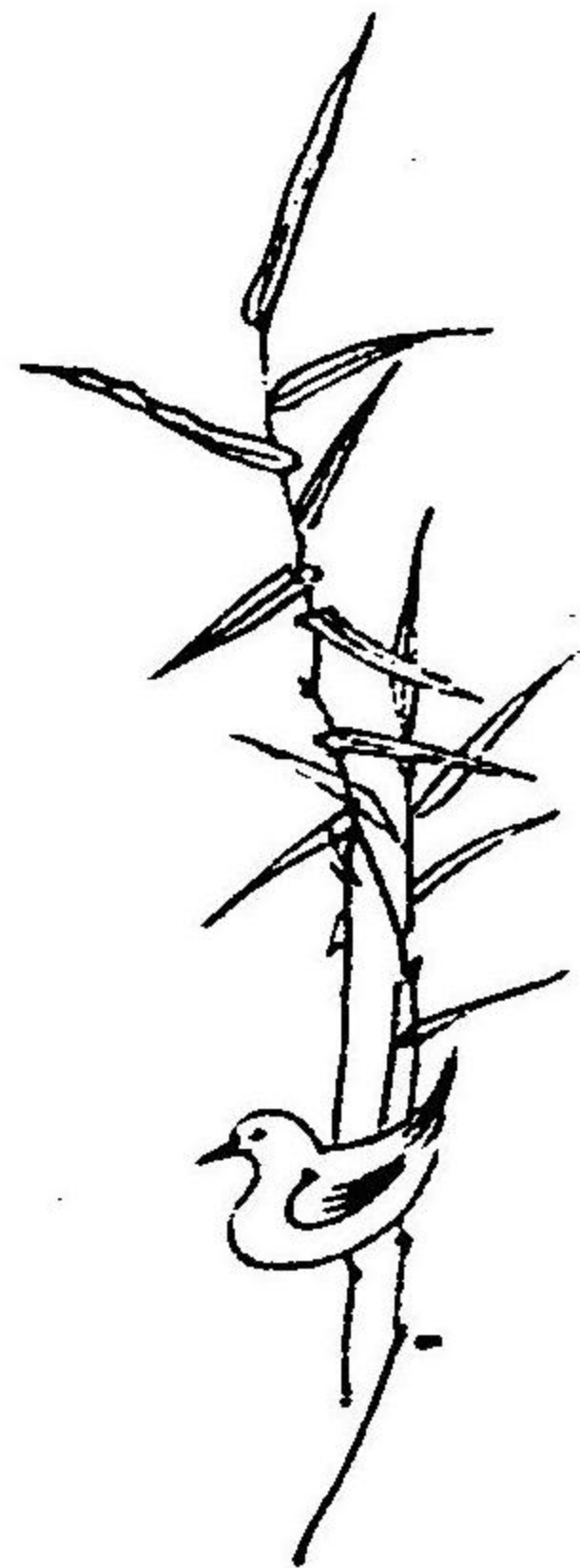
御帛紗類

|                 |                 |                |
|-----------------|-----------------|----------------|
| 緞織              | 鹽瀨茶帛紗           | 鹽瀨友禪袷          |
| 二十圓より<br>二十圓まで  | 一圓五十錢より<br>二圓まで | 十八圓より<br>十八圓まで |
| 鹽瀨友禪單           | 友禪縮緬            |                |
| 六圓五十錢より<br>九圓まで | 一圓二十錢より<br>一圓まで |                |

いろいろ

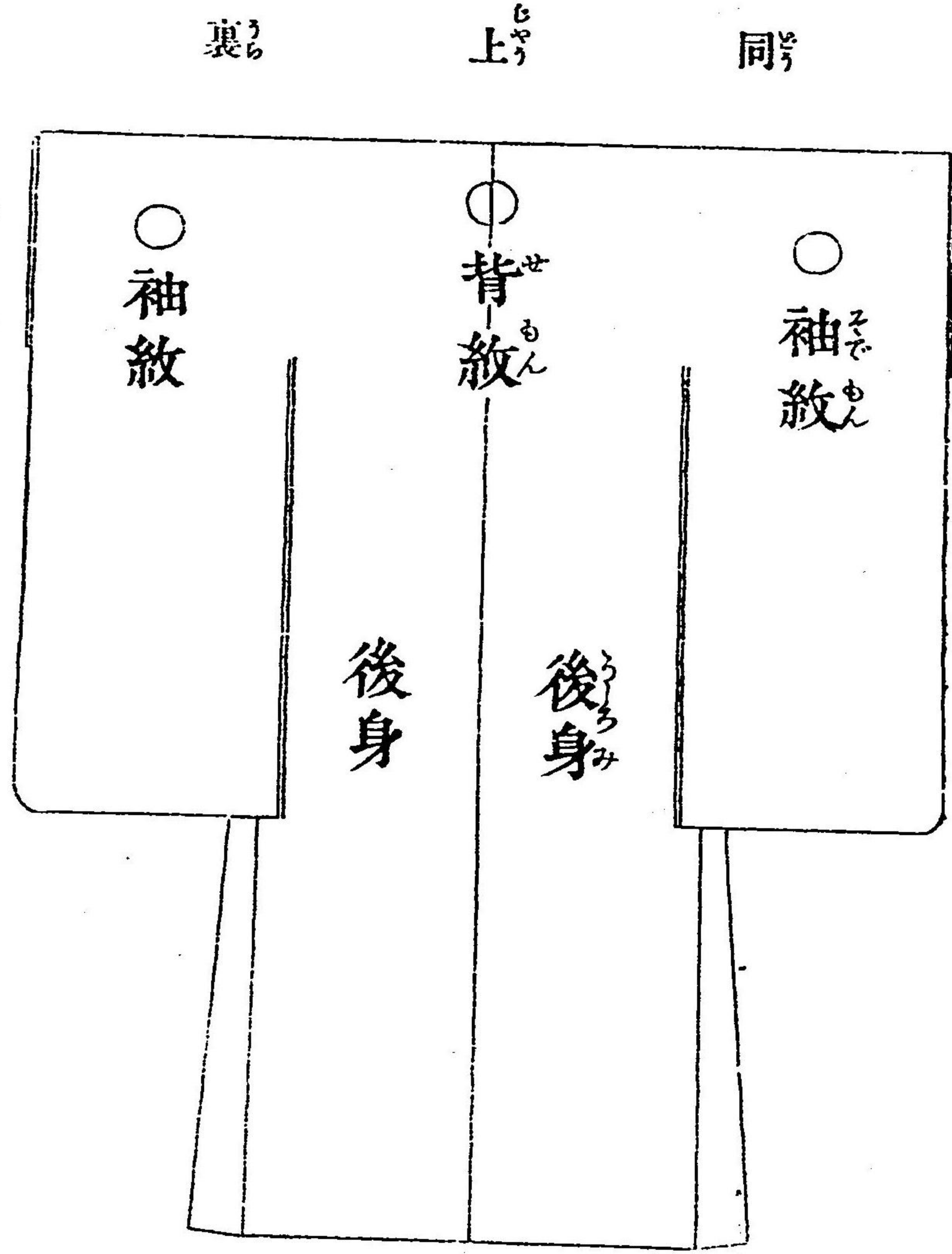
|                    |                 |               |                  |
|--------------------|-----------------|---------------|------------------|
| 友禪縮緬長襦袢            | 友禪縮緬袖地          | 色縮緬頭巾         | 縮緬半衿             |
| 二十八圓より<br>二十五圓まで   | 七圓五十錢より<br>五圓まで | 三圓より<br>五圓まで  | 六十錢より<br>一圓八十錢まで |
| 縮緬帶揚               | 絞紋羽二重帶揚         | 白大幅縮緬兵兒帶      | 白中幅縮緬兵兒帶         |
| 一圓四十錢より<br>二圓五十錢まで | 九十錢より<br>四圓まで   | 七圓より<br>十三圓まで | 八圓より<br>五圓まで     |

くれないの初花籠の色深く  
思ひし心我忘れめや

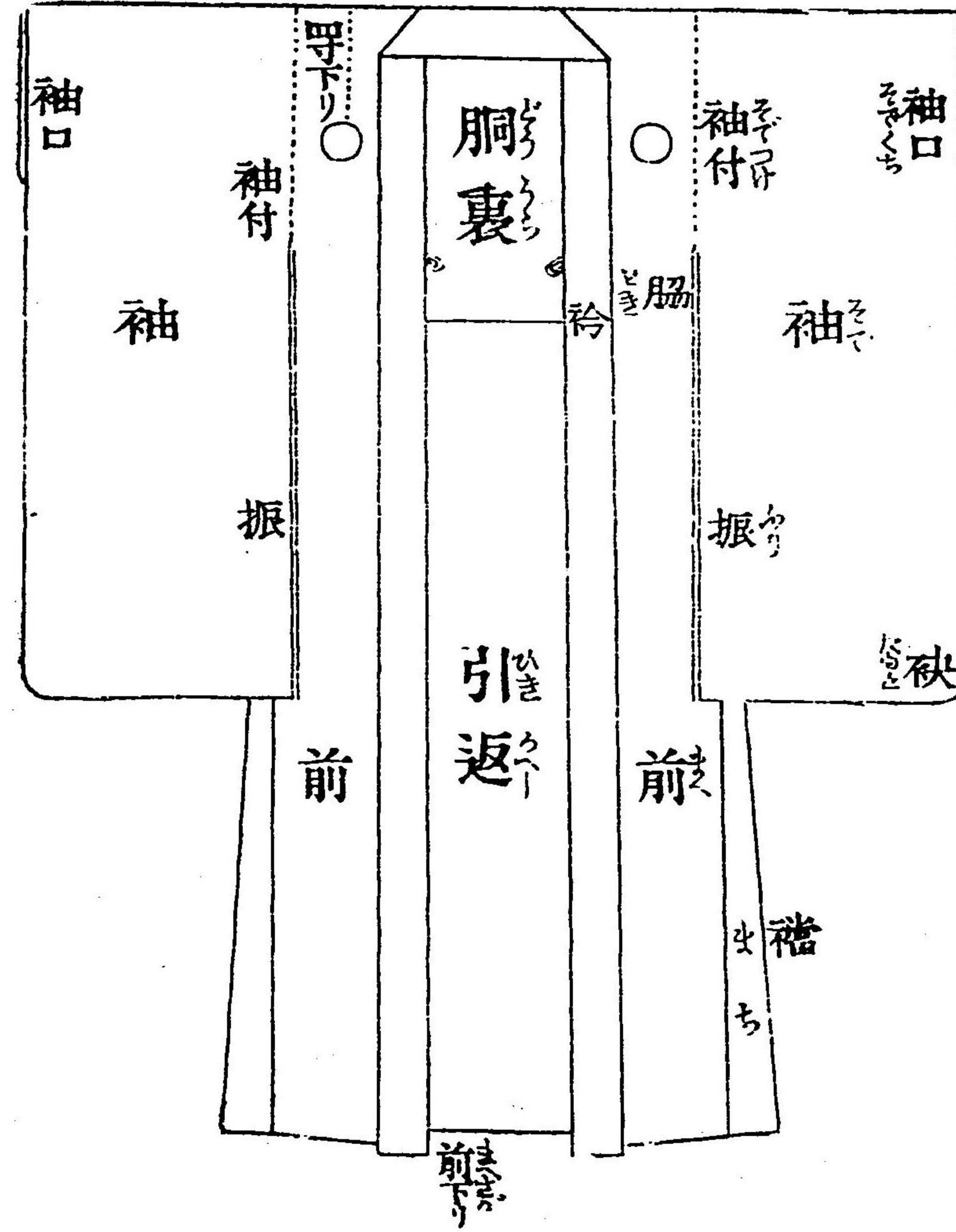


黒縮緬綿入羽織

婦人羽織(小幅物)



表圖の織羽物の婦人



衣服裁方積方の事

胴裏は七絲織(大幅物)

代金二十三圓五十錢位

内譯

白縮緬、小幅、三丈物一反

七絲織、大幅、五尺五寸

真綿、染仕立上り

寸法

丈二尺五寸 袖一尺六寸

前の返り紐付まで、後の返り一尺三寸

裁方

|          |            |
|----------|------------|
| 幅分五寸九    |            |
| 後        | 身總丈、一丈七尺四寸 |
| 前        | 前          |
| 前        | 後          |
| 衿 六尺二寸   |            |
| 袖總丈 六尺四寸 |            |

婦人羽織(中幅物)



銀鼠縮緬綿入羽織  
胴裏は色綾子

代金十五圓五十錢位

内譯

白縮緬中幅、二丈三尺五寸

色綾子、一丈八寸

真綿、染仕立上り

寸法

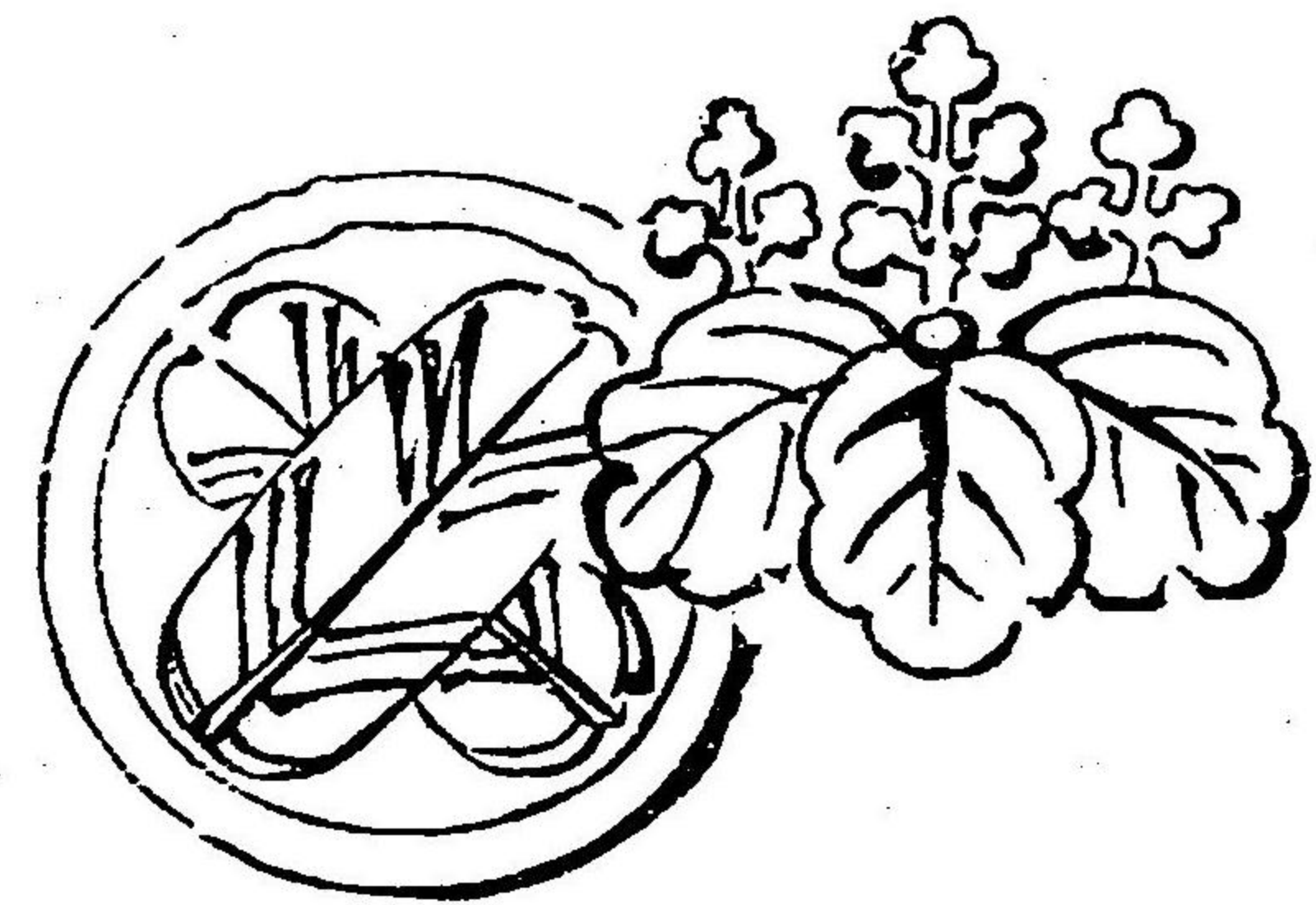
丈二尺五寸 袖一尺五寸

前の返り紐付まで、後返り一尺三寸

裁方

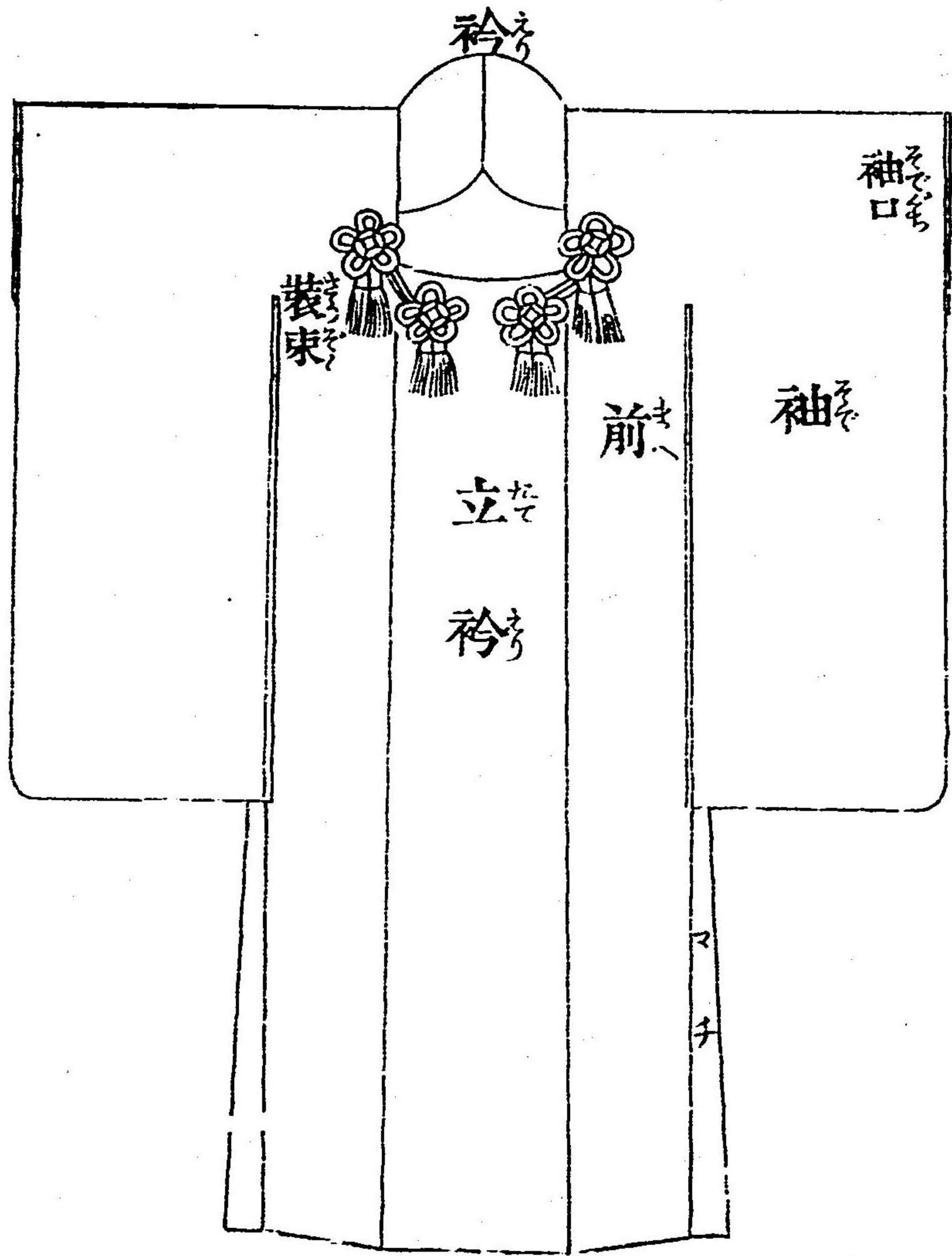
|          |           |
|----------|-----------|
| 幅寸二尺一    |           |
| 後        | 身總丈一丈七尺一寸 |
| 前        | 前         |
| 前        | 後         |
| 衿 五尺七寸   |           |
| 袖總丈 六尺四寸 |           |

の上がき重にだきなさ



小夜衣

表圖の服被子女



幅分五寸九

|    |   |                |   |             |
|----|---|----------------|---|-------------|
| 袖口 | 後 | 身總丈一丈二尺六寸<br>前 | マ | 袖總丈<br>六尺八寸 |
|    |   | 前              | チ |             |

友禪縮緬四ッ身羽織  
 胴裏は檜皮色綾子  
 代金十四圓五十錢位  
 内譯  
 友禪縮緬小幅一丈九尺五寸  
 眞綿 染仕立上り  
 寸法  
 丈一尺八寸 袖六寸  
 前の返り紐付まで後の返り一尺  
 裁方  
 紅色綸子一丈

四ッ身女子羽織(小幅物)

友禪縮緬四ッ身羽織

代金十四圓五十錢位

内譯

友禪縮緬小幅一丈九尺五寸

眞綿 染仕立上り

寸法

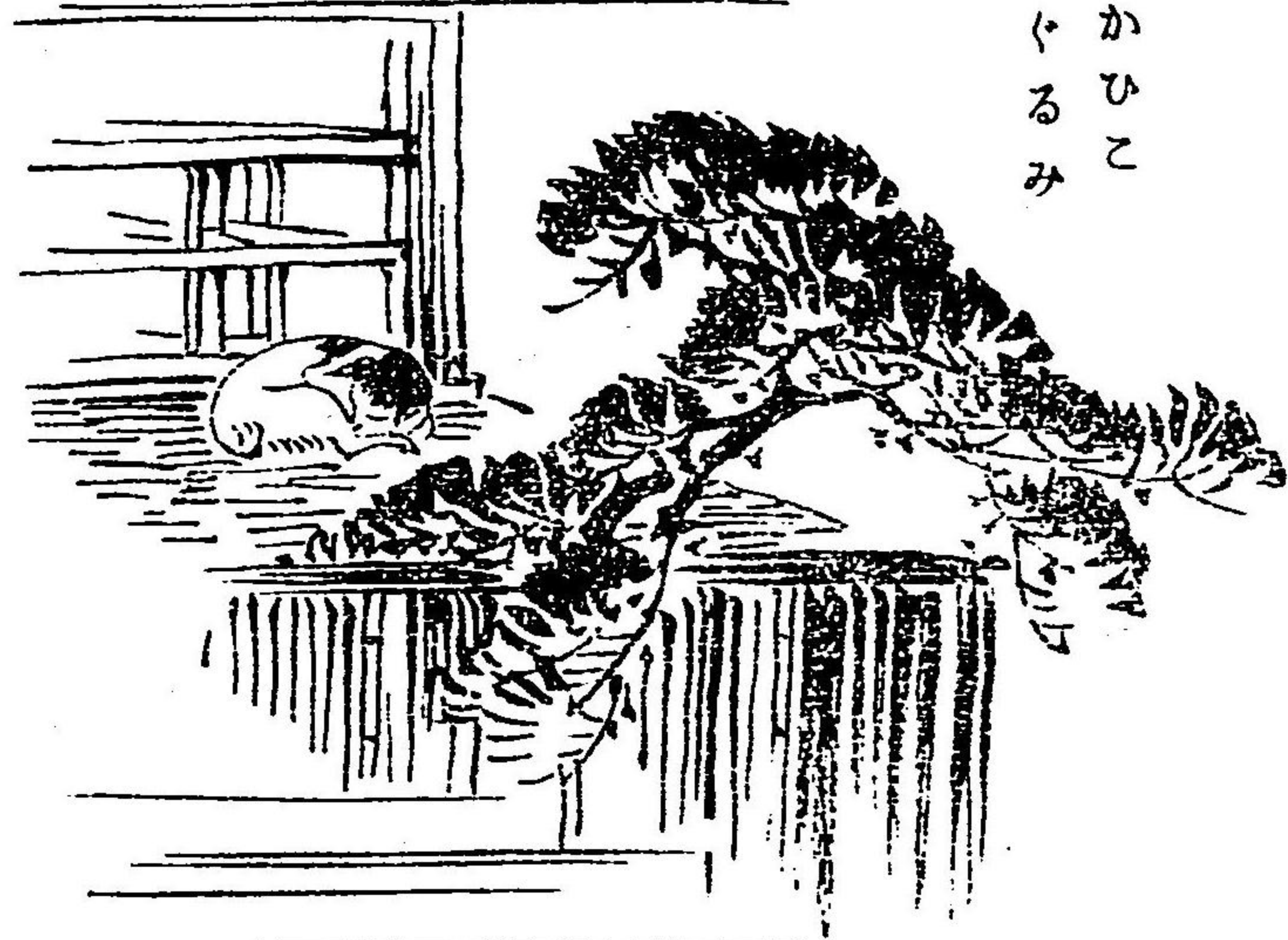
丈一尺八寸 袖六寸

前の返り紐付まで後の返り一尺

裁方

紅色綸子一丈

おかひこ  
ぐるみ



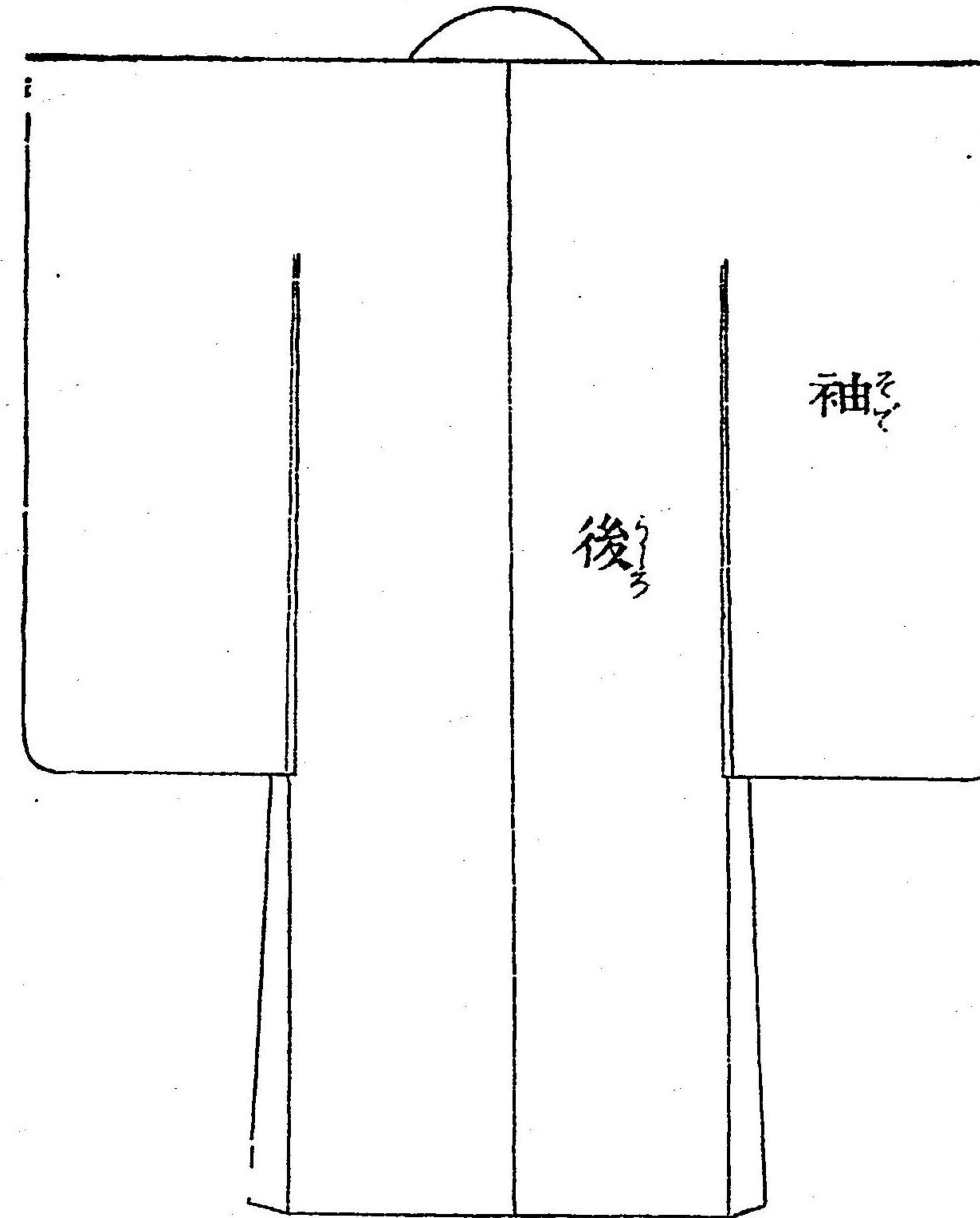
|           |      |        |         |
|-----------|------|--------|---------|
| 幅 寸 二 尺 一 |      | 五二     | 五二      |
| ○         | 七    | 六尺四寸   | ハコマチ    |
|           |      | 二尺二寸袖口 | 餘り四尺二寸  |
|           | 袖總丈  | 六尺四寸   |         |
|           | 後    | 二尺五寸   |         |
|           | 前    | 二尺六寸   |         |
| 六         | 六    | 四      | 五半 月 袴  |
|           | 立 袴  | 二尺二寸   |         |
|           | 三尺五寸 |        | 餘り 一尺三寸 |

丈一尺七寸 袖一尺五寸 返し七寸  
裁方

友禪縮緬中幅一丈五尺 緋紋羽二重九尺五寸  
眞綿 装束 仕立上り

參身被服(中幅物)  
友禪縮緬參身綿入被服  
裏は緋紋羽二重  
代金十四圓  
内譯

裏 上 同



右の寸法にて中幅縮緬を以て地色を藤色に袖下と裾とに雪持の松竹梅模様を染め上げて見れば

代金十七圓位

内譯

白中幅縮緬一丈五尺 裏紋羽二重九尺五寸

眞綿 装束 仕立上り

四ッ身被服(中幅物)

一友禪縮緬四ッ身綿入被服

裏は鴉色綸子

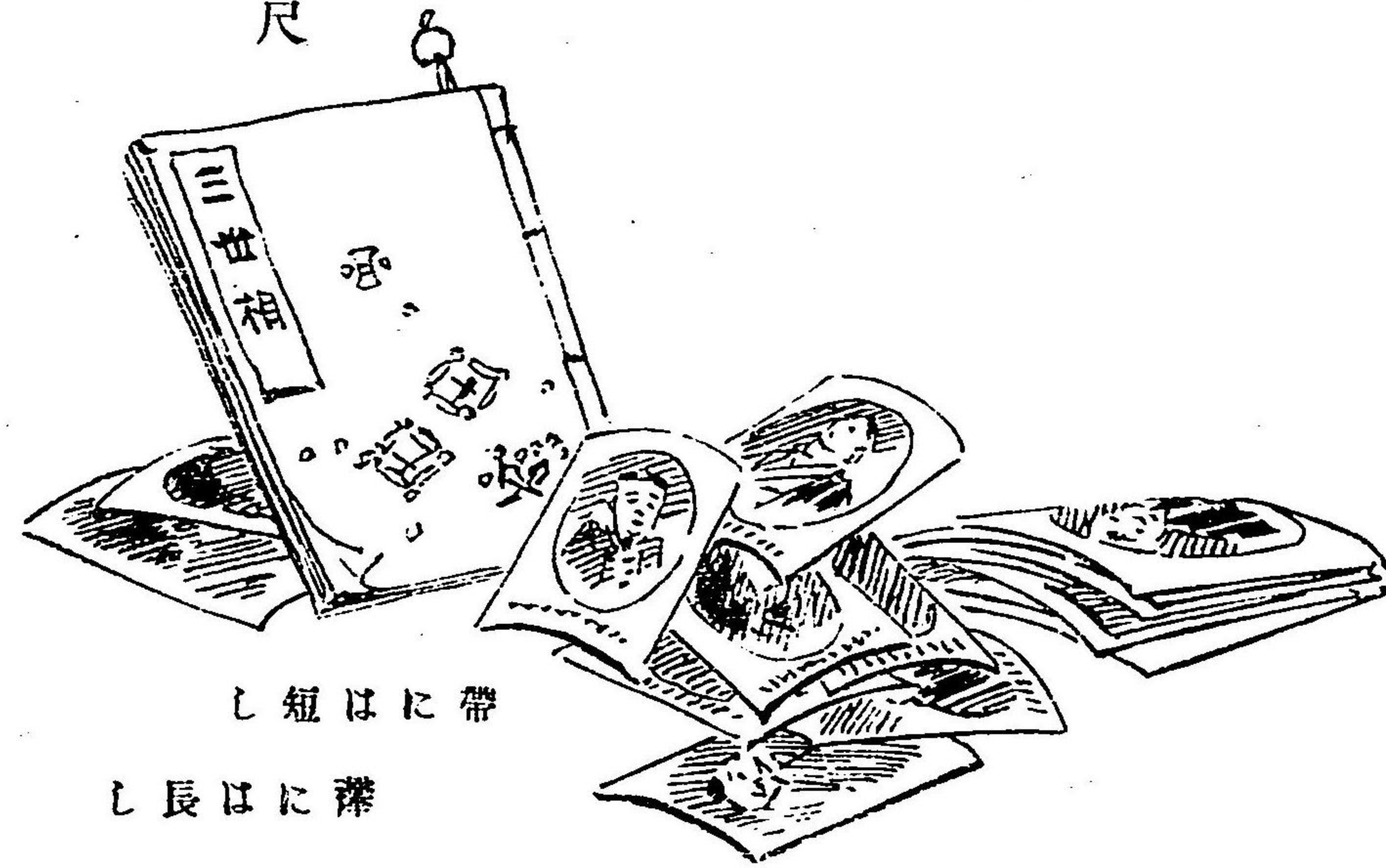
代金十七圓位

内譯

友禪縮緬一丈九尺五寸 鴉色綸子一丈一尺

眞綿 装束 仕立上り

寸法



し短はに帯

し長はに襟

丈二尺 袖一尺六寸 返り八寸  
裁方

|       |                |                 |        |             |
|-------|----------------|-----------------|--------|-------------|
| 寸五    | 寸七             | 寸七              | 寸九     | 寸九          |
| 前三尺   | 壹尺<br>五寸<br>餘り | 一尺<br>三寸<br>半月衿 | 前三尺    | 袖口二尺六寸      |
| 後貳尺八寸 |                |                 | 後二尺八寸  | 袖總丈<br>六尺八寸 |
| 同     |                |                 | マチ貳尺八寸 | 立衿<br>四尺    |
|       |                |                 | 同      | 餘り七尺二寸      |

右の寸法にて中幅縮緬を以て地色を淺縹色に袖下と裾とに千羽鶴の模様を染め上げて見れば

代金二十三圓五十錢位

内譯

白縮緬一丈九尺五寸 裏紅紋羽二重一丈一尺

眞綿 装束 仕立上り

四ッ身被服(小幅物)



一友禪染紋二羽重四ッ身綿入被服  
裏は桃色八ッ橋織  
代金十八圓五十錢位

内譯

友禪染紋羽二重二丈二尺三寸 桃色八ッ橋織一丈一尺五寸  
真綿 裝束 仕立上り

寸法

丈二尺 袖一尺六寸 返り八寸

裁方

|       |    |    |    |    |           |    |      |        |
|-------|----|----|----|----|-----------|----|------|--------|
| 幅分五寸七 | 七五 | 前同 | 後同 | 七  | 後二尺八寸前三尺七 | 五  | 袖總丈  | 立衿     |
| 八三    | 八  | 半衿 | 〇二 | 袖口 | マチ        | 八三 | 六尺八寸 | 一尺九寸五分 |
|       |    |    |    |    |           | 餘リ |      | 同      |

右の寸法にて小幅縮緬を以て地色を梅鼠に袖下と裾とに吉野立田の模様を染め上げて見れば

代金二十九圓

内譯

小幅縮緬二丈二尺三寸 鶉色八ッ橋織一丈一尺五寸  
真綿 裝束 仕立上り

婦人被服

一黒横椰子染紋羽二重綿入被服  
裏は肉色八ッ橋織

代金十八圓五十錢位

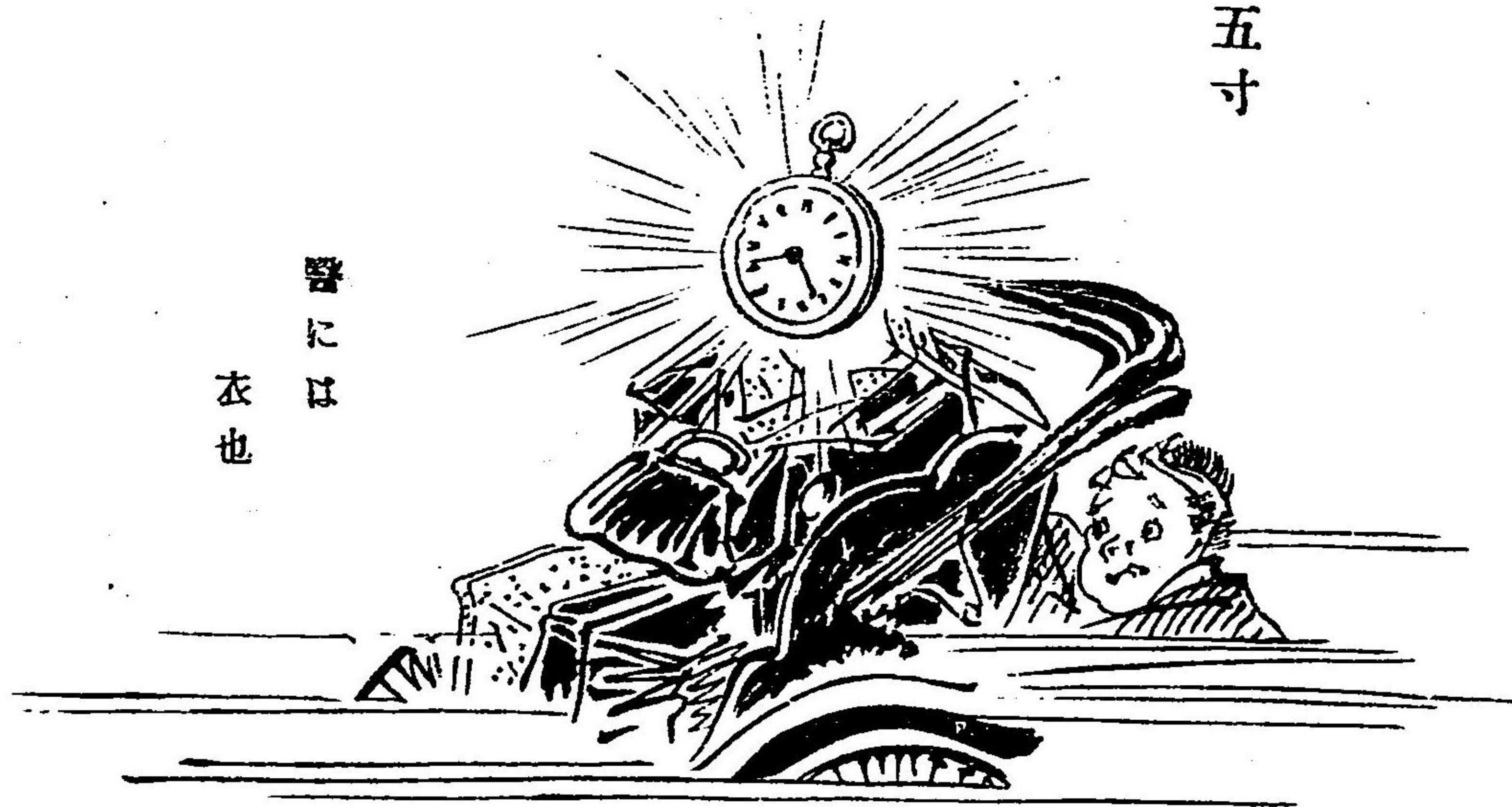
内譯

白紋羽二重一反 肉色織八ッ橋織一丈五寸  
真綿 裝束 染仕立上り

寸法

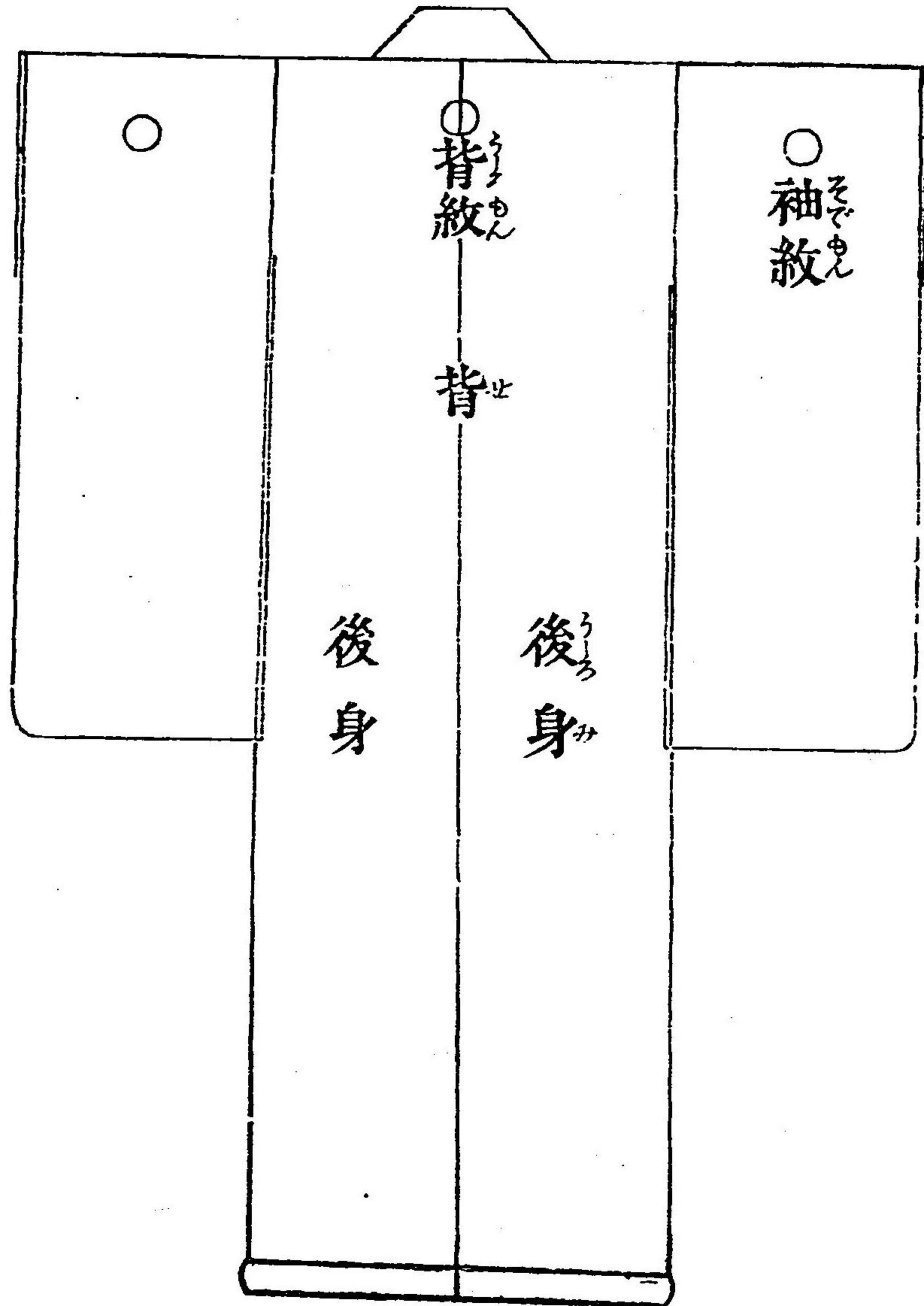
丈二尺五寸 袖一尺六寸

裁方



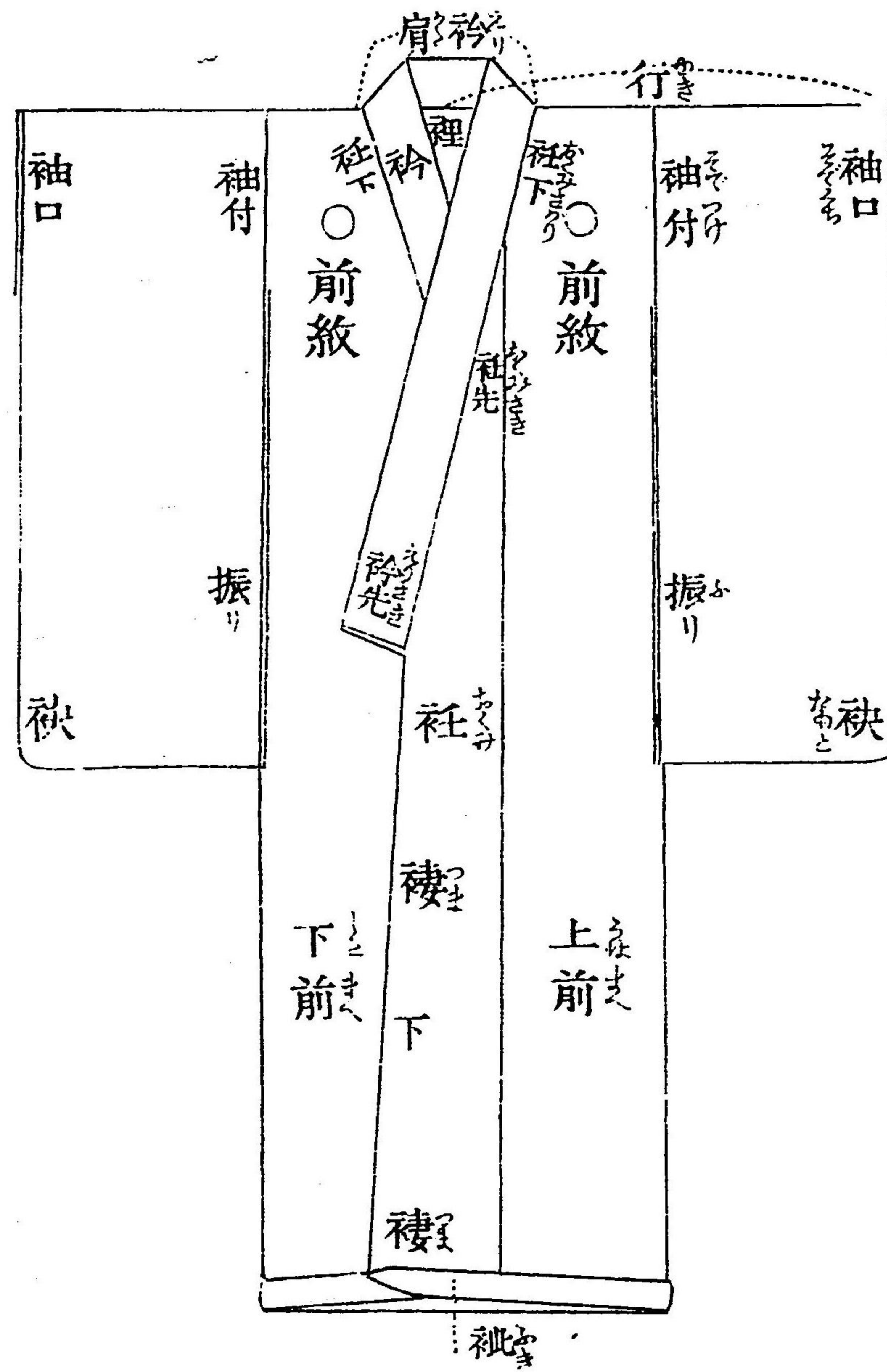
黒羽二重鬘斗目模様綿入 一ッ身男子小袖(小幅物) 上着 一枚

裏 上 同



表圖の袖小人婦

幅分五寸九



|          |        |      |      |      |   |
|----------|--------|------|------|------|---|
| 後四尺三寸五分  | 後前返り   | 袖總丈  | 後衿   | 立衿   | 同 |
| 前四尺五寸五分  | 平均一尺六寸 | 六尺八寸 | 一尺五分 | 二尺五寸 |   |
| 五二       | 袖口マチ   |      |      |      |   |
| 總丈一丈七尺八寸 |        |      |      |      |   |

白羽二重無垢

下着 二枚

代金三十四圓位

内譯

白羽二重上着

一丈六尺五寸

同上裏白茶羽二重

一丈四尺二寸

白茶羽二重下着

六丈一尺五寸

同上裏二丈二尺

真綿吹綿

染仕立上り

模様飛鶴に松繡入

寸法

丈二尺六寸

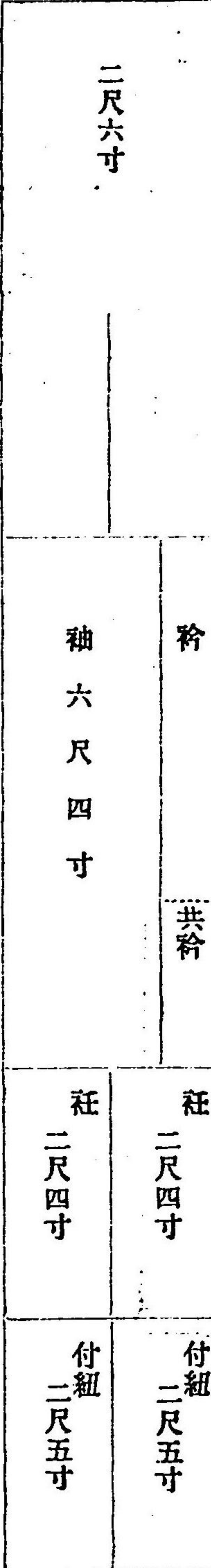
袖一尺六寸

友袖口

裁方

一丈六尺五寸

幅分五寸九



「身女子小袖(中幅物)

藤色縮緬引返し模様綿入  
鶉色友禪縮緬無垢

上着 一枚  
下着 一枚

代金三十三圓位

内譯

白縮緬中幅、一丈六尺五寸

鶉色友禪縮緬、小幅、二丈二尺

紅絹、二丈一尺

真綿吹綿

染仕立上り

模様曙染牡丹に菊藤、高九寸繡入

寸法

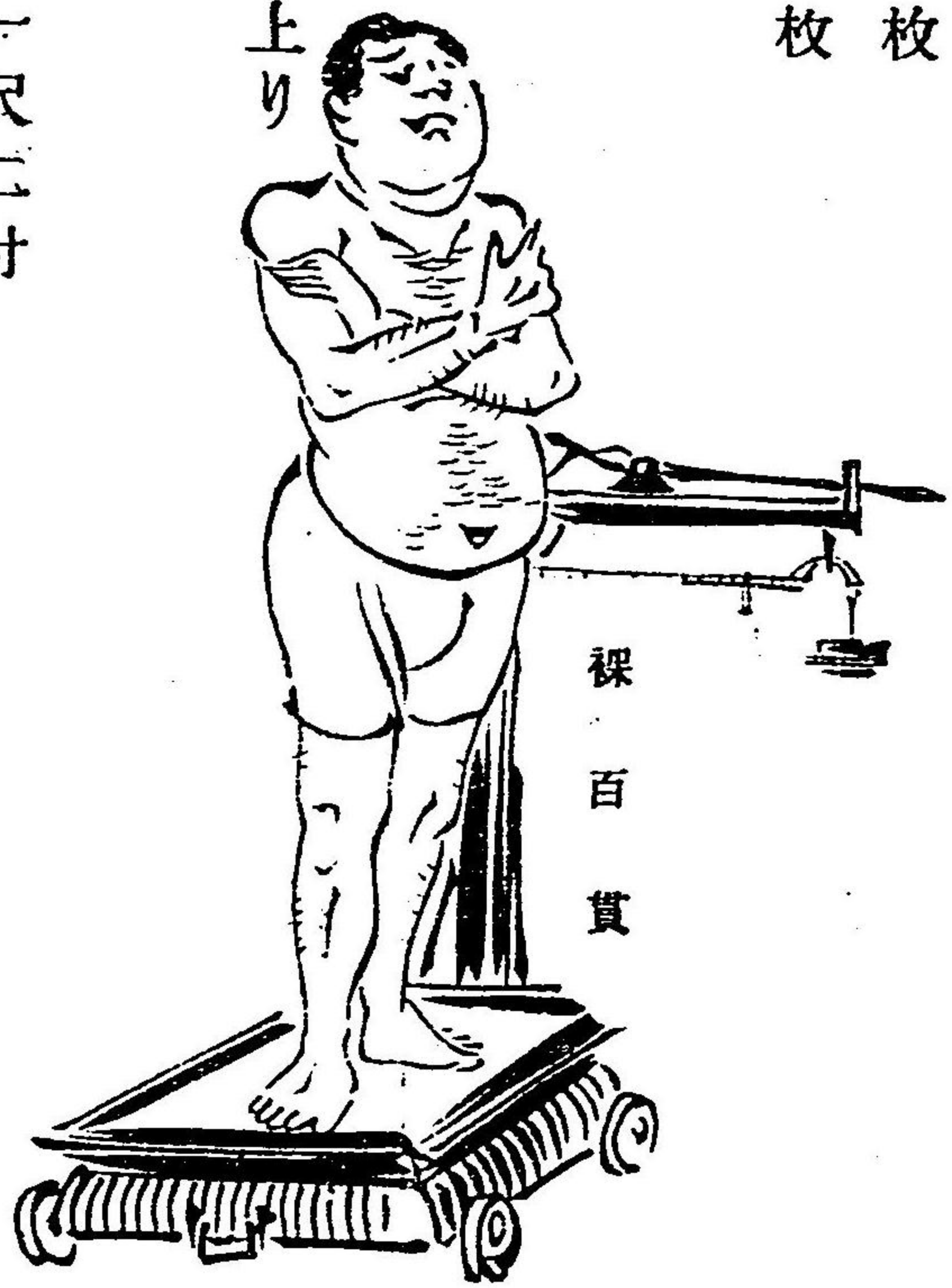
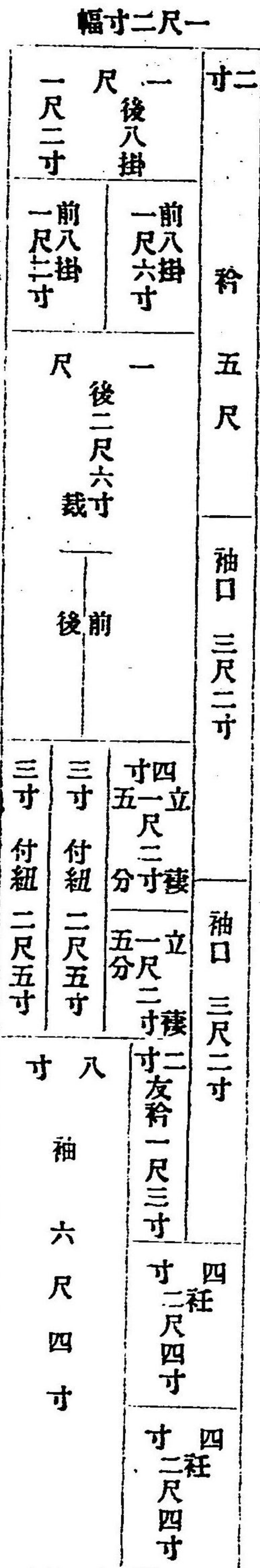
丈二尺六寸

袖一尺六寸

裙廻し一尺二寸

別衿 付紐袖口友品

裁方



四ッ身男子小袖(小幅物)  
 黒紋羽二重、紋付、小袖 上着 一枚  
 浅葱絹無垢 下着 一枚  
 代金十七圓五十錢

内譯

紋羽二重、小袖二丈 浅葱絹一反半

白茶絹二丈五寸 真綿吹綿 染仕立上り

寸法

丈三二尺五寸 袖一尺五寸

裁方



四ッ身女子小袖(中幅物)

紅掛鼠縮緬引返し、裙模様綿入  
 緋紋羽二重廻り無垢胴拔絞り絹  
 代金八十八圓位

上着 一枚  
 下着 二枚

飽かぬもの月夜に菜汁

内譯

白縮緬、中幅、二丈六尺八寸

緋紋羽二重、小袖、三丈六尺

絞り絹三丈五尺 紅絹四丈八尺五寸

真綿吹綿 染仕立上り

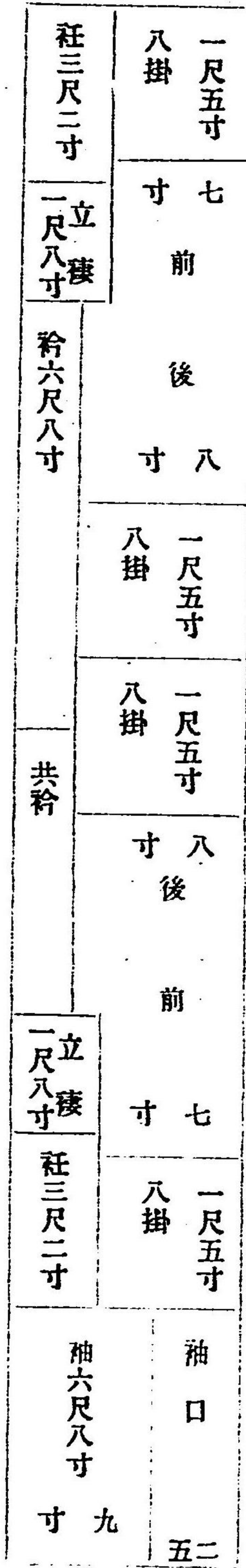
波に白菊の吹上模様綿入

寸法

丈三三尺五寸 袖一尺七寸 引返し一尺四寸 立襟一尺八寸 友袖口

裁方

幅 寸二尺一



袖小黒

本裁婦人小袖(小袖)

黒紋羽二重引返し裏模様綿入小袖 上着 一枚  
御召鼠紋羽二重通し無垢 下着 一枚

代金四十圓

内譯

紋羽二重八丈物一疋 紅絹一反半

真綿吹綿 染仕立上り

模様飛鶴に根引松襦高き六寸

寸法

丈々四尺二寸 袖一尺六寸 引返し一尺五寸 立襦二尺六寸

裁方

幅分五寸九

|          |       |      |    |      |
|----------|-------|------|----|------|
| 後四尺二寸    | 袖六尺四寸 | 袷五尺  | 八掛 | 立襦   |
| 細丈二丈六尺八寸 |       | 一尺   | 八掛 | 二尺七寸 |
|          |       | 五寸   | 八掛 | 立襦   |
|          |       | 五分   | 八掛 | 二尺七寸 |
|          |       | 三寸七寸 | 八掛 | 立襦   |
|          |       | 三寸七寸 | 八掛 | 二尺七寸 |

本裁婦人小袖(小袖)

小紋縮緬引返し綿入

上着 一枚

同上廻り無垢胴抜板緋絹

下着 一枚

代金五十八圓五十位

内譯

白縮緬小袖九丈四尺五寸

紅板緋絹一反一丈 紅絹一疋八尺五寸

真綿吹綿 染仕立上り

寸法

丈々四尺二寸 袖一尺六寸 引返し一尺五寸 立襦二尺七寸

袖口振りかぶせ共四割

裁方



襦子の袴のひだ取るよりも 主の心が取にくし

幅分五寸九

|    |       |
|----|-------|
| 袖  | 三尺四寸  |
| 身頃 | 八尺六寸  |
| 身頃 |       |
| 衿  | 衿七尺六寸 |
| 共衿 | 共     |
| 立袂 | 立二尺七寸 |
| 八掛 | 一尺五寸  |
| 八掛 |       |
| 八掛 |       |
| 八掛 |       |
| 衿  | 袖一尺五寸 |
| 先  | 袖口    |

|    |       |
|----|-------|
| 掛八 | 二五    |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 掛八 |       |
| 立袂 | 立袂二七  |
| 立袂 | 立袂    |
| 立袂 | 立袂    |
| 立袂 | 立袂    |
| 衿  | 衿五尺二寸 |
| 衿共 | 共衿二四  |
| 袖口 | 袖一尺五寸 |
| 袖口 | 袖口    |
| 袖口 | 袖口    |
| 袖口 | 袖口    |
| 先  | 先     |

本裁婦人小袖(大幅物)

梅鼠縮緬引返し裾模様  
緋絞り紋羽二重胴拔

上着一枚  
下着二枚

代金九十圓位

内譯

白縮緬大幅一反一丈七尺  
緋絞り紋羽二重一反一丈一尺  
紅絹一疋一丈 真綿吹綿 染仕立上り  
模様鶴に松竹梅繡入

寸法  
丈々四尺二寸 袖一尺八寸 引返し一尺五寸 立袂二尺五寸  
袖口四割 袖かぶせ振り共四ッ割  
裁方

幅寸八尺一

|    |        |
|----|--------|
| 身頃 | 四尺三寸   |
| 身頃 | 四尺三寸   |
| 衿  | 衿三尺八寸  |
| 共衿 | 共      |
| 八掛 | 八掛三尺五寸 |
| 八掛 | 八掛     |
| 八掛 | 八掛     |
| 八掛 | 八掛     |
| 八掛 | 八掛     |

|    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |      |      |      |        |
|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|------|------|------|--------|
| 八掛 |  | 八掛 |  | 八掛 |  | 八掛 |  | 八掛 |  | 五尺二寸 | 二尺三寸 | 一尺五寸 | 一尺五寸   |
| 八掛 |  | 八掛 |  | 八掛 |  | 八掛 |  | 八掛 |  | 袷    | 共袷   | 立袷   | 袖口 三尺  |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 袷  |  | 袷  |  | 袷  |  | 立袷   | 共袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷   | 立袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷   | 立袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷   | 立袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷   | 立袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷   | 立袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷   | 立袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |
| 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷 |  | 立袷   | 立袷   | 立袷   | 袖口 袖振り |

本裁婦人長襦袢(中幅物)

友禪縮緬長襦袢 一枚  
代金十四圓位

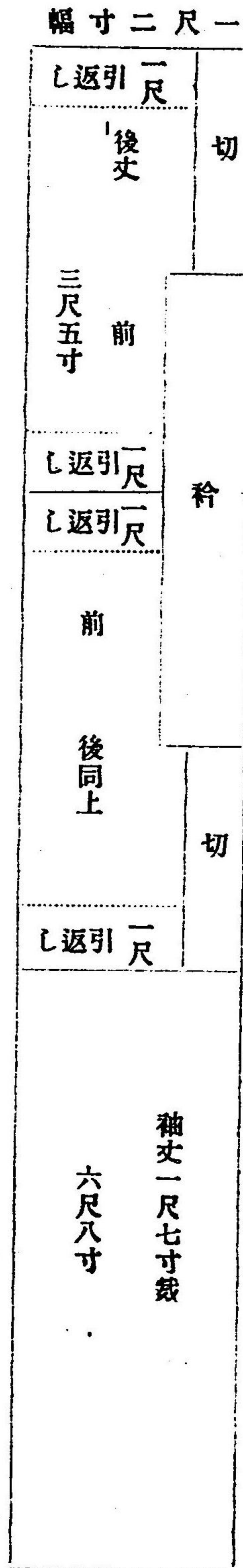
内譯  
友禪縮緬中幅二丈四尺八寸  
鶉色メリンス小幅一丈  
袖裏緋縮緬小幅六尺八寸

仕立上り

寸法

丈二尺五寸 袖一尺七寸 引返し一尺

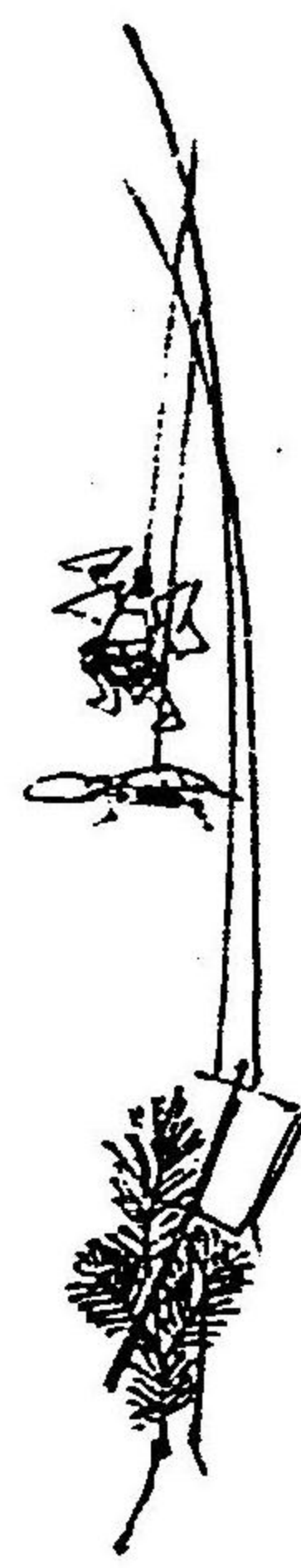
裁方

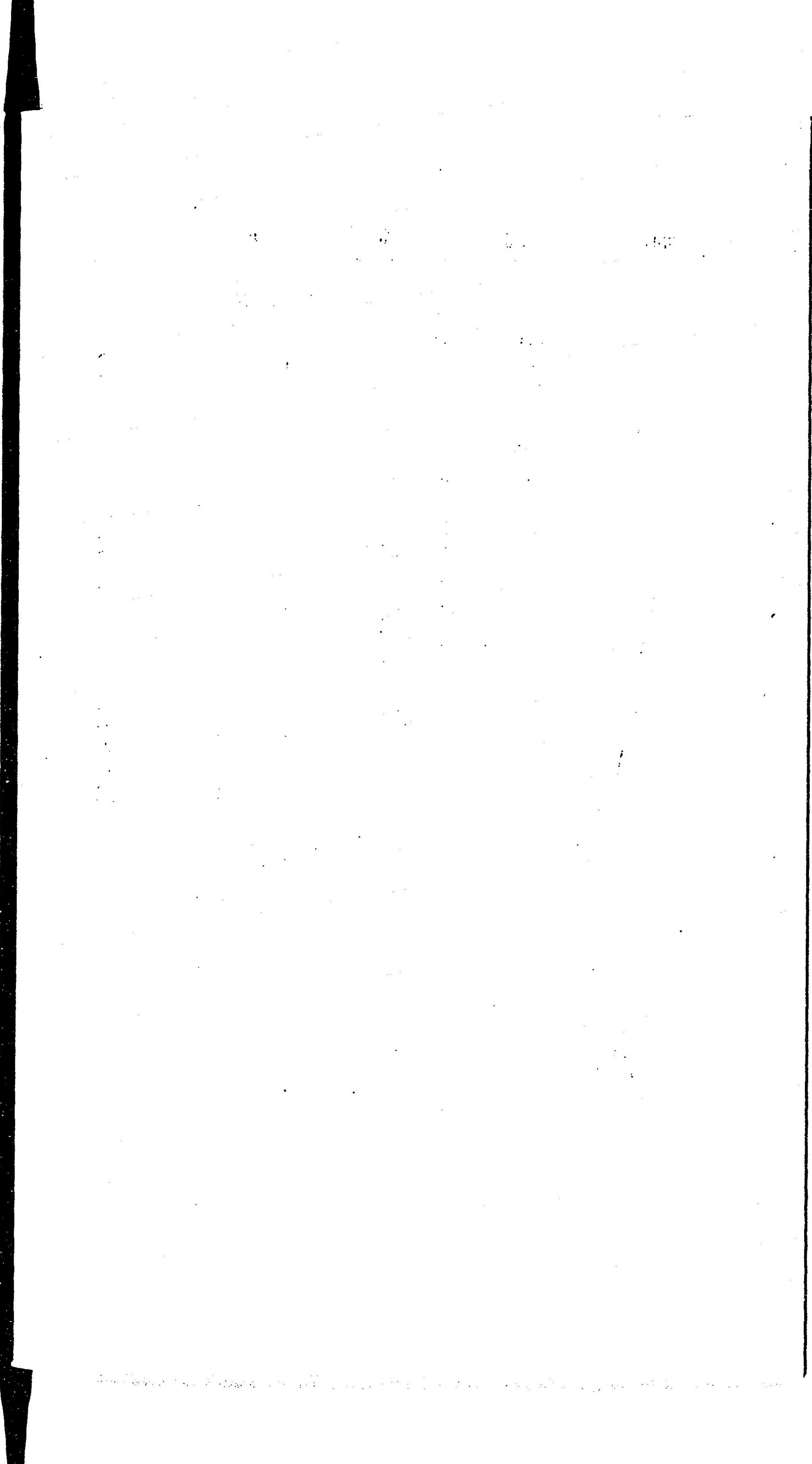
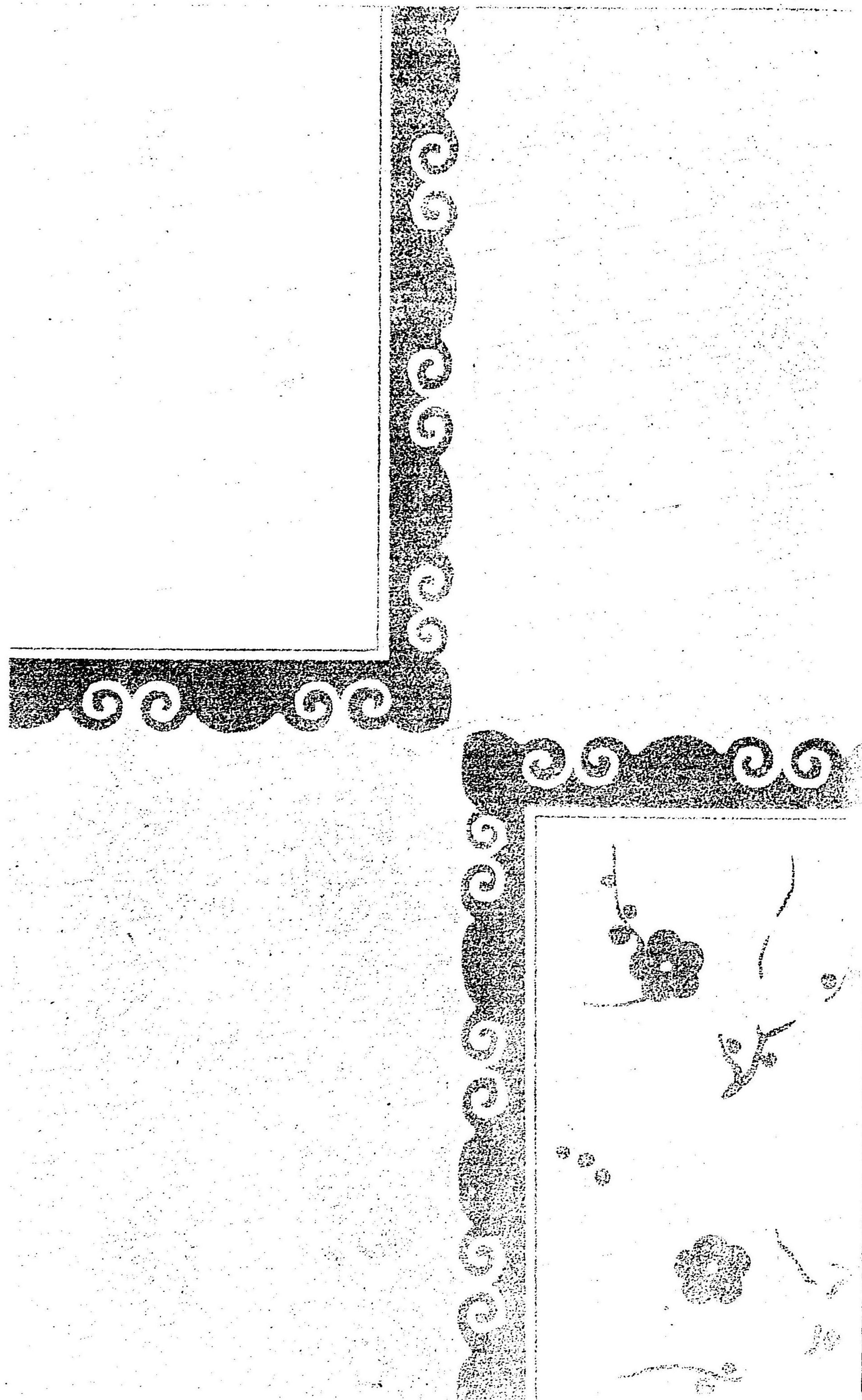


婦人衣服袴の名

- 蛤づま 鯨尺にて一寸位
- 萩づま 鯨尺にて八分位
- 笹づま 鯨尺にて六分位

蓋衣者依也  
身所依也







# 錦上百花

## 植物模様

## 榛園のあるじ

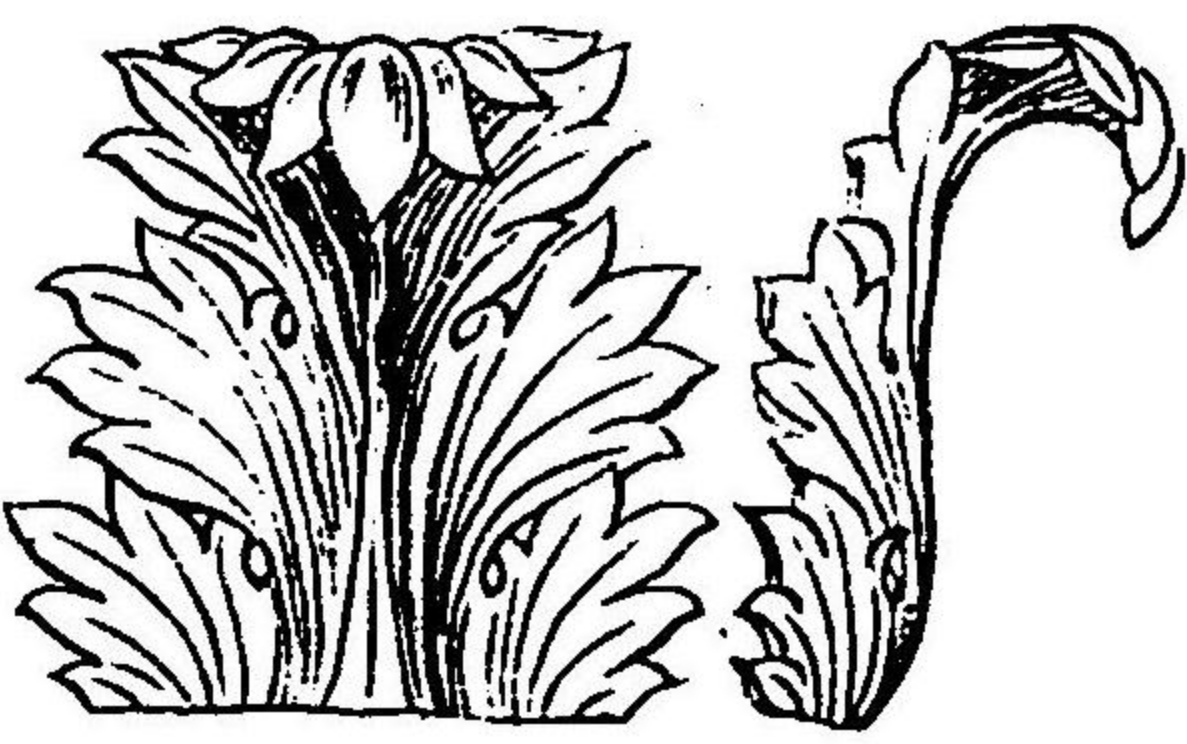
凡<sup>たゞ</sup>ろ人<sup>ひと</sup>が自然<sup>しぜん</sup>の美<sup>み</sup>を感<sup>かん</sup>ずる中<sup>なか</sup>に最<sup>も</sup>も悦<sup>よろこ</sup>ばるゝのは木<sup>き</sup>草<sup>くさ</sup>の花<sup>はな</sup>で此<sup>こ</sup>の花<sup>はな</sup>物<sup>もの</sup>は  
 ど吾<sup>わ</sup>人<sup>にん</sup>の目<sup>め</sup>近<sup>ぢか</sup>に在<sup>あ</sup>つて且<sup>かつ</sup>著<sup>しつ</sup>しく美<sup>うつく</sup>しくもあり従<sup>したが</sup>つて一<sup>いっ</sup>般<sup>ぱん</sup>に愛<sup>あい</sup>玩<sup>くわん</sup>せらるゝ  
 者<sup>もの</sup>は無<sup>な</sup>い唯<sup>ただ</sup>惜<sup>せ</sup>むらくは其<sup>その</sup>盛<sup>さか</sup>と云<sup>い</sup>ふ者<sup>もの</sup>が短<sup>みじか</sup>い一<sup>いち</sup>年<sup>ねん</sup>中<sup>ちゆう</sup>廿<sup>じふ</sup>四<sup>し</sup>番<sup>ばん</sup>の風<sup>かぜ</sup>の絶<sup>た</sup>え  
 暇<sup>ひま</sup>は無<sup>な</sup>いが花<sup>はな</sup>と謂<sup>い</sup>へば散<sup>ち</sup>るを思<sup>おも</sup>ふやうなもので固<sup>かた</sup>より同<sup>ひと</sup>一<sup>いつ</sup>の花<sup>はな</sup>が長<sup>なが</sup>く色<sup>いろ</sup>  
 香<sup>か</sup>を保<sup>た</sup>つ事<sup>こと</sup>は難<sup>かた</sup>い然<sup>しか</sup>るに吾<sup>わ</sup>人<sup>にん</sup>は此<sup>こ</sup>の麗<sup>うつく</sup>しき物<sup>もの</sup>を愛<sup>め</sup>づる餘<sup>あま</sup>に又<sup>また</sup>之<sup>これ</sup>を取<sup>と</sup>つて  
 身<sup>み</sup>邊<sup>へん</sup>の装<sup>さう</sup>飾<sup>じやく</sup>に用<sup>もち</sup>る念<sup>ねん</sup>を起<sup>た</sup>すのである因<sup>よ</sup>で生<sup>い</sup>きた花<sup>はな</sup>なり枝<sup>えだ</sup>なり用<sup>もち</sup>るので  
 は久<sup>ひさ</sup>しきに耐<sup>た</sup>へぬ所<sup>ところ</sup>から常<sup>じやう</sup>住<sup>ぢゆう</sup>の眺<sup>ながめ</sup>にして樂<sup>たの</sup>まうと云<sup>い</sup>ふには勢<sup>いきま</sup>ひ其<sup>その</sup>色<sup>いろ</sup>なり  
 形<sup>かたち</sup>なりをば長<sup>なが</sup>く保<sup>ほ</sup>存<sup>ぞん</sup>し得<sup>え</sup>る物<sup>もの</sup>質<sup>しつ</sup>を假<sup>か</sup>りて模<sup>も</sup>寫<sup>しや</sup>する必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>が生<sup>じやう</sup>ずるのである  
 是<sup>これ</sup>が建<sup>たて</sup>物<sup>もの</sup>に器<sup>き</sup>財<sup>さい</sup>に衣<sup>い</sup>服<sup>ふく</sup>に装<sup>さう</sup>飾<sup>じやく</sup>として植<sup>しよく</sup>物<sup>ぶつ</sup>模<sup>も</sup>樣<sup>やう</sup>が用<sup>もち</sup>らるゝ原<sup>げん</sup>因<sup>いん</sup>であらう歟

と考へらるゝ、  
 茲には彫刻の事は姑く措いて、織物の模様としては、彼の植物が最も多く應用されて居るのを見る。就中花物が多いが、又葉の形の好い者は葉を取り、枝振の好い者は枝を取り、蔓も取れば果を取つたのも稀にある。此事を研究した學者の説に據れば、  
 天地間の植物は實に千種萬様にして計るべからざるほどの數である。従つて美しき花や葉や枝や果を有てる者も無數であるから、其が模様として應用さるゝ範圍は一般に於ては頗る廣いやうなものゝ個々に就て見る時は極めて狭く限られて居る。其は専ら  
 (一) 技人の使用する材料に因つて制限せらるゝ事  
 (二) 技人の所在地の天然に因つて制限せらるゝ事  
 (三) 其の時代の思想觀察又は習俗流行等に因つて制限せらるゝ事  
 との三箇條を擧げて居る、

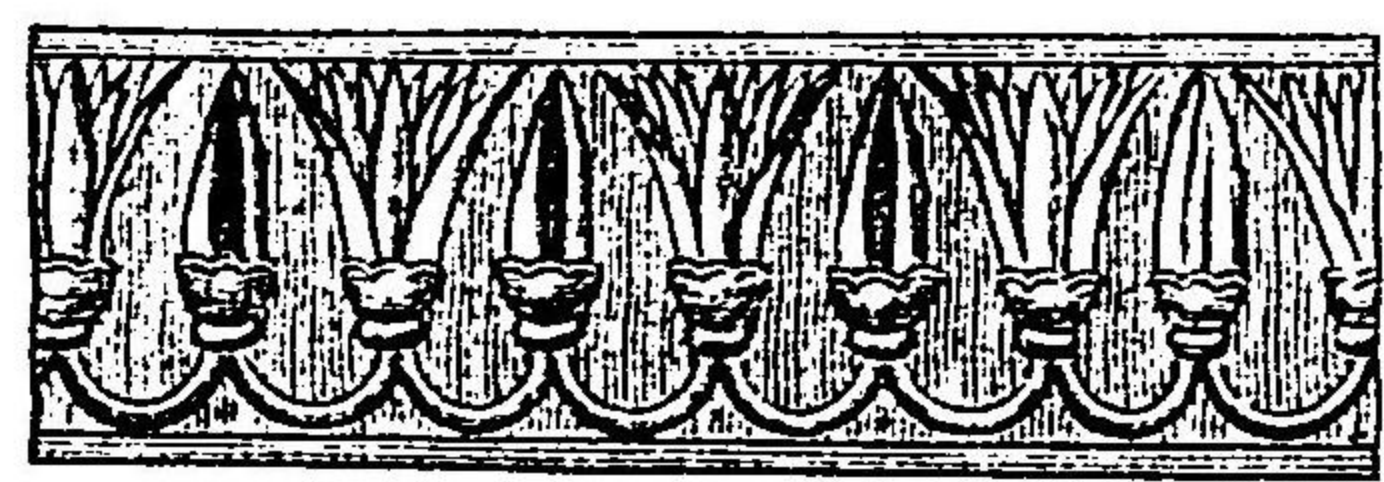
(一)の技人の使用する材料に因ると有るのは、則ち木彫とか石彫とか金屬彫刻とか、織物とか、技術の異なるを指すので、各其の材料が違へば模様の撰擇も自ら別に成らねばならぬ。譬へば石彫では色を出す事が出来ぬから、主として形の面白いものを取る。織物では又色彩が自在であるから、其の長所を用ると云つたやうな譯で、

(二)の所在地の天然に因ると云ふのは、支那では蘭であるの、靈芝であるの、蓮、梔子花、柘榴、佛手柑など云つた、日本では餘り好まぬものを喜ぶ、歐羅巴では、薔薇、董罌粟(實付)、葡萄、苜蓿、椰子の葉、月桂、樹橄欖の枝、甚しいのに至ると、榛の實、無花果、樹の折枝など云ふのがある。其外概して草花の模様の多いのは、由來彼の國人が香氣の有る草花を愛するに因るのである。尤も技人の所在地は五百里の千里の遠はぬでも、同じ國の内地方に因つて既に幾分でも天然が違へば、則ち局部植物界の影響嗜好が違ひ、嗜好が違へば、其が直ちに模様の撰擇に關する例は見られる、

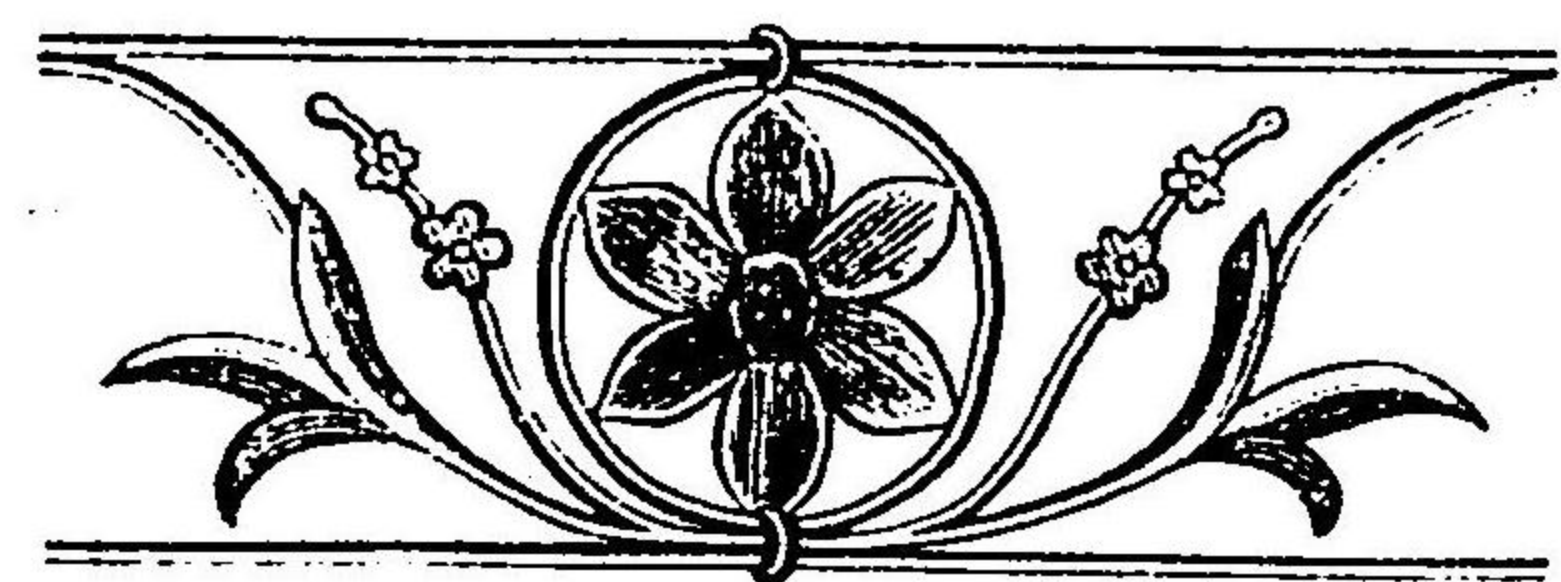
是は織物に於る例證ではないが希臘建築のアカンサス式(藥草の名、第壹圖)埃及のロタス式蓮の一種(第貳圖)の如きは更に謂はず低部埃太利亞の前アルベンに位するイブス谷の一部にルンツと云ふ里が在る其の附近は



圖壹第



圖貳第



圖參第

鐵細工が名物で殊に戸格子窓格子の類を盛んに製造する其の漏空模様は第參圖水仙花にフラゲット、ミイ、ノットを配つたものであるが元來此の水仙

花なる者が模様として用らるゝのは殆ど何地にも例の無いにも拘らず此では専ら之を取るのは一應は甚だ怪まるゝのであるが其が此地方に於る水仙花の局部的勢力を示すので即ちルンツの東に湖水が在つて其の周圍の牧地は一面に野生の水仙で五月になれば滿目雪の如く芳香人を醉しむるばかり住民は頗る之を愛して如何なる貧家の窓にも此花を挿さざるは無いと云ふ有様である又フラゲット、ミイ、ノットも水仙より稍遅れて其中に雜つて咲くのである

(三)の條は敢て細説する迄も無く現に其の變遷は吾人の常に目撃する所である  
扱植物模様も之を衣服に用るのには比較的近代の事で古代には概ね單色を用いたもので其も歐羅巴よりは東洋の方が眞先に着手した西曆千七百年代に當つて盛に東洋に行れた餘波が始めて歐羅巴に入つて縫の惣模様なる者が大流行を極めたとしてある尤も之より先には皆無其用を知らなかつ

たと謂ふのではない、裾とか袖口とか、衿とか云ふやうな衣服の縁の飾には相應に付けてゐたのであるが、一面に此の植物模様を置いた者を着るやうに成つたのは、全く東洋の風を學んだので、元來植物模様の織物に用られたのは、東洋に在つては極めて古く毛氈類の製織せられた當時既に盛行はれたのであつて、彼の有名なるゴブラン織と稱するものゝ如きは、遙に其後千五百年代に及んで始めて巴黎のゴベリン兄弟組製織處で壁掛に織出したのであると聞いて居る。

何に爲よ、織物の植物模様は東洋が元祖であるから、日本などは別して早く傳習して居るので、織物の模様には植物を應用した者が最も多い、日月星辰山龍華蟲宗彝藻火粉米黼黻など、稱へ、又一々調べて見ると、随分諸般の物に亘つて其材を採つて居るが、實際汎く用られて居る所では、第一に指を植物に屈せねばならぬ、亞では動物であらう、

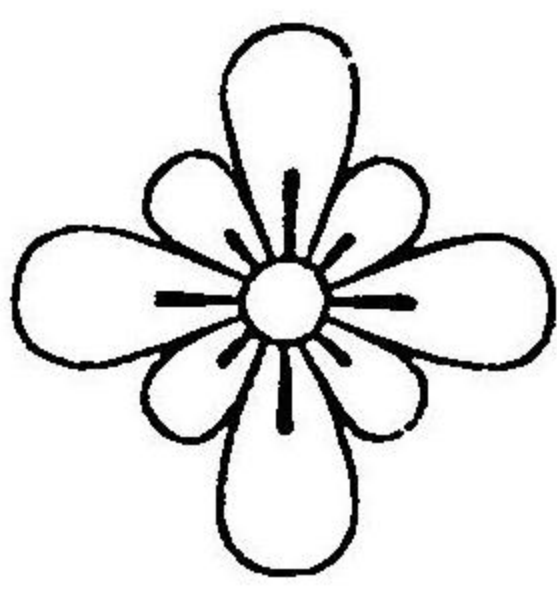
植物も多くは支那傳來の模様で、中には日本化した者、或は新作した者も有

る、動物に到つては殊に唐臭を帯びて居て譬へば、麟鳳龍馬獅鹿兔鶴鴛鴦山鵝蝶鳥鯉蝙蝠龜等、其他にも幾許か有るが首なる所は此邊で惣じて種類は少く、

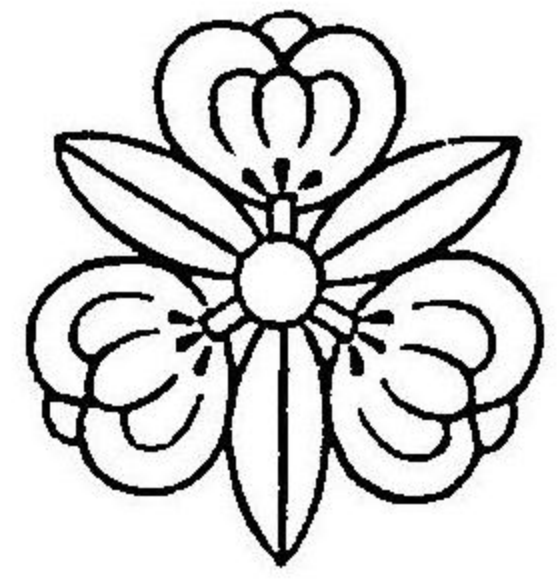
前にも述ぶる如く、植物では主として花を取つてあるが、聊か類別すれば、

- (一) 花
- (二) 葉(紅葉、笹、松葉、忍草、蔦など)
- (三) 折枝(一)花と葉と枝とを併用する者、牡丹、菊、椿など、(二)葉と枝とを併用する者、柳、若松など)
- (四) 蔓(籬、蔓、蔓唐草など)
- (五) 果物(橘、葡萄、荷、桃、蓮子、石榴、瓢、瓜など)
- (六) 動物(其他を配ひたるもの(一)栗鼠、葡萄、蝶、牡丹、花兔など、(二)菊、梅、柳、梅、花、氷、裂、花、筏、觀、世、水、に、杜、若、な、ど)
- (七) 殊に變形せしめたるもの(藤、立、涌、松、皮、菱、瓦、燈、牡丹、田、字、草、蔦、唐、草、龜、甲、な

又別に紋印と云ふ者が有る是も必ず模様から来たのであらうが、頗る植物的の者に富んで居る、而も模様としては甚だ酔興らしい梨の切口(第四圖茶)



圖四第

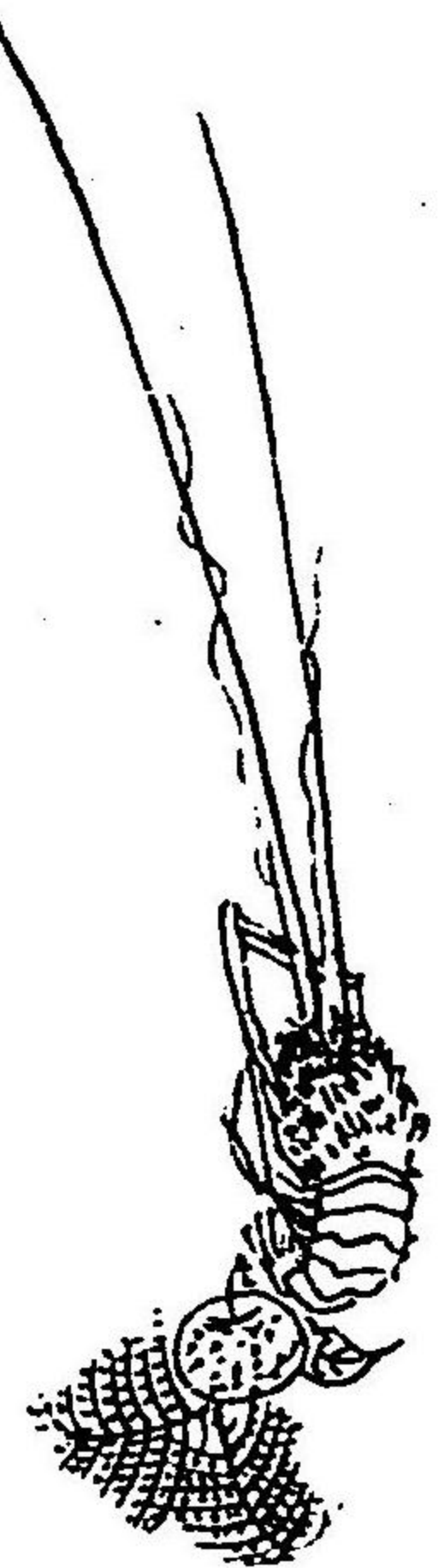


圖五第

の實第五圖(抱茗荷など云ふの迄取つてある、然し紋印は模様になける如く強ち其物を愛するから取つたとは限らぬ、其に就ては種々由來の有る者も有るけれども、多く植物を取つてあるのは事實で、其と云ふのが、畢竟植物模様有つて後の考案に成つた故であらうと察せらるゝ、以上陳ぶる所は本題の大意であつて、固より略にして備らざるのは決して十分に調べた者ではなくて、唯不圖心着いたまゝを他日研究の資に手録し

た迄の者であるから、杜撰をば深く尤め給はざらんことを冀ふ、

さい様に衣は染めん雨降れど  
うつろひ難し深く染めては



新

譜

蒲原 有明

をみな若きうつゝの夢こりは、うのあまりに幽かにして、心ばへの慧きにより、をのこの得も悟りがたき境なるべけれ。されど今わが少女をして歌はしむ、新譜二篇やがてそが竊に歌ひしところ、この折まなごしは清げに早春の野べをしが眺めさせつる。

一 おもふに夢に

おもふに夢に誰か我が  
 手にふれたりや知らぬまに  
 空は霞すめる夢としも  
 げに春はこりいふべけれ  
 知らですぐしぬこの日まで  
 りの秘めごとを樂を  
 知りてはさしも安からず  
 あゝ我胸のいつになく  
 おもふに誰かめづらしき

たよりを夢に傳へけむ  
 かしこよりとし憑むにも  
 あやなく雲がすみたる  
 あゝさばかりに何ゆゑに  
 あくがるゝ我が思ひがや  
 なれも微草よゆかしげに  
 いかゞ知りてか萌初めし  
 おもふに春に何處より  
 とほき調の傳ふとも  
 幽かなるべき絃にだに  
 うらわかみこり觸れもすれ

色し慕へばわりなくも  
 香をし戀ふればさながらに  
 されば少女のわがこころ  
 寤めてかつひに夢みてか

一一 野路よりひとり

野ぢよりひとり歸り来て  
 あやしくなぐやはづかしき  
 髪にかざし草の花  
 うれさへ秘めて得も見せじ  
 髪にかざし草の花  
 色さへ香さへさとらせじ

見せよと人の強て言はざ  
 しづかに胸にひめてまし  
 しづかにさらば秘めてとか  
 あゝいつはりぬわれながら  
 春日あまりにたのしくて  
 かくこころ胸はたちさわげ  
 波たつ胸にたよりつゝ  
 花は眠りてあるならむ  
 よしや夢みてさめずとも  
 つらき人には得も見せじ

平生無福。今五袴。



始めて蠶を養ふ記

思案外史

七四分の三といふ己の頭顱が時ならぬ頭痛の浪を起してこのまゝ紅塵萬丈の空気に暴して置いたなら終には破裂せぬまでも罅が入りさうに想はれる苦しさに僅か二時間弱の汽車の動搖にも目を瞑り耳を塞ぐやうにして早速相州片瀬の白砂青松の濱へ遁出して見ると緩く流るゝ片瀬川へ倒に影を浸せる富士の頂を一葉の片舟に掉して横截する面白さはこれまで繪にも書かれず歌にも詠まれずに残つて居るが不思議と左手に夕靄のエイルを被つて人待貌に立盡す江の島には目も興れず汀の砂に下駄の齒を埋るのも覺ぬまで唯この美しいデルタに佇むと今の今まで惱ましさに耐へざりし頭痛も倏ち岸打つ濤に洗ひ去られた如く想はれたので其後は天氣さへ好ければ濱邊へ浮れ出て藻屑搔く海人が子達と遊び戯れて居た。いくら絶景だからとて目に馴れては日倍に趣を没するばかりで頭腦の快

くなるに従ひ都戀しい心も萌し初めて亭々たる松の木の間から千古の雪を誇る富士が嶺の隠顯する様もはや椽端に出でふりさけ見るとふ勇も起らず景に對して晷の移るを忘れ果てた心も今はなかく其日の無聊に堪へざる折から勸むる人の有るのに任せて生れて爾來の一竿の風月なる者を樂まばやと出は出て見たものゝ一匹懸かるのも稀で空塚を提げて悄悄々返る日が重なる心慰める段か釣竿も何もへし折つて了ひたくなつたので今度は竿を鍬に易へて蔬菜の栽培を試みんと砂地に適する甘薯落花生の類から始めて西瓜の種子を播いて見ると好い鹽梅に蔓の生長も早く可愛らしい二顆の西瓜が付いたので鬼の首でも取つた氣で是が成熟した曉には東京の友達を招いて山蔭の井に冷したのを取揚げて一掬の涼味を頒たうなどゝ樂にして居ると未だ其大さが己の頭顱の半分にもならぬ内潮風にも當てぬやうに大事にして置いた西瓜は二顆とも其影さへ留めぬのを翌朝になつて氣が着いた時の悔しさ残念さは僕の手から鍬をば奪



ひ去つて了つたのである。  
 其年も空しく暮れて海邊だけに早くも生温い風が習々と吹くやうになる  
 と、日毎東は鎌倉、西は鶴沼邊へ散策を試みて、極樂寺に散り残る櫻を觀め、字  
 辻堂に轟き渡る砲聲を聞きなどして、春の日の菅の根も然程は苦にもなら  
 なかつた。

其も程なく飽が来て、さあ最う我が身を持餘すやうになつて、如何とも堪へ  
 難くなつて来たが、偶懇意にする江の島の神官が訪ねて来て、島の周圍に植  
 附けてあつた桑の葉の青々と繁つて居るのを見て、お慰に蠶を飼つて御覽  
 になつては奈何です若し思召があらば幸ひ神社へ奉納になつた繭の解つ  
 たのがありますから、少許持つて参りますがと言れたのである。其も面白か  
 らうが、飼ふのが難しいと云ふではありませんかと躊躇するのを、子供の乳  
 母が紙門越に聞付けて、お蠶様をお飼ひになるなら、私は在所で行つた事が  
 ございませうからと言はれて見ると、其乳母の名さへが不思議といへば不  
 思

議成程、前の名は桑といつたねと、心は忽ち其に決したのである。  
 翌朝乳母が貰つて来た蠶なる者を見ると、板紙箱の蓋に高麗鼠の糞を撒布  
 いたやう、是が一眠終つたのだと聞きながら、宛で生きて居るのが死んで居  
 るのかさへ解らぬ始末、繭こり玉のやうであるが、這麼蟲では些と氣味が好  
 くないと手さへ觸れなかつたが、乳母は早速裏の鳥へ飛出して、桑の嫩葉を  
 摘んで来て、效々しく襍などを懸け込んで、其を細く刻んだ上に、件の鼠の糞  
 を載せて、恭しく床の間に安置したが、無闇に板紙箱を動かしては可いぬとの  
 事に、只遠くから覗いて居るばかり、二日置に桑の葉を易へたが、一向召上つ  
 た様子もなく、葉が少しく萎れて居る位のものであつた。  
 一週間許経つと所謂第二眠を始めた行儀の好い蟲には違無い！整然と首  
 を揃へて身動きさへ爲ぬ寝像は、自墮落な人間とは大に違ふ。一日一晚の第  
 二眠が終ると生育も速になつて、毎日面白いやうに大きく成つて行くので、な  
 か／＼板紙箱の蓋では間に合はず、うれ／＼蓆の上に移すと、其内に桑の葉

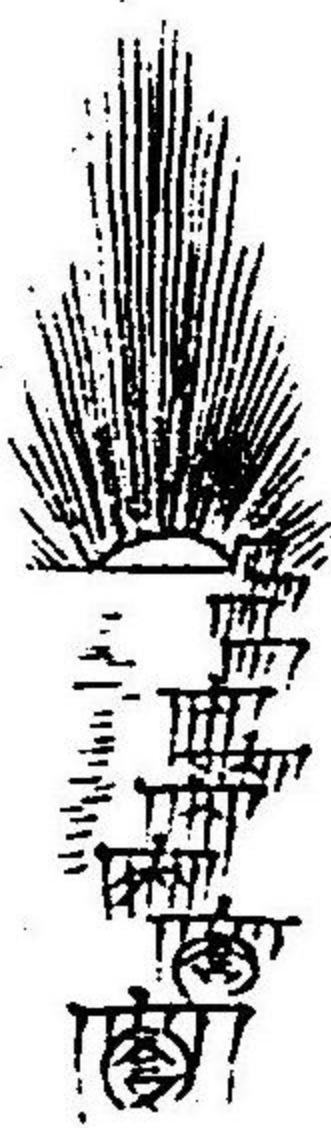
を食む音ががさ、と響くやうになつたが、人にも賢不肖の別があると等しく同時に解つた蠶にも大小の區別がある其等を大小に従つて分類する忙しさは實に退屈を忘れしむる好資料となつたが、其の席の上に撰分けられた近所から借りて来た蠶簿へ載せた光景は己の書齋も一廉の蠶室と見られたは可いが、机も本箱も文匣も皆二階へ逐上げられて了つた。怒なると日に倍し養蠶の趣味を覺えて来て、朝た床を離れると顔も洗はぬ内から先づお蠶様を見舞ふのであつた。すると大變ですく、と泣くが如くに乳母の叫ぶのを寢耳に聞いて、何事が起つたかと駈附けて見ると、前晩まで運動を續けて居た蠶の大半は慘しく其の形狀を變へて了つて、中には苦しげに擡げた首を左右に掉りつゝ援を求むる風情は見てもなかく哀で、己は唯茫然たるばかりであつたが、乳母は手早く是等の病蠶を他へ移す間も、病は非常の速力を以て傳染するものか、見る／＼内に其から其へと斃れて行くので、己も今は一生懸命馴れぬ手を貸して漸く病室送を済した後、檢

べて見れば、千以上を數へた蠶は一夜に其半を失つて了つた。奈何して這麼に一時に斃れたのであらうと類に首を傾けたが、想ひ起せば、前夜其の次の間に寝た己は、砂地の特産物として、未だ五月りこくであるに、群り競ふ蚕の攻撃疎られぬまゝに殺蟲菊粉を少許寢床に振蒔いたが、閉切て置いた紙門の隙から、其氣が蠶室へ侵入したものと見えるが、蠶の神経が恚まで鋭敏であるのに感じ、第一には江の島神社に對して、其神罰のほどの可恐しきを思ひ、又其蠶と乳母とに對しては、心竊に不注意の罪を謝して止まぬのであつた。なれども、乳母には勿論夜前の一條は沙汰無しで、相變らず奈何も不思議を反復して居たが、直に斃れた蠶は片瀬川へ流してからと云ふもの、乳母は殊に其飼養法に心を用いたので、三眠後の生育は實に面白いほどで皮を剝ぐ毎に大くなるのも愉快で、首尾好く四眠を終つてからは、いよく繭を作り始めた。

其を煮て美しい糸を獲たのは其年の六月八日で、飼ひ始めたのが其の前月の同日であつたのも、一奇と謂へば謂ふべしである。さて糸に爲て見たが、帯には少し前掛には多しで、空しく東京へ齎して今に机の押斗に藏つてあるが、この三十夕の糸が己の脳病を癒した効は、實に服み悪いカル、スバツドの比にあらずで、或る友の曰く、君のは全く蠶に養はれたのである。

(をばり)

れもふ事布襦袢に  
笑はれて



### 去年の夢

榮下老

大工の丑は不圖した氣紛から、十何年も連添ふ女房を去り却らうと考へた。其の謂と云ふのは、外に増す花らしい者が出来たのでもなければ、彼に罪も咎も有るのではないが、唯熱く其の醜い面が今更可厭に成つて、何にも恚にも耐へられぬと云ふのである。

なれども、うれただけでは如何な事にも出ず譯に行かぬ、有繋に出るとは言ひ兼ねる所から、出て行けがしに無理難題を言ひ掛けて、随分思切つて撲ちも爲る蹴も爲る、箸の上げ下しには咬んで吐出すやうに言ふのであつたが、利發で柔和の女房はうれでも熱と恠へて、口答一つ爲た事も無く、陰へ廻つては泣きく、一月二月と暮した。

是には丑も飽倦ねて了つて、後には唯手を替へ品を替へて辛く抵るのみであつたが、爰に女房に取つて未しも仕合なのは、外に引入りたい女が有ると

云ふのでもなかつたので、まさかには頸髪を掴んで表へ放り出されるやうな短兵急の理不盡にも遭はなんだのである。

然う恚うする内に其年も暮れて、一夜明けたが丑は面白くもない所から、故と大晦日にも家へは寄附かず、出先から直に年始廻に出掛けると云ふ始末。彼の最も最負になる隣町の隠居へは、例年の一番に顔を出すので、本年も不相變其へ祝儀に出た。すると、隠居は豫て彼の家の内の紛擾を聞いて居る所が、丑は又自分の非を知つて居るから、勿論出入先などへは秘隱に隠して、なか／＼暖氣にも出さぬ出したら厲然言つて遣らうと待つて居るのを、一向出さぬから言ふ折も無くて過ぎたが、段々聴くほど有るまじき丑の無體其に引易へて女房の殊勝さ、一年の計は元日に在りと云ふから、釘も打たうなら今日の事と、隠居は屹と思案して、

「丑や、れ前は未だ金盃と云ふ物で酒を飲んだ事は無からうのう。」

「へい、旦那様金盃と申しますと……」

「金無孔の盃よ。」

「金無孔の盃！ 豪勢な者ですな、難有、今年には馬鹿に運星が向いて來ちやつた、元日早々から金無孔の杯盃で御酒を載くなんと來た日には、丑の體から御光が射すくらゐの者で、先是が大丑如來と云ふんで御座いませう。」

「而も、丑や、三組だぞ。」

「三組ですわい、金無孔でさへ悚然とするのに、三組と聞いちや熱が出ますぜ。然う思ふと、何だか急に體中がぼつぼと燠るやうな鹽梅ですが、是が果報焼と云ふんぢや御座いませんか知らん。」

と丑は一富士二鷹三茄子以上に縁起がつて、獨り有卦に入つて居ると、隠居は旋て土藏から黒塗の箱を取寄せて、其中に又恭しく様箱入にして在る、其中に又白羽二重の袱紗裏にして在る黄金の三組盃を出して、黒蒔繪の盃臺に載せて、其へ推直した、丑は目を圓くして、

「いよう、光る、光る！ どうも争はれないもんで、出來立の嗽茶碗が幾多光附い

たつて恠は行きませんや。成程！山吹色とは好く謂つた。之で私へ御酒を頂戴？は、難有し忝なし、は、うゑ。

「嬢けなさんなよ。酒も可いが、儀式の事だから、先うれで屠蘇を一つな。」  
「へい、お屠蘇結構。」

「さあ、取んなさい。」

「餘り勿體なくて、何だか恠う可恐しいやうで、重々相済みませんやうで御座います。折角で御座いますから、うれちや、まあお辭に甘たましてからに、御遠慮無く頂戴致します。へい、金さん、初にお目に懸ります、眞平御免下さ。」

「何を言つて居るのだ。」

「へい、ちよいと御盃に御挨拶を。」

丑は開雲に嬉くなつて、盈々を受けた一盃を呷と引被けると、隠居は直に中ので重ねると言ふ。二盃目のも溢るゝほど注れたので、丑は心中頗る閉口し

たが、何に爲る金無孔の盃と云ふのは、是が一世一代、飲初の飲納と、我慢をして口を附けたが、實は大きに持餘して居る處へ、吸物膳が来る、燗酒が来る、魚軒や、辨松の物や、何かとちらちらと目に入る。然るに隠居は先づ其膳を自分の側の方へ片寄せて置いて、

「さあ、何だ、早く其を干して、下の大いので最一盃。」

「お屠蘇で御座いますか。」

「然とも、三組で飲みかけて置いて、一つ残す法と云ふが有るものか。さあ遣つたく。こらよ、誰か屠蘇の替だ。」

「いね、旦那様も、もう好けません。是の御銚子替は恐入りました。どうか是でもう御免を、へい、もう十分に頂戴致しました。」

「十分だつて、お前、三組へ手を掛けて一つ残すとは何事だ。必ず三つながら口を附けるが作法としてある。さあ、早く其を干して、下のを取んなさい。」

「へい、では何で御座います。實はもう戴けないんで御座いますから、些の證と

云ふ奴で、ちよッぴり注いで戴く事に願ひませう。どうぞ其で御勘辨を。」  
「然かい。うれぢや然云ふ事にして三組の方は納めるかね。」  
「へい、どうぞ御納を。」

丑は到頭二合許の屠蘇を盛り附けられた一件で頭は岑々とする、胸は懊懣する、どうやら金盃中毒の氣味で惱んで居るを、漸く鴨の吸物に灘の一本生が目の前に並んだ其の嬉しさは飛起つばかり、吾を忘れて猪口を取擧げると、縁が些と缺けて、其から直と大罇が入つて居る。婢どもの龜相であらうが、這麼物を縁起でもないと思ふから、然うは言はぬが、些と隠居の顔を見た。  
「さあ、手酌で十分遣るが可い。」

と一向氣も着かぬ様子、丑は已む無く其で一盃引被けると、上酒上燭譬へば、雖で揉むが如く喉を穿つて行く鹽梅は仁義五常の道も餘所になつて、覺えず頭を拊いて、一聲高く於戲と歎賞した、隠居は其顔を見て笑ひながら、  
「奈何だ。」

「いや、もう奈何にも恁にも謂へたもんぢや御座いません。」  
「金盃と何方が好い。」

「へい、へッへッへッへッ……誠に奈何も……人間には分相應と云ふ事が有りますから、私どもには依様此の方が勝手なんです。」

「成程のう、分相應と云ふ處に氣の着くのは感心した。然し其酒は奈何だ、不美くはないか。」

「ええ、奈何いたしまして、取でもない事を、此の御酒が戴きたいばかりに、恁して毎年御年始に上るくらゐの者で、」

「うれぢや年始ぢやない、飲倒しに来るのだ。」  
「へえ、どう相済みません。」

「うれぢや不美くはないのだな。」  
「何なら些と證據を御覽に入れませうか。」  
「善し、屹と不美くはないな。」

「是は少し氣味が悪くなりましたな。ぢや何で御座いますか。此の御酒に何か因縁が付いて、不美いに極つて居る譯でも有るんで御座いますか。」

「いや、那樣事は無いが、猪口が酷い、のう器が悪いから、酒の味が變りは爲まいかと思つて。」

「御常談被仰います。ねえ、猪口は缺けてたつて、好い酒は好い酒、いくら盃は金無孔の嫡くでも、ねえ、旦那様の前ですけれど、屠蘇と來た日には甘怠くて藥臭いの極つてまさ。どうもはや爲方の無えもんです。」

「うむ、然うか。」

「ねえ、此の丑だつて又然ぢや御座いせんか、御覽の通見掛は這麼微な野郎ぢやありますけれど、憚ながら強きを扶け、弱きを挫き……ぢやねえ、其の逆様でもつて、曲つた事は嫌後暗い事は爲ず、肚の中は是で奇麗洒然したもんで。」

「丑！」

「(5)」

「其の猪口を些と下に置け。」

「(5)」

「隠居は屹と向直つた。」

「何と言ふ、猪口は缺けて居ても好い酒は好い酒、盃は黄金でも屠蘇ぢや飲めなう。」

「(5)」

「屹と然うか、然うに違無いな。」

「へい、恐入りました。つい口不調法の處に一口戴いて居りますもんですから、へい、金の御盃の事を悪く申上げまして、誠に何とも相濟みませんで御座います。旦那様が猪口が酷いから酒が不美くはないかと有仰るもんですから、決して那樣理窟の有るもんぢや御座いませんから、其の理合の處だけを申したんで、全く以ちまして金の御盃を貶します氣なんぢやないんで御座

「解つた、理合の處を言つたと云ふのだな。」  
 「へい、然やうで御座います。」  
 「それぢやお前は其の理合を能く心得て居るのだな。其程立派に道理を辨へて居る者が、何で罪も無い女房を去らうと爲るのだ。」  
 「え、……」

丑は惕然、酔も一時に冷めんとした。  
 「聞けば、お前は那の内儀の標致が悪いから、其が可厭で去らうと云ふ了簡ださうだが、丑、それは以の外の不了簡だぞ。これ、何ぼな、手前が男に生れたからとて、贅澤も好い加減にして、措け、全體手前の處のお作は、の大工風情の女房には、職過ぎた善い氣立の、發明の働者だと、世間一統の評判だ。喩へて見れば、誰の口にも合ふ其の灘の一本氣標致、こり二の町ぢやあるけれど、りれも女として通用しない程、見ともないと云ふぢやなし、是が手前の家内で御座い

と云つて、立派に客の前へも出せる代物だ。して見りや、其の疵だらけの猪口のやうな者ぢやなからう。是能く聞けよ、女房はの内實とも云つて、字に書けば内の實だ、女郎や藝者とは譯が違ふぞ。お前方の嬉しが、其の様子ばかりが好くても、一向内の實にはならないわ。どら程面の皮がすつべりして居た、とて、氣立は悪し、働が無かつたら、うれ、金の盃に屠蘇も同然よし、か盃を飲むのでは、ない酒を飲むのだらう、それぢや、猪口は些と、鹿末でも、正味の酒が好いのだから、少しの事は勘辨しろ、よう、勘辨しろ。」

丑は俯いて何の答も無い、隠居は婢を呼んで、  
 「丑の處へ、大急で、お内儀に用が有るから、直に來るやうにと、使を遣つてくれ。聞くと、丑は駭いた。」

「旦那様、嗚を此へお呼びなすつて、奈何なさるんで御座います。」  
 「奈何するものか、俺が改めて、仲人に成つて、其の猪口で盃を爲せるのだ。」

高い山谷底見れば、吳服店

(をばり)



小袖もやう・

京の藁兵衛

机に向ひて物の本など繙き居るところへいつの間にかやら忍び寄つたる無  
二の友どち、

「これさ、又子のたまを轉して居るのか、後生だからちと陽氣にして、壁が聴い  
ても面白いやうな話を爲やうぢやないか。」

至極々々。と言ふ折しも、何處の誰がすさびにや、風がもて来る一節は、

武藏野に一むら薄穂にいで、亂れあうたる模様もあり、吉野初瀬の花紅  
葉、いまを盛と見ゆるもあり、

三河にかけし八ッ橋の澤邊に匂ふ杜若

桔梗、萱、菫、女郎花、八重山吹と薄紫の藤の花いろを争ふ花すゝき、富士と三  
保とを染め分けて、裾は田子の浦波や、吾妻からげの汐衣、汲めば月をも袖  
に持つ

様は天人りれく〜とんとろり見初めた姿、雲の通ひ路、ちらと見りめた見  
りめた姿

小紋唐草、ちらし紋、あさぎ鹿の子に、鶺鴒鹿の子、紫鹿の子に、みな人の心はけ  
しの紅鹿子、朽葉鹿の子もさふらふぞ

言葉に花をや咲せつゝ、半時ばかり語りしは、面白かりける次第なり、  
「やんや〜」

「エ、あぶない、この欄をあてにするなぞア餘り大膽すぎる。」

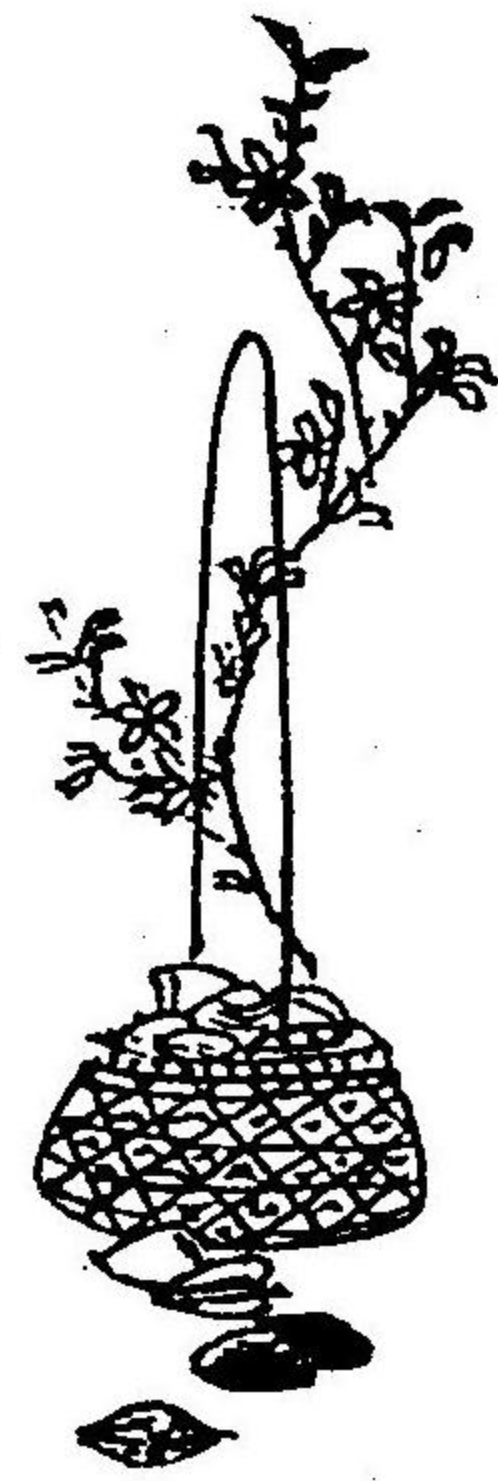
「好い聲だなア。」  
「うむ、聲も好いが、節もうまい。たしかあれは長唄の「小袖もやう」……品のい  
くものさ。」

「ウ、然りさ様は天人りれく〜とんとろり……雲のかよひ路、ちらと見初  
めた〜」  
と夢中になりて、手を拍ち、足を踏みて踊り出せば、友は驚き、

「ヤア、事だ。」  
 と叫び立つれば、さすが龔の傭婆もとつかはと階子を昇り来て、  
 「ど、ど、どうなさいましたね。」  
 「此人が唄を聞いたので調子が狂った。」  
 「オヤまあ調子がさやうで。」  
 と言ふより早く主に飛付き、ぐつと耳を振つて、  
 「轉軫が一つ足りない。」

花嫁の春着模様の若草も

きのふにけふと延びる年禮



あせい重 簞 笥

追羽子の袖ひるかへす美人哉  
 釣鐘に袖觸れつ春さふき寺  
 振袖に東風吹く軽し女坂  
 憂きに舞ふ袖の春風亂るくや  
 かいしよなく霽るく袖や揚屋まで  
 門口や袖の雪など拂ふ音  
 雪洞や袖口さふき長廊下  
 曉の鶯替へて來た袂かな  
 紅葉

麥 鏡 西 活 柴 霞 大  
 人 花 男 東 今 山 羽

きぬくの猫に袂は無かりけり  
摘草の土ぶちまけし袂かな

麥人  
風葉

軒並や初あきなひの衣紋つき  
出代の衣紋つくろふ軒端かな

紅葉  
洒石

突はつす羽子やひやりと衾の中  
遣羽子の墨たらしたる白衿や

去つく  
秋聲

離に向ふ襟かきあはす女かな  
春寒や社頭に帯を捜る錢

霞山  
南岳

摘草の帯曳いて居る女かな

麥人

春の夜や巨蟒ナメに化せし女帯  
閨の戸や帯の間から散る櫻  
藤の花姉女が帯の解け初めし

活東  
黃雨  
紅葉

紅裏やひんな男の春寒き  
紅裏の少し焦けたる懷爐かな  
紅裏の春待ちかねて燃ゆる哉

我堂  
麥人  
冬湖

風やふれ衣ウツ浣れたる日暮かな  
風呂敷に餘りて見ゆる春衣哉  
戀ころも抱きまめけり二日灸

霞山  
麥人  
愚佛

半纏の下にかゝへし根ふか哉  
 櫓の火に濡れし上着の烟る哉  
 盛衣成りて春待ち佗ふや白拍子  
 綿少し出と羽子板の押繪かな  
 つきはてと手鞠の糸の纏れける  
 糸屑を丸めて御事納かな  
 小さなる風を揚ぐるや木綿糸  
 白無垢に春寒き日を嫁入かな  
 簀入の二股フタゴすくろに匂ひけり  
 友禪の蝶や舞出てと草の春

麥人 霞山 愚佛 翠美 斜汀 麥人 愛人 南岳 苔花 愚佛

出代や木綿鹿子に夕つく日  
 赤き青き布さらしけり春の川  
 うくひすや羽織着よなら一つ紋  
 海苔炙る妹か帯せぬ羽織哉  
 年々や花に負かぬ着道樂  
 着道樂さてなん紙子着たりける  
 花に酔うて御覽の如き寐皺哉  
 光る君春の宵寐の寐皺かな

黃雨 活東 紅葉 紅葉 霞山 紅葉 麥人 翠華 麥人

唄姫や綺羅ふりはへて初芝居  
常綺羅や鯛味噌や市に小柴垣

洒石  
紅葉

過きかてに草摘みなるや小前垂  
來てとまれ霞待ちなる小前垂

紅葉  
竹冷

小豆粥いはふや禪取敢へす  
赤い禪借りて下り立つ汐干哉

霞山  
無黄

花足袋の南枝はしめて幼稚園  
聳殿の足袋の白さよ夕月夜

紅葉  
烏黒

手拭の赤い汐干の女房かな  
手拭につくみ餘りし榮螺哉

竹冷  
無黄

遠足の袴はらへは木の葉かな  
霜解や庄屋の袴の尻さかり

大羽  
竹冷

粥杖や逃くへき裾の長かりし  
冬籠る日敷を裾の小皺かな  
簀入の肩揚とれて返りけり

南岳  
大羽  
無黄

よべ降りし雨を着瘦の柳かな

活東

薄着好し君青柳の楚々として

紫明

越後屋吳服 (江戸名物詩)  
兩側一町三井店。小僧判取帳場邊。  
半時商賣何千貫。知是繁昌江戸花。



黒 紬

(一)

紫 紅  
葉 明

小 説 九一

乍早速一筆申入候、扱其後は如何被暮候哉、當方一同無事に罷  
在候間、何卒御安心有之度、然者此度は誠に夢とも何とも案外  
の仕合にて、俄に一家再興の運を開き候と申すは、別儀にも無  
之、兼々噂有り候中備鐵道事、今般愈敷設の運びに相成候が、  
右線路は岡山、真金、總社、湛井、美袋を通り、當地は落合よ  
り川向を行く筈に聞及び居候處、落合の鐵橋架設不都合の由に  
て模様替と相成り、即ち同所より霜山を墜道に貫き、松山村、  
樺坂の下に出候やう改り候、就而は樺坂下の持地悉皆買上と申  
事に相成候へば、承知の通り廢物同然の地所にて直賣も出來不

申、内々持扱ひ居候折から、屈竟の相手と存じ、精一杯高直を  
 申出し、段々會社とも交渉の末、金二萬圓にて相談整ひ、早速  
 賣渡し候次第に有之候、實は彼の地面の事なれば、五六千にも  
 相成候は、申分無之存候處、我ながら不法なる言直にて無異議  
 買上に相成候事、同會社の重役を勤められ候當地高桑氏の盡力  
 少からざる義と喜入候、近年諸事業とも失敗を重ね、未々の見  
 込も覺束なく、日夜心痛に不堪際、不計も箇様の幸を得候は、  
 全く先祖の冥助に依る事と被存候、此分にては最早齟齬致し候  
 にも及ばず、家内安樂に遊びても過され可申と、老後の思出不  
 過之候、然者向後其許への仕送も十分に可被盡に付、何卒御安  
 心被成度、猶又田沼より借入候分も、早速返辨致候、扱其許に  
 は上京以來一度も歸省不致事に候へば、追而冬期休暇の節は、  
 是非歸國相成候て、共に信貴家再興の幸運を御祝ひ被成度、來

年の正月こそは、其許出生以來の誠に目出度々々々春に候へ  
 ば、必ず歸郷可然、休暇迄には旅費、着替等も差送り候間、左  
 様御承知可被成、委細は久々にて面會の上緩々可申述候、先は  
 不取敢吉報迄早々、

十二月七日

父方

全太郎殿

此の通知に會つた信貴全太郎ほど世に幸なる者は有るまい。彼は  
 身を立てんが爲に、故郷なる備中の高梁を去つて、百五十里の遠  
 い東京に笈を負うて出たのは、今より四年前であるが、其の當時  
 は未だ故郷の活計も裕で、月々送らるる物も相當であつた所、一  
 年の後父が牧牛會社と云ふのを興して、太くも失敗してから、は  
 たと仕送は削減せられ、下宿屋に居かねては寺座敷に自炊した  
 り、一時學校を廢めて獨修を企てゝ見たり、伶仃として孤影を友

に久しく苦學の窓に吟哦して居たのである。其間は親兄弟俱難義と云ふ始末であれば、固より彼の胸中に寸分の恨と云つては無かつたけれども、恚成つた一家の零落、就いては、始終少からぬ悲を抱いて、折に觸れては身をも世をも憐みつゝ暮して居るのであつた。然るを天は此度此の不幸を救つたのである。

是からは再び前の如く自由な修學が出来やうと、彼が前途の望は忽ち金色の光を放つて輝くのであるが、差當つては國に歸るといふ一條は、更にく謂ふ可からざる愉快を與へた。誠に乏しい仕送の中では、何程歸省したくても、然うは成らぬ、同郷の友や知人達は、遠方の所を物ともせず、多きは一年に二度、少きも一度は必らず還る。其の羨ましきは、渴者の水、病者の藥に於ける、なか／＼其にも遜らず居ながら、さて真似は爲かねて、彼は心の底から諦め抜いて居たものを、夢か現か、自か他か、寐耳の

水に今度其事が我身に遂げられやうと云ふのであるから、歡喜は胸に満ちて、餘つて、溢れて、寐ても覺めても居らるゝのではな

さて何を土産にしたら可からう。此の背丈の伸びたのや、理屈ほく成つたのなどで父母の満足は買はれやうが、近所隣へは甚麼物が悦ばれるであらう。先づ那處へ行、那處へ招れる、又那處でも歡迎するであらうし、未だ那處も有る、此處も有つた、誰に逢ふ、彼に會ふ、と那樣事などを考へながら、夢のやうに十日ばかりを過す中に、月の廿日には約束の金子、衣類が届いた、其金は未曾有の額で、其の衣類は綿まで新の絹物づくめ。學校は廿二日から休課なので、其日を待つて土産物を調へたり、暇乞に廻つたり、二日掛つて、いよく廿四日の午後六時の新橋發で、東海道線から山陽道筋を下ることに定めた。



真白い支那靴の上に、花絨緞の大形の提鞆を載せて、其傍には絲張の蝙蝠傘と、赤皮の深靴の買立のが揃へて在る。其等を置いた床の間の正面の窓下に煖たさうに白毛布を敷込んで、信貴は國へ立つ日を得んと待構へて居るので。

今日は國の届き物が有つて、から四日目の朝で、彼は親の惠の籠つた手織縞の小袖の上に、黒袖の三紋の羽織を着て、白の中幅縮緬の兵児帯に真新しいニッケル時計を挟んで、心は疾にも故郷の空に飛んで、可懐の両親、可愛の妹弟に逢つて、既に物語をも始めて居るのであらう。恰も勇ましい掛聲の車が通つたので、彼は目を舉げて窓の外を見遣たつが、師走の空は亘々と澄切つて、風も無く日の麗かなのを、懸る雲もあらぬ己が心の晴朗なるに思ひ比

べて、彼は恍惚と成つた。

「此のお方がお目に懸りたいと有仰いますか。」  
と婢の持て来た名刺を見ると、都留信三と有つて、信貴が久しく會はぬ同窓の友である。

「あゝ、これへお通し申してくれ。」

彼の毛布を展べて待つ程も無く、都留といふのは洋服扮装の大男で、挺然と入つて来た。

「やあ、久瀧。」

「どうも御無沙汰。御機嫌好う。」

「此通りの機嫌です。」

「偉い元気で恐入つた。」

都留は穿袴を引揚げながら其處に坐つたが、近視眼の目鏡越にも信貴の様子の變つたのが映じたかして、床の間の荷物と彼の姿と

を見比べながら、

「君何爲たんか。」

「奈何も爲ないが、些と國へ行て來うと思つて。」

「歸郷する？何日。」

「今日。」

「今日？」

彼は目を瞪つて信貴の顔を視たが、信貴は唯打笑むのみなので、抑も此人の下宿を上等にしたのさへあるに、服装と云ひ、景氣と云ひ、總てを盛にして歸郷するとは、決して唯事ではあるまいと考へた。

「何か國に變つた事でも有るのかね。」

「いゝや、久しく國へ行かんかつたから。」

「遊びから。」

「まあ那樣ものさ。」

と言ふ口元には、悅氣の満々たるのが字に書いたやうに見える。

「ぢや、何かお目出度事でも有るのだな。譬へば金が儲つたと

か、君の妻君が出来るとか。」

「那樣事は無いさ。」

信貴は愈澄して居ながら、猶且嬉しいのが込上げて、何と無く其色

が面に出るのであつた。

廊下を通り掛る女中に菓子を誂へて、

「茶を飲みたまへな。」

「難有う。君の國は岡山だつたね。岡山は池田新太郎光政か。」

「所が……。」

「違ふかい。」

「岡山も縣が附くのだ、國は備中で、高梁と云ふ町さ。」

「高梁?! 餘り聞かんね、好い所ぢやないと思へる。」

「怪しからん、結構な所さ。」

「奈何だか、餘り然でもなからう。」

「全くだよ、なか／＼繁華な所で、戸数が三千の、人口が一萬、先づ備中では第一だ。」

「然う／＼那樣所が有つたつけね、地理書で覚えて居るよ、微かに。」

「心細いね。どうぞ又自然お通掛りの節は。」

「御立寄り下さいか。まあ御免を蒙りませう。中國筋なぞ聞くと、人を裁めて立退く道筋だ。」

「不相變口が悪いね。然し、君、物は試しと謂ふぢやないか、奈何かい、僕と一所に遊びに来給はんか。」

此の一言には都留も頗る驚されたのである。

「君の國へ。」

「一所に来給へな、本當に。然爲りや歓迎するよ。」

「誰が？」

「誰と云つて、僕の家の者や、僕の友人や……………」

「郡長や、町長や、郵便電信局長や……………」

「又混返すから可かん。其外往復には京都あり、大阪あり、須磨あり、舞子あり、君の随意に遊び回るさ。」

「那樣費用が何處から出ると想ふ？」

「それは僕が立替へて置く。」

と言つたが、信貴も有繋に我ながら口幅つたいと、直に思返した

ものゝ、又全く其の成らぬ境遇でもないよ、なか／＼心に誇るの

であつた。

「本當かい。」

貧書生から紳士に成澄した此人に、抑も甚麽事情が有るか知らぬけれど、是は餘りに信じからぬ高言である、都留は疑はずには居られなかつたのである。

「本當さ、僕は少く譯が有つてね、此頃其位の費用には堪へられるのだ。」

彼は對手の面を瞞めつゝ笑を含んだ。

「まあ止しませう、後で緊急徴發を吃ふと驚くから。」

「いゝや那樣事は爲んよ、決して爲んから心配せんで來給へ。」

「うむ。」

彼は些と考へて、

「僕はね、實は昨今家が虚けられんのだて。阿母が宇都宮の方の、僕の姉の處へ行つてね、其處に子が生れると云ふのだから、暫く歸つて來ない。然でないとお供を爲るがね。」

「然うかい。うれば残念だね。」

「何、僕が居ないからつて差支は無だけれど、今度は旁阿母が此冬は家に居ろつて、言ひ置いたんだ。」

「其の通りにする君でもないぢやないか、是非來給へな。」

「いや、然うも可かん。」

時に菓子が出たので、都留は早速一つ摘んで、

「御馳走になるよ。」

「どうぞ澤山遣つてくれ給へ。うれぢや、まあ君の行かんのは可いが、東京に居つて何か面目の事があるのかね、正月は。」

「格別無いね。」

「無からう。」

「然し陶山の所で骨牌會がある。」

「又？」

「うも。」

「然かね。」

「然し君が見仁んど、惜むべき撰手を失ふ譯だが。」

「いかにも。」

彼は微笑みながら非らぬ方を睨めて居た。

「君の國の方ぢや骨牌は遣らんかね。」

「遣るよ。」

「此方のやうにねね。」

「然だ。」

信貴は他を向いたまゝで急に思凝して居る様子。都留は時計を出して見ながら、

「君、今日の何時に立つか。」

「……………」

「君！どうか爲てるね。」

と、些と信貴の指を弾くと、

「僕？僕は……………」

彼は慌てゝ振向いたが、何を言れたのか實は知らぬので。

「何時に立つんだよ、今日。」

「今日かね、今日は六時だ、晩の。」

「然かい、ぢや未だ間があるな。」

信貴は聞えぬ振で、

「陶山には久しく會はんが。」

「僕は今日も會つた。」

「うれで骨牌會の事を聞いたのか。」

「然う。」

「例年の通り盛に遣るのか。」

「例年より盛ださうだ。」

「ふうん。」

彼は又もや非らぬ方を見つゝ何にか太く心を奪れて居る。

「ぢや、まあ無事に行つて來給へ、僕は失敬するから。」

彼は急に膝を立て、起たうとするので、

「まあ可いぢやないか、飯でも食ひに行かうよ。」

「いや、今日は然しちや居られん。是から親類へ廻るんだ、根岸

の方へ。」

信貴は殘惜しさうにして彼に續いて起つた。

「君、陶山に會つたら宜しく言つてくれ給へ、御不沙汰を爲て居

るつて。」

「宜しい。」

彼等は打連れて部屋を出た。

「然しね、僕も事に由つたら、東京に居るやら分らんよ。」

意外の詞に都留は驚きながらも、信貴が唯打笑んで居る面を讀ま

うとして、

「奈何して？」

「奈何と云ふ事は無いけれど、少し都合があるんで、其の都合次

第で、或は立つのを延すかも知れんのだ。」

「はあ、然かい。」

共に椅子を下りながら、都留には如何にも彼の詞が解せぬのであ

つたが、今問ふ限でないと思つたらしい。

「ぢやまあ、左に右御機嫌好う。」

「難有う。りれぢや失敬！」

「失敬！」

信貴は見送りもあへず己が部屋へ引返した。

(三)

引返すや否や信貴は荷作を解いたり、鞆の物を出したりなどして、其の倉皇として居る中で、又惘然考へて見たり、急に元氣付いて見たり、正に一場の喜劇を演ずるのであつた。

彼は都留から洩された陶山の骨牌會に就いて、其の席上に最憐む人をば今圖らずも懐ひ出して、其人に逢ひたさばかりに、國へ歸るのは一時見合せて、來ん春の其の骨牌會に臨まん歟、と、遽に氣紛がしたので。國へ歸るのは後れても時を誤るのではない、骨牌會は此度外しては更に一年を待たねばならぬ。年に一度よりは見られぬ戀人を見損じて、又次の年と云つても夜半に嵐の吹かぬものかは。其も其であるが、又是から僅十日の内に嬉しくも年に一度の花の姿が眺めらるゝ事と思へば、さあ其が係に立つて、快

く攪亂さるゝ胸の中には、家運再興の喜も、両親兄弟に逢ふ樂も置く所を失つて、姑く影を歛めざるを得ぬのであつた。

彼は又年毎に逢ふ効もあらぬ可耻しい服装の、常に碌々たる一塞生であつたのが、今年は幸に人がましい形をして居るものを、同じ逢ふならばと、別して此度を難易く惜むのである。而して然ほどに彼の最憐むのは、抑も何人で、又如何なる關係であるのか。

其人の名は鳴瀬清子と聞いて、彼は三年續けて逢ふ——美しい眼色の、可憐しい口元の、色のくつきりと白い、髪の麗しい、誰にも愛相が好くて、陶山の近邊の娘で、齡は十九になる——其人が彼に向つて特に盡す誠も無ければ、又彼の誠を承入れるなど云ふ那樣事も無かつたが、唯骨牌の勝負に一つの組にでも成つて、膝を交へる事が有る時に、彼の羞ぢ懼れて、其人の指にだも、袖にだも、決して觸れまいと勉めるにも拘らず、其人は更に其を心

にも留めぬ状で、勿論姿が見苦しいとて鄙めるでもなく、誠に優しく、心易く、一夜の誼も年々に深く、何と無く情の籠つたやうな動作が有つて、其が得も得はれず身に浸むやうで、其人と座を同うするのが、譬ふる者も無く楽しい。で、今其人を想起しては、彼は如何にも故郷へ立ちかねるのである。

急に下宿の主を呼んで、来る正月五日の晩は骨牌會の、其の明る朝國へ立つまで更に厄介に成らうと約した。うれから机、本箱等を据ゑ直して、何やら筆を取つて居ると見れば、急々に親許への状を認めるのである。

(四)

一夜明れば瑞氣乾坤に満ちて、萬物新玉の春ならぬ隈も無く、晝は不老門前の日影長く樂足りて、夜は又長生殿の燈の花に聚ふ骨

牌遊、うれも元日よりは二日、二日よりは三日と興は多くなつて、五日の夕の麴町平河町の陶山の家では、喧器紛擾四隣を壓するの盛況であつた。此日は暮切らぬ内から寄集つて、夜に入つては總勢廿七人の男女。信貴全太郎は例の黒袖の羽織に紺縞の節糸織、之に白縮緬の兵兒帯は、例年とは見違へるほどの綺羅であつたが、なか／＼其さへ鏡に置ける塵などの如く、座中は輝くばかりに着飾つて、見る目も文に居並んだ。然るに其中に信貴が最憐む人の影だに見えなんだのは、如何ばかり彼をして心悲しましめたであらうか。

彼は今日五時頃から来て、人々の寄せ来る間、此度は其人であらうか、此次こりは必ず其人であらうなど、裕子戸の鳴る毎に、紙門の啓く毎に、胸を轟かしたのであるが、六時になつても、七時になつても、八時になつても其人の姿は見えず。彼の心の惱は



譬へん方も無く、若や病氣でも在りはせぬか、うれとも無據い  
 差支でもあるのか、或は又餘處へ招かれて其方へ行きでも爲たの  
 か。那樣事ならば何時まで待つとも效の無い事、今の内に宿に歸  
 つて、明日勿々出發の支度でも爲やうものと、腹が立つやら、鬱  
 ぐやらで、信貴は快々として居た。  
 けれども又甚麼事で今にも來やうも知れぬと、有繫に未練の無い  
 でもなく、事の次手に十時までは待つて見やうと考へた。旋て三  
 十分ばかり有つて、恰も八時を過ること四十分、其時玄關に客來  
 の氣勢がして、嘈かしく案内されて入つて來たのは、待ちに待  
 ち、憧れに憧れた其人で、而も去年に増して又美しい鳴瀬清子其  
 人であつた。

實に人知らぬ彼の喜は、正に絶わんとする玉緒を繼ぎ止めたと  
 謂はうか、三千年に一度實る桃を獲たとも謂はうか、全身の血は

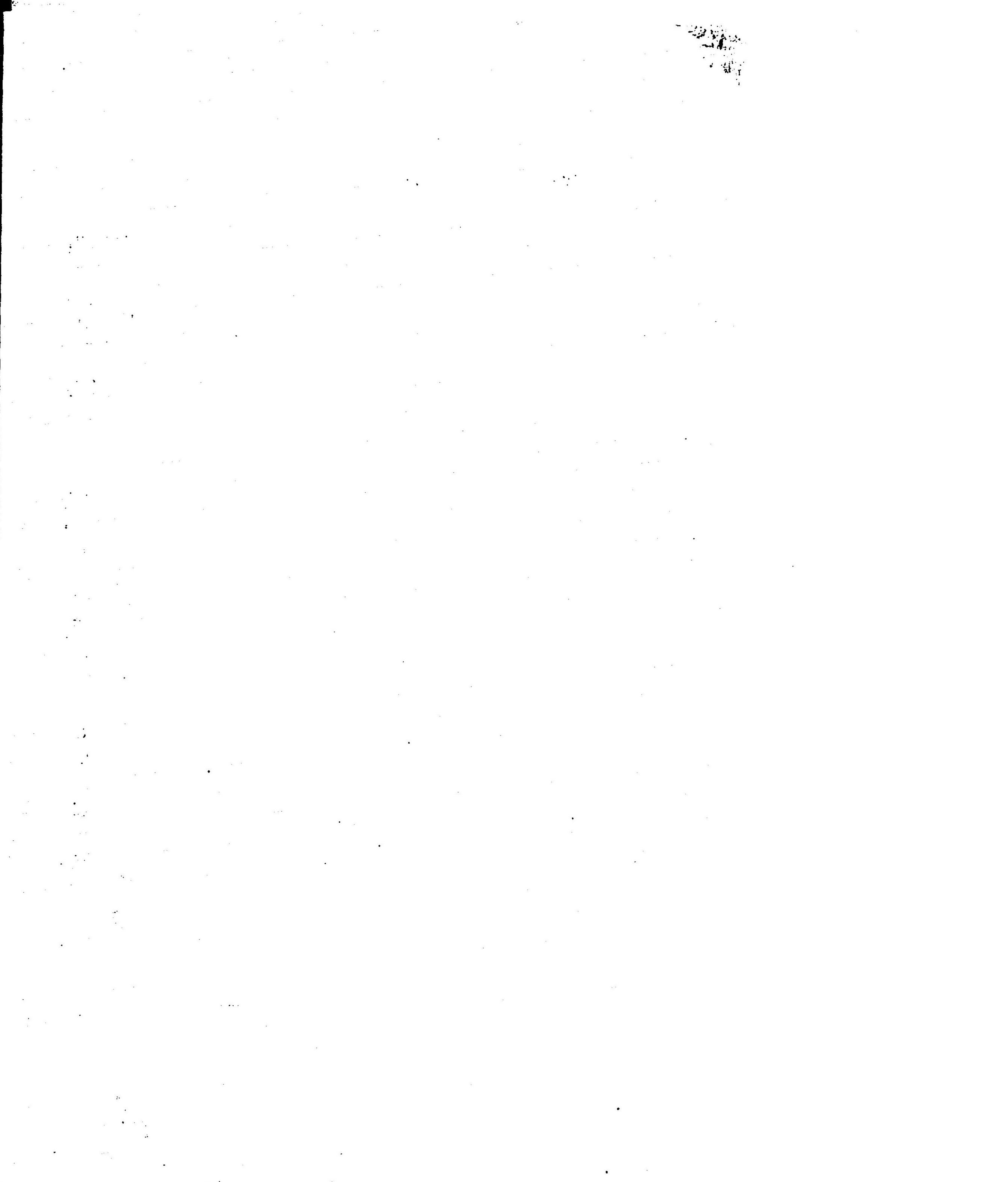
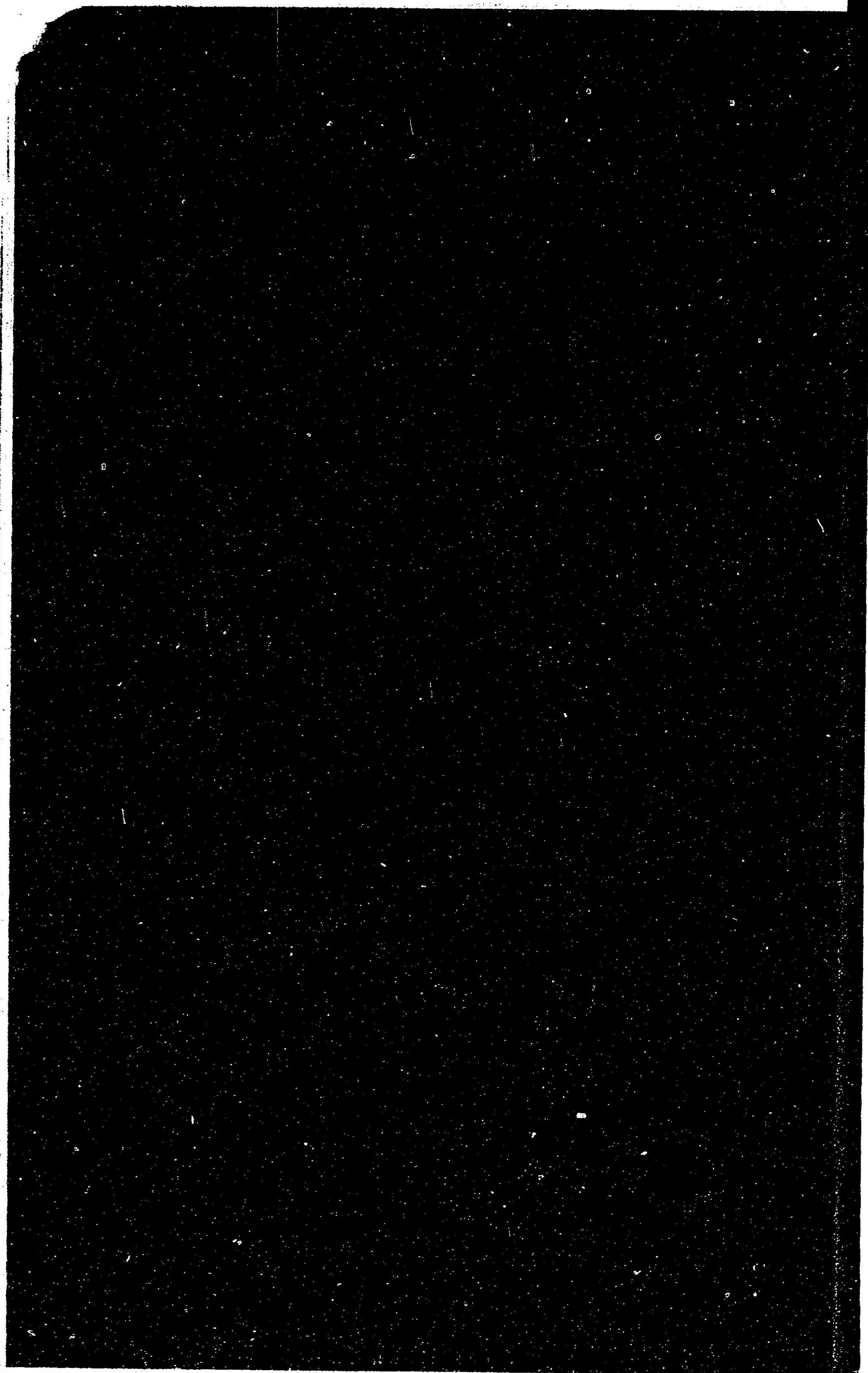
激しく波つて、幾と前後を忘るるまでに心浮立つのである。

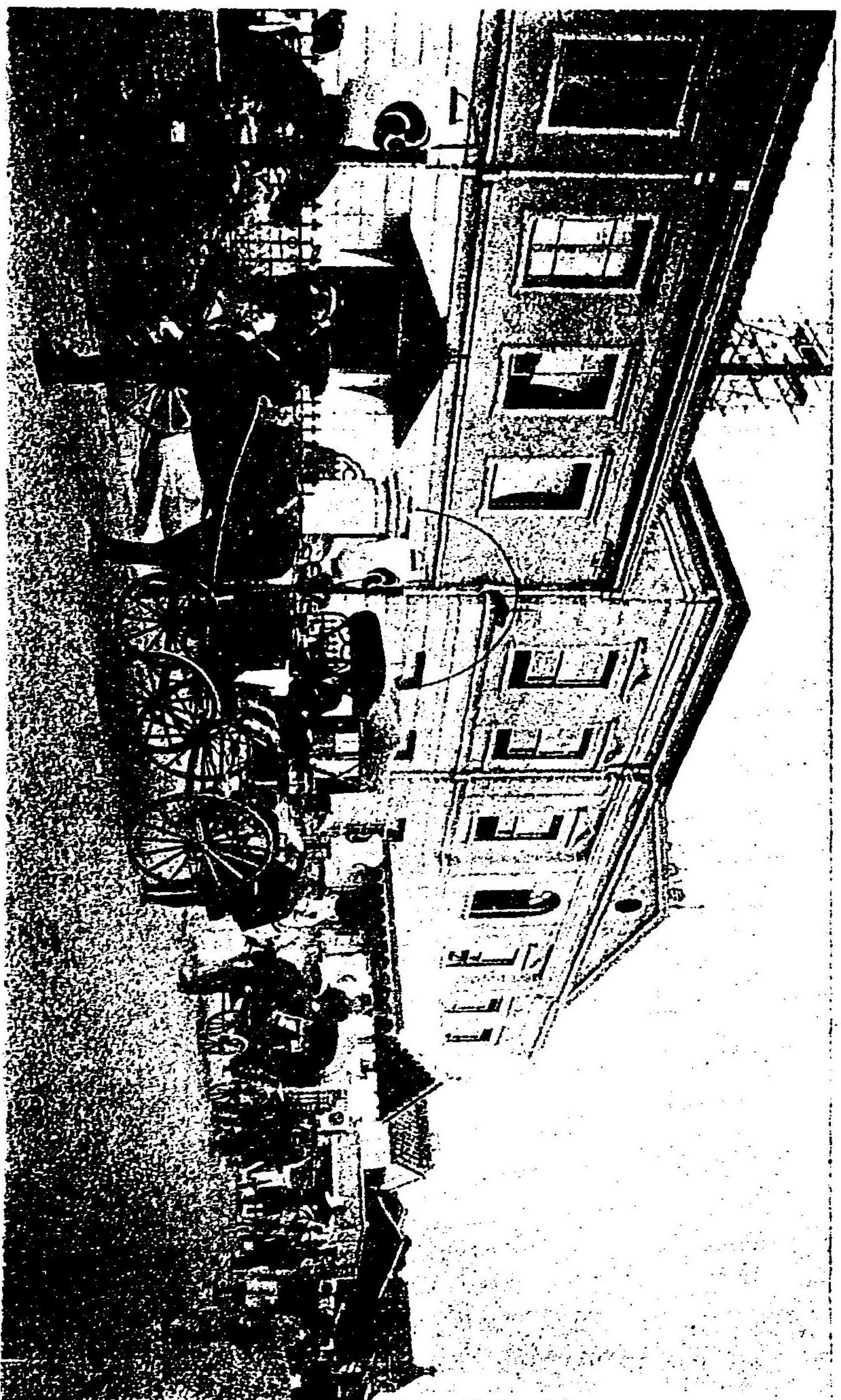
いでや、其人の扮装は薄葡萄地の雲小紋の五紋の小袖に對の下  
 着、帯は紫根縹子に雪中竹を泥描にして、紵の紗綾形縮緬の長襦  
 袢、薄紫地に金糸入模様半襟を掛けて、高島田に厚化粧の靄然  
 とした美しさは、牡丹の花に人の形を賦したるかと思へて、妖艶  
 限無きものであつた。信貴は癡の如く心を奪れて、絶か流盼を凝  
 して居ると、彼方も見付けて面を合せる途端、毎に似ぬ可羞さの  
 身に餘る風情を認めためたので、這は怪しと思ふ間も疾しや遅し、金  
 縁の目鏡を煌かした黒羽二重の紳士は、其人の夫と呼れつゝ、一  
 座に迎へらるゝのである。

其と知つた信貴の悲さは！張りつめた氣も脱然と、竊に背ける面  
 には涙さへ霑つて、恚く有るのを見んが爲に國を詐り、思を一夜  
 に懸けて此に來た事か。有繫に何時までも夫無くてある人とも覺

えなんだが、又有繋に今年に迫つて恚く有らうとは思寄らなんだ  
 不覺をば、切齒を作して悔んだのである。  
 彼は今更骨牌などを手に取る氣も没つて了つた。  
 固より己の妻に念じたのではなし、人の妻になつたからとて、  
 其の最憐さが全く消え去つたと謂ふのでもなければ、妬し悔しの  
 心苦ししい中にも、彼は仍麗しい夢に弄ばるゝやうに、然して逢つ  
 て居れば又樂さるゝので、吾にもあらず座を起ちかねて、遂に十  
 一時を聞いた。心の此に落着かぬらしい新夫婦は、其音を聞くと  
 齊しく手を携へぬばかりにして辭し去つて了つた。今は頼の末の  
 一縷さへ切れて、重き悲の胸に落ちたる信貴は、續いて陶山を辭  
 して、悄悄と外に出た。睦しく手を聯ぬる二人の影は今何處を行  
 くであらう、信貴は獨り侘しちに霜を踏んで還る。正月の夜の巷  
 は凄じきばかり鎮り返つて、仰げは閑干たる星の寒く照るのと、

聞を捲いて颯々と鳴る北風の松、竹を拂ふとの外に、哀や、彼の  
 友とては犬の子一つ啼きも爲ぬのであつた。  
 (をばり)





町門衛右新區橋本口市京東  
店本假行銀井三